

石川県埋蔵文化財情報

第 18 号

巻頭図版（古府・国分遺跡、畝田・寺中遺跡、徳丸ジョウジャダ遺跡）

平成 18 年度県内発掘調査をふりかえって..... 所長 谷内尾晋司..(1)

発掘調査略報

粟津小学校遺跡(6)

野々江本江寺遺跡(8)

古府・国分遺跡(9)

古府・国分遺跡（能登歴史公園関連）(11)

七尾城跡(13)

大槻ブンゾ遺跡、春木A・B遺跡、春木キッシュヨウ遺跡、春木ハチノタ遺跡(15)

太田 A 遺跡他 1 遺跡(17)

若緑ヒラ野遺跡(18)

加茂遺跡(20)

畝田・寺中遺跡、畝田遺跡、畝田大徳川遺跡(22)

中新保遺跡(24)

徳丸ジョウジャダ遺跡(26)

白江梯川遺跡(28)

熊坂花房砦跡(30)

平成 18（2006）年度下半期の遺物整理作業 企画部整理課..(32)

研究論文

弥生住居の想定復元 久田 正弘..(37)

法仏式と月影式 田嶋 明人..(55)

2007年10月

財団法人 石川県埋蔵文化財センター

古府・国分遺跡

写真1 調査区と能登国分寺跡（北から）

整備された能登国分寺跡とその西北に設けたトレンチである。能登国分寺跡は発掘調査で、寺域の南を画する南門とこれに続く掘立柱塀、中門、回廊、塔、金堂、講堂、寺域の北を画する掘立柱塀などが確認されている。

写真2 トレンチ2の掘立柱列

能登国分寺の寺域の北を画すると考えられる掘立柱列で、北側と南側に溝が並走している。



写真1 調査区と能登国分寺跡（北から）



写真2 トレンチ2の掘立柱列

畝田・寺中遺跡跡

写真1 調査区遠景（1a区：西南から）

畝田・寺中遺跡の西南端域に位置する調査区。古墳時代中・後期の溝には、L字状あるいは略方形に巡るものもあり、竪穴系建物の外周溝となる可能性もある。また、中世では曲物組の井戸を数基確認している。

写真2 調査区遠景（2b区：東北から）

大徳川の西側に隣接する調査区。古墳時代前期の溝等も確認されているが、調査区東半部の大半を中世の河道が占めている。



調査区遠景（1a区：西南から）



調査区遠景（2b区：東北から）

徳丸ジョウジャダ遺跡

写真1 竪穴住居完掘状況

弥生時代後期に比定される竪穴住居である。検出面での全長は長軸で約11.5m、短軸で約9.0mを測り、竪穴部のみでは長軸6.8m、短軸4.5mを測る。竪穴部を巡る覆土は周堤底面近くの覆土が残存し、検出されるに至ったものと推測される。

写真2 竪穴住居から出土した管玉未成品等

竪穴住居からは碧玉製ないし鉄石英製の管玉未成品やその製作時にでた細・碎片が敲き石等とともに多数出土している。特に約2,000点を超える碧玉製品では、荒割～穿孔後の仕上げ研磨を施す手前までに至る様々な段階の未成品を確認している。



写真1 竪穴住居完掘状況



写真2 竪穴住居から出土した管玉未成品等

平成18年度県内発掘調査をふりかえって

所長 谷内尾晋司

平成18年度は、県内全体で65件、約83,000㎡の調査（県センター23件、約43,000㎡、金沢城研究調査室5件、約11,600㎡）市町村37件、約28,100㎡、金沢大学1件、400㎡、金沢学院大学1件23㎡）が実施されました。開発事業に伴う緊急調査が46件、約65,000㎡、金沢城跡や能美市の秋常山古墳群など学術調査および史跡整備に伴う調査19件、約18,000㎡となっております。

また、地域別で見ますと、奥能登（珠洲市、輪島市、鳳珠群）12件、中能登（七尾市、羽咋市、鹿島郡、羽咋郡）13件、北加賀（金沢市、かほく市、河北郡）16件、南加賀（小松市、加賀市、白山市、能美市、石川郡、江沼郡）24件となっております。時代別内訳では、縄文時代の遺跡が7件、弥生時代の遺跡が20件、古墳時代の遺跡が22件、古代（奈良・平安時代）の遺跡が32件、中世の遺跡が30件、近世（江戸時代）の遺跡が16件となっております。

ここ数年、土木工事などに伴う事前の記録保存のための緊急調査が、県、市町村とも減少しており、平成18年度は、ここ10年来で最低の調査件数、調査量となり、昭和60年代のいわゆるバブル経済以前の水準に戻っていることが特徴にあげられます。今後、北陸新幹線などに伴う発掘調査が予定されていますが、大きな増加が見込めなく、こうした傾向は数年続くと思われます。一方、金沢城跡の調査など、遺跡の整備・保護のための確認調査が、地域の歴史遺産に対する見直しや関心の高まりとともに増加していることが、近年の特徴としてあげられます。

では、主な発掘調査について、時代別に簡単にその概要を紹介いたします。

縄文時代 かほく市若緑ヒラ遺跡で、後晩期の多数の土坑跡とともに環状木柱列跡、掘立柱建物跡が発見されました。史跡整備に伴う発掘調査が進められている能登町真脇遺跡では、以前の調査でその存在が知られていた縄文時代中期の貼り床住居跡2棟が再発掘され、全貌が明らかにされました。また、輪島市塚田遺跡では、打製石器、磨製石器、石棒など石器が多量に出土しました。石器がほとんど出土していないことから、石器を製作した遺跡の可能性も考えられ注目されます。

弥生時代 野々市町二日市イシバチ遺跡では、区画整理事業に伴う街路部分のみの調査ですが、竪穴住居跡14棟、掘立柱建物跡7棟、布掘建物跡2棟などが発掘されました。竪穴住居跡には径10mを測る5角形プランの大型建物や、布掘の規模が長さ10m、幅1mと極めて大きい倉庫と考えられる建物が含まれていることから、後期後半から古墳時代初期にかけて営まれたこの地域の有力集落と見られます。津幡町加茂遺跡、金沢市堅田C遺跡、野々市町郷クボタ遺跡、白山市の徳丸ジョウジャダ遺跡、福増遺跡などでも竪穴住居跡などが検出されており、野々市町三日市A遺跡では、方形周溝墓2基が発見されています。

また、多彩な木製品や石製品が多量に出土し全国的に有名になった小松市八日市地方遺跡が再調査され、集落を取り巻く環濠や旧河道から、鳥が描かれた土器を含む多量の弥生土器が出土しました。

古墳時代 二日市イシバチ遺跡で、集落跡に隣接して、1辺25m以上を測る大型墳を含む5基の方墳からなる古墳群が新たに発見されました。周溝の1部のみの調査ですが、大型の加飾された壺の破片などが出土していることから、集落と一体的に営まれた初期古墳群と思われます。

金沢市畝田寺中遺跡、七尾市矢田神社東遺跡、中能登町大槻ブンソ遺跡などの集落跡が調査されました。畝田寺中遺跡では、古墳時代中期から後期にかけての大溝から、多数の土器とともに農具な

どの木器や勾玉や管玉などの石製品が出土しました。また、加賀市熊坂花房砦跡では、古墳時代前期の円墳（径15m）が調査され、管玉などが出土しました。能美市秋常山古墳群では、県内最大の前方後円墳である1号墳に整備事業が、今年から本格的に開始されました。

古代（奈良・平安時代） 七尾市古府国分遺跡、千野林田遺跡、津幡市加茂遺跡、野々市町三日市A遺跡、白山市横江荘遺跡などが調査され、掘立柱建物跡や井戸跡、溝跡などが発掘されました。

加茂遺跡では、史跡指定に向けての範囲確認調査を実施しており、広範囲にわたって掘立柱建物跡などの遺構が存在することが判明し、宗教施設（加茂廃寺跡）などを含む関係施設群からなる大規模な遺跡であることが明らかにされつつあります。さらに、古代北陸道の道路跡が発見された三日市A遺跡では、道路跡からやや離れた地点から掘立柱建物跡群が検出されており、古代北陸道との関連性が注目されます。また、能登歴史公園整備計画に伴う古府・国分遺跡の確認調査では、能登国分寺の寺域の北側を画すると考えられる築地跡と溝跡が検出され、能登国分寺の寺域が西側に広がる可能性が強くなりました。

製産遺跡関係では、珠洲市大谷中学東遺跡が調査され、多量の製塩土器とともに石敷きの炉跡や粘土を敷いて整地された塩田と考えられる遺構が検出されました。古代窯業関係では、小松市豆岡向山窯跡が調査され、平安時代の土師器を焼成した土坑などが検出されました。

中世 集落遺跡では、珠洲市粟津小学校遺跡、中能登町大槻ブンソ遺跡、羽咋市太田A遺跡、金沢市畝田・寺中遺跡、白山市中新保遺跡などが調査され、掘立柱建物跡、井戸跡、水路跡などが発掘されました。

また、七尾城跡では、その城下を横断するかたちで能越自動車道が計画決定されたのに伴い、橋脚の設置位置等を定めるための事前の確認調査が昨年に引き続き実施されました。掘立柱建物跡や焼土を多量に廃棄した土坑、越前焼きの大カメを埋込んだ土坑など、極めて良好に遺構が残っており、七尾城下の構造を解明する上で貴重な成果となりました。この他、城跡関係では、白山市二曲城跡、加賀市熊坂花房砦跡が調査されました。二曲城跡では、山頂の本丸跡からやや下った所にある郭跡が調査され、掘立柱建物3棟と土坑、土塁などが検出されました。

寺院跡では、金沢市車町ミョウチン屋敷跡遺跡、小松市松谷寺跡遺跡が調査されました。車町ミョウチン屋敷跡遺跡は、日蓮宗寺院の宝乗寺が元あった場所と伝えられ、発掘により、仏堂と考えられる小規模な（三間四面）礎石建ちの建物跡が検出されました。関連する出土遺物がなく建立年代は明らかではありませんが、伝承等から中世に遡るものと考えられます。また、松谷寺跡遺跡は、白山中宮八院の一つである松谷寺があったと伝えられる場所で、その所在の有無を確認するための調査が行われましたが、奈良時代（8世紀前半）の土器が出土したことから、松谷寺跡とする直接的な確証を得ることができませんでした。

製産遺跡関係では、能登町行延窯跡、河ヶ谷ミソメ窯跡などの珠洲焼窯跡の調査がおこなわれました。珠洲市域以外では初めての発掘調査であり、珠洲古窯跡群の分布の南限にあたる河ヶ谷ミソメ窯跡では並列する2基の窯跡が確認され、13世紀前半代には既にこの地まで珠洲焼製産が広まっていたことが判明しました。

近世（江戸時代） 金沢城跡やその石垣の石材を切り出した戸室石切丁場跡をはじめ金沢城下の東内総構え堀跡（尾張町）宝町遺跡、野田山の加賀藩主前田家墓地、さらに小松城下の大川遺跡、大聖寺城下の加賀市八間道遺跡などが調査されました。

金沢城跡では、河北門復元整備、玉泉院丸石垣修理に伴う発掘調査および本丸跡、いもり堀跡の確認調査が行われ、本丸跡の調査では大規模な盛土造成の過程や初期金沢城の礎石建物等の存在が確認

されました。大川遺跡では、小松城下の北の入り口に当たる箇所が調査され、城下絵図等で認められていた道路（北国街道）跡、城下を区画する堀跡と石垣、橋脚跡などが発掘されました。金沢市尾張町地内の東内総構え堀跡の発掘調査では、規模、構造、変遷の一端が明らかにされ、時代を下るごとに規模が狭まることが明らかにされました。また、野田山の前田家墓地の調査では、初代藩主利家の墓など三箇所の地点で、墓を取り巻く堀の発掘調査が行われました。この調査で、初期の利家、松、利長の墓は共同の堀で区画されていたことや、堀の規模は、幅4m、深さ1.3mと大きなものであったことなどが確認され、深い堀と三段築成の巨大な方形の墳丘からなる大名墓の実態の一端が明にされました。八間道遺跡では大聖寺藩主の館の堀の一部と武家屋敷跡が確認されました。

以上、簡単に、平成18年度に県内で実施した主な発掘調査の概要を紹介させていただきました。本年度は、特に、古代や中世の集落遺跡、製産遺跡や近世の城下町遺跡を中心とした一連の調査の成果などを主として、多くの新見地を得ることができたと思います。



かほく市若緑ヒラ野遺跡調査風景

平成18年度 県内発掘調査一覧

No.	遺跡名	所在地	主な時代	調査原因	調査面積	担当	調査期間	特記事項
1	粟津小学校遺跡	珠洲市三崎町粟津	古代・中世	農免農道	1320	埋	10.31~19.1.12	海岸に近い中世集落、イヌの埋葬
2	大谷中学校東遺跡	珠洲市馬繫町	古墳・古代	道路建設	1150	埋	5.10~7.24	複数の遺構面のある製塩遺跡
3	野々江本江寺遺跡	珠洲市野々江町	古墳・古代	ほ場整備	720	埋	11.13~12.12	微高地上に古墳期の集落跡
4	宿神社前遺跡	珠洲市宝立町春日野	弥生・古墳・中世	ほ場整備	420	埋	5.10~6.12	弥生から古墳・中世の集落遺跡
5	七尾城跡	七尾市古屋敷町	中世	道路建設	7220	埋	4.26~19.2.7	井戸、大型土坑や町割りの区画溝
6	古府・国分遺跡	七尾市国分町	古代	道路建設	6050	埋	4.25~12.19	10~13世紀にかけての集落跡の検出
7	古府・国分遺跡	七尾市国分町	古代	確認調査	1300	埋	9.1~10.26	国分寺跡の北側地区の確認調査
8	大槻ブンゾ遺跡	中能登町大槻	弥生~中世	ほ場整備	640	埋	5.15~7.5	竪穴建物、掘立柱建物、井戸を検出
9	春木A・B遺跡	中能登町春木	弥生・古代・中世	ほ場整備	40	埋	5.15~7.5	土坑、溝を確認
10	春木キッシュウ遺跡	中能登町春木	古墳~中世	ほ場整備	60	埋	5.15~7.5	土坑、溝を検出
11	春木ハチノタ遺跡	中能登町春木	古墳・古代	ほ場整備	550	埋	11.8~12.22	古代の屋敷地、建物、井戸、款溝など
12	太田A遺跡	羽咋市大田町	弥生~近世	道路建設	1030	埋	10.16~11.27	中世の掘立柱建物と河道跡を検出
13	正友じんとくじま遺跡	宝達志水町正友	弥生~中世	ほ場整備	1000	埋	5.10~7.20	中世の掘立柱建物5棟以上を検出
14	若緑ヒラ野遺跡	かほく市若緑	縄文・古代・中世	ほ場整備	1280	埋	7.20~10.20	環状木柱列と古代の竪穴、土坑を検出
15	加茂遺跡	津幡町加茂	弥生~中世	道路建設	2500	埋	6.9~12.26	中世前半の掘立柱建物、井戸を確認
16	畝田・寺中遺跡	金沢市畝田西	弥生~中世	道路建設	5200	埋	6.27~2.8	古墳期の建物跡、木器、石製品を検出
17	三日市A遺跡	野々市町三日市町	弥生・古代・中世	河川改修	480	埋	8.3~9.4	掘立柱建物、溝などを検出

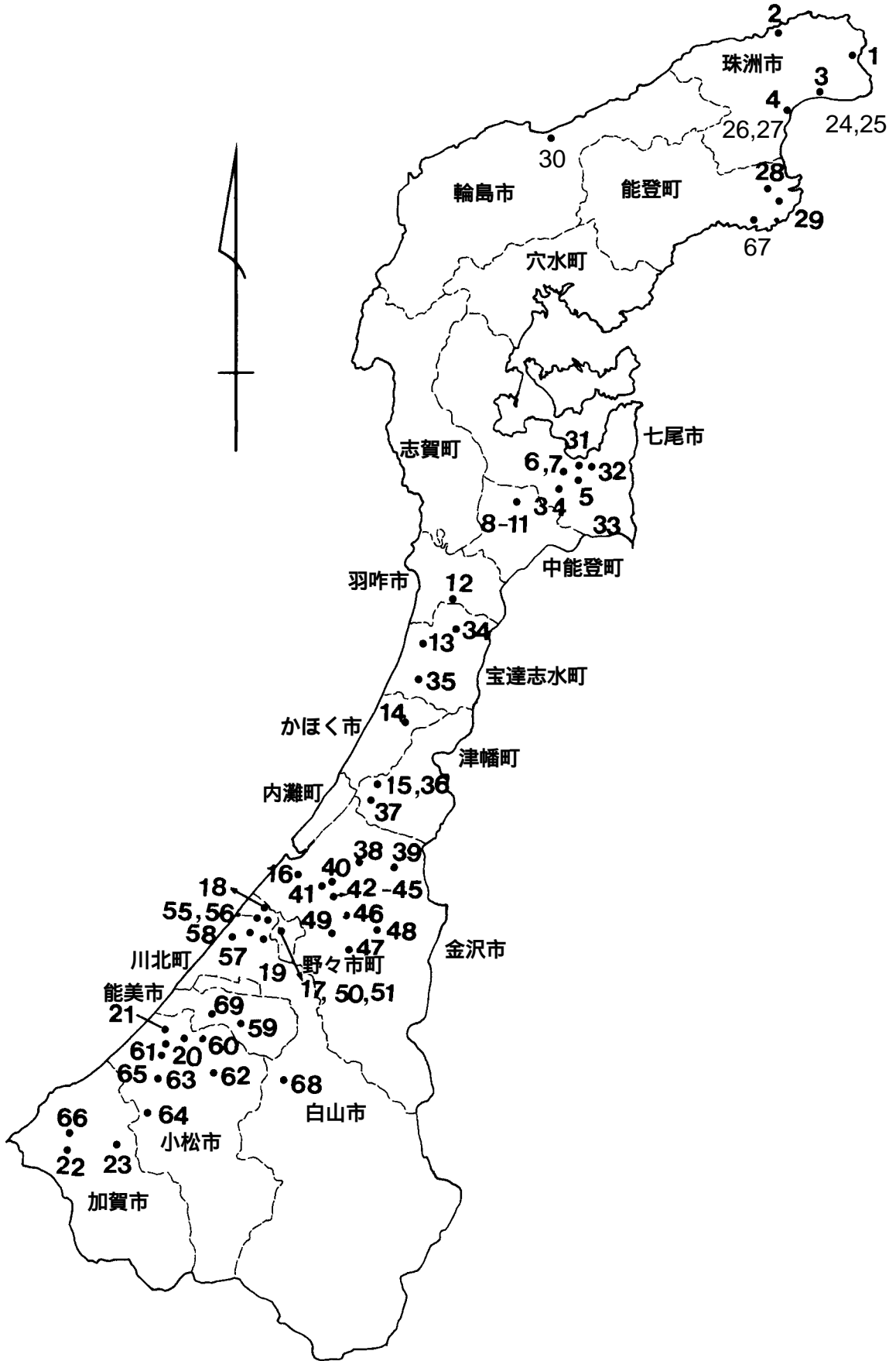
No.	遺跡名	所在地	主な時代	調査原因	調査面積	担当	調査期間	特記事項
18	中新保遺跡	白山市中新保町	古代～近世	道路建設	3330	埋	5.8～10.3	中世の集落跡を確認
19	徳丸ジョウジャグ遺跡	白山市徳丸町	弥生・古墳	道路建設	2800	埋	9.25～19.1.31	弥生後期の管玉未成品が大量に出土
20	白江梯川遺跡	小松市白江町	弥生・古墳・中世	河川改修	2090	埋	8.1～10.31	弥生未から古墳初めの河道を検出
21	大川遺跡	小松市大川町	近世	道路建設	1700	埋	5.15～8.23	北国街道の橋脚と石積みを検出
22	熊坂花房砦跡	加賀市熊坂町	古墳・中世・近世	道路建設	1800	埋	7.6～10.30	径15mの円墳と堀切や土塁
23	水田丸遺跡	加賀市水田丸町	中世	道路整備	300	埋	9.7～10.5	中世の掘立柱建物・井戸
24	野々江島田遺跡	珠洲市野々江町	弥生～中世	ほ場整備	135	市	7.10～9.7	古代を盛期とする集落跡
25	野々江中町遺跡	珠洲市野々江町	古代・中世	ほ場整備	125	市	7.10～9.7	井戸、土坑などを検出
26	高井コタマエダA遺跡	珠洲市宝立町春日野	古墳～中世	ほ場整備	162	市	9.12～10.6	集落の縁辺部
27	高井コタマエダB遺跡	珠洲市宝立町春日野	古墳～中世	ほ場整備	158	市	9.12～10.6	古代の建物跡や製塩土器を検出
28	行延窯跡	能登町行延	中世	確認調査	70	町	8月～10月	室町前半頃の珠洲窯跡を発見
29	河ヶ谷ミソメ窯跡	能登町河ヶ谷、白丸	中世	確認調査	70	町	11月～19年3月	鎌倉前半頃の珠洲窯跡2基
30	塚田遺跡	輪島市塚田町	縄文	道路建設	1356	市	調査中	石器を多量に交えた礫敷遺構
31	矢田神社東遺跡	七尾市矢田町	古墳	宅地造成	1080	市	6.6～6.20	掘立柱建物、土坑などを検出
32	万行遺跡	七尾市佐味町	縄文・古墳・中世	確認調査	77.5	市	11.13～11.27	縄文土器、カワラケなどが出土
33	千野林田遺跡	七尾市千野町	古代・中世	建物建設	2030	市	5.10～10.4	掘立柱建物跡12棟、井戸跡が出土
34	宿トリゲヤマ遺跡	宝達志水町宿	弥生～中世	確認調査	60	町	5.15～5.24	須恵器や鉄滓などが出土
35	散田金谷古墳	宝達志水町散田	古墳	確認調査	9	町	19.3.2～3.12	旧地表面を確認し、電線敷設
36	加茂遺跡	津幡町加茂	古代	確認調査	310	町	9.26～12.20	遺跡北側での建物群の確認
37	北中条遺跡	津幡町北中条	弥生～古代	区画整理	1200	町	1.25～5.31	弥生後期の溝などの検出
38	堅田C遺跡	金沢市岩出町	縄文・弥生	建物建設	650	市	12.4～12.28	建物跡などを検出
39	車町ミョウチンヤシキ遺跡	金沢市車町	中世	学術調査	200	市	6.6～7.12	寺院建物の礎石を確認
40	東内惣構跡	金沢市尾張町	近世	確認調査	30	市	10.11～11.16	堀、土居、石垣を確認
41	玉川町遺跡	金沢市玉川町	弥生・古墳	住宅建設	120	市	19.1.16～2.21	土坑、溝を検出
42	金沢城跡(本丸)	金沢市丸の内	近世	確認調査	1700	県	5.11～10.6	三階櫓の基礎石垣を確認
43	金沢城跡(玉泉院丸)	金沢市丸の内	近世	公園整備	1490	県	5.8～12.22	石垣の解体調査
44	金沢城跡(河北門)	金沢市丸の内	近世	確認調査	1050	県	7.5～12.27	礎石の確認と絵図との検討
45	金沢城跡(いもり堀)	金沢市広坂	近世	確認調査	50	県	9.15～11.1	いもり堀肩部の確認
46	宝町遺跡	金沢市宝町	近世	大学整備	313	金大	5.22～6.19	武家屋敷の一部
47	末1号窯跡	金沢市末町	古代	学術調査	23	学院	6.12～7.20	須恵器窯跡灰原の調査
48	別所戸室権現下丁場跡	金沢市戸室別所	近世	確認調査	7300	県	5.10～8.3	刻文、矢跡の分布確認
49	野田山・加賀藩主前田家墓所	金沢市野田町	近世	確認調査	75	市	9.1～9.20	堀跡を確認
50	二日市イシバチ遺跡	野々市町二日市町	縄文・古墳・中世	区画整理	7849	町	5.8～19.1.16	竪穴15、古墳5、布掘建物2などを検出
51	三日市A遺跡	野々市町二日市町、三日市町	縄文・古代～近世	区画整理	13604	町	4.14～19.2.23	竪穴・掘立柱建物、方形周溝墓を検出
52	徳用クヤダ遺跡	野々市町徳用町	中世	区画整理	665	町	4.24～6.14	中世の竪穴、掘立柱建物などを検出
53	郷クボタ遺跡	野々市町郷町	弥生・中世	区画整理	2249	町	10.2～19.1.12	竪穴1、掘立柱建物5などを検出
54	横江荘遺跡	白山市横江町	古代	工場建設	1400	市	3.27～5.31	掘立柱建物跡、溝跡を検出
55	福増遺跡	白山市福増町	縄文・弥生	道路建設	1800	市	10.11～12.12	弥生の竪穴・溝を検出
56	福増ジュッカク遺跡	白山市福増町	弥生・中世	道路建設	750	市	9.4～10.10	弥生の集落跡
57	相木カミノオキョウ遺跡	白山市竹松町	弥生	建物建設	550	市	19.2.24～3.11	弥生の土坑を検出
58	北安田北遺跡	白山市北安田町	弥生・古代	建物建設	360	市	6.21～7.26	竪穴建物跡を検出
59	湯屋古窯跡群	能美市湯屋町	古代	確認調査	120	市	19.3.1～3.30	製品の廃棄場
60	千代オオキダ遺跡	小松市千代町	古代・中世	住宅建設	69	市	11.9～11.13	古代の掘立柱建物、中世の井戸を検出
61	八日市地方遺跡	小松市日の出町	弥生	住宅建設	1300	市	4.17～10.20	弥生期土坑から鳥の絵画土器出土
62	松谷寺跡	小松市五国寺町	古代	確認調査	4000	市	11.20～12.25	建物跡、古代の遺物を確認
63	薬師遺跡	小松市矢崎町	古代	店舗建設	350	市	4.24～6.8	竪穴・掘立柱建物、石帯、粒状滓を検出
64	二ツ梨岡山古窯跡群	小松市二ツ梨町	古代	農業関連	300	市	9.19～12.12	古代の焼土坑を検出
65	上本折遺跡	小松市上本折町	中世	道路改良	28	市	19.3.12～3.31	河川部の縁辺
66	八間道遺跡	加賀市大聖寺八間道・大聖寺本町	近世	建物建設	300	市	8.7～11.3	城下町の一角を検出
67	真脇遺跡	能登町真脇	縄文	史跡整備	130	町	7.25～3.31	中期住居址2棟の発掘
68	鳥越城跡附二曲城跡	白山市出合町	中世	史跡整備	280	市	7.20～11.2	土塁、空堀、掘立柱建物跡を確認
69	秋常山古墳群	能美市秋常町	古墳	史跡整備	200	市	8.2～12.21	墓石の確認

調査担当

埋：県埋文センター
町：町教委

県：県教委金沢城調査研究所
金大：金沢大学

市：市教委
学院：金沢学院大学



平成18年度発掘調査位置図（番号は一覧表に一致）

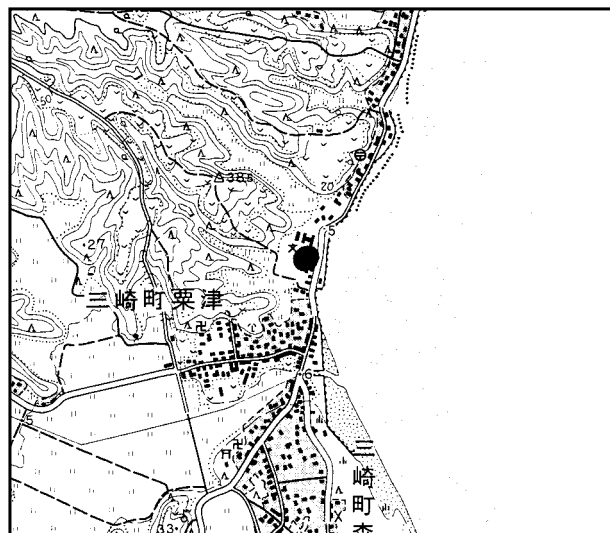
あわづしょうがっこう
栗津小学校遺跡

所在地 珠洲市三崎町栗津地内

調査面積 1,320㎡

調査期間 平成18年10月31日～同19年1月12日

調査担当 白田義彦 立原秀明



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

調査成果の要点

- ・主に中世の集落跡である。
- ・井戸枠に珪藻土を利用した石組井戸を検出、井戸の平面形は方形と円形の2種類がある。
- ・柱状高台の土師器や珠洲焼が河道から大量に出土した。
- ・中世の犬骨一体分が出土した。

平成17年度に引き続き調査を行った。前回の調査区は山際であり、今回は海に近いところで調査を行った。前回調査では掘立柱建物が中心となる遺構群を検出し、今回は掘立柱建物が少なく、土坑・溝を中心とする遺構群を検出し

た。土器様相も前回と異なり、今回は柱状高台の土師器が多くみられる。

中世(推定も含む)の主な遺構・遺物を紹介すると竈跡(SX6)、円形石組井戸(SK1)、方形石組井戸(SK19)、底部穿孔摺鉢が出土した土坑(SK6)、土師器椀と柱状高台土師器が重なって出土したP42、犬骨が出土したSX1などである。時期は遡るが、古代の製塩土器溜まりも検出した。

円形の石組井戸は深さ約1mで、底に長方形の木製水溜が出土した。方形の石組井戸は深さ約2mで、底の水溜容器はなかった。犬の体長は50cm弱で、頭骨の位置がやや不自然な状態で出土した。

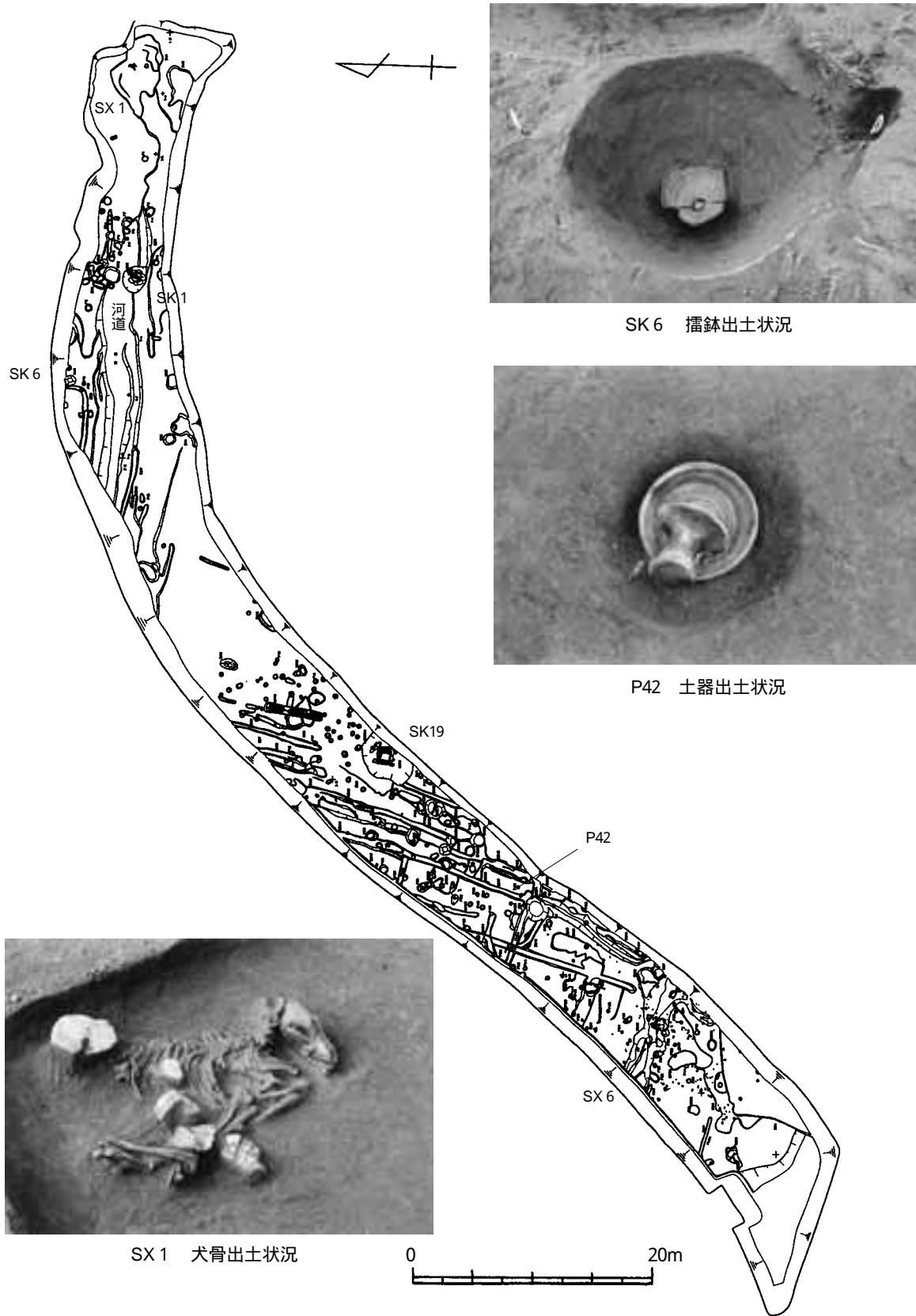
遺構の切り合いをみると河道を切って円形石組井戸が掘られているので、河道が廃絶した後、石組井戸をもつ集落が営まれる。河道から非日常的土器と言われるカワラケや柱状高台土師器が多く出土したことから、河道廃絶後、中世集落の性格が変化しているのかもしれない。(白田 義彦)



SX6 完掘状況



SK19 完掘状況



SK 6 掘鉢出土状況

P 42 土器出土状況

SX 1 犬骨出土状況

調査区平面図 (S = 1 / 500)

野々江本江寺遺跡

所在地 珠洲市野々江町地内

調査面積 720㎡

調査期間 平成18年11月13日～同年12月12日

調査担当 松山和彦 谷内明央



遺跡の位置 (S = 1 / 25,000)



鞍部に挟まれた微高地 (南東から)



遺跡完掘状況 (西から)

県営ほ場整備事業野々江地区に係る調査である。本遺跡は飯田湾へと注ぐ金川右岸の沖積地に立地し、旧のと鉄道本線に平行する東西に長い調査区である。検出面の標高は2.4～2.9m、地山は褐色粗砂層であった。古墳時代、奈良・平安時代、近世の遺構・遺物を確認している。

調査区西側では土坑や溝を検出した。土坑は隅丸長方形を呈し、長辺2m以上・短辺1.5m・深さ40cmを計測する。埋土は黒灰色系の砂質土を基調としており、古墳時代の土師器が出土した。湧水が激しい。溝は南北方向に走るものが多く、深さは10cm程度と浅い。杭列を伴うものが見られ、埋土は濁った灰褐色系の砂質土を基調としていた。銭貨や焼けた珪藻土ブロックが出土しており、時期は近世以降のものと考えている。

調査区中央と調査区東端で鞍部を検出し、それに挟まれた微高地を確認した。微高地は線路敷設や耕地整理による攪乱・削平を受けており、その上に浅い溝状の遺構を検出している。調査区中央鞍部の東側の肩から古墳時代の土師器がまとめて出土しており、往時、微高地上に古墳時代の集落跡が存在していた可能性が高い。 (谷内明央)



土坑完掘状況 (北から)

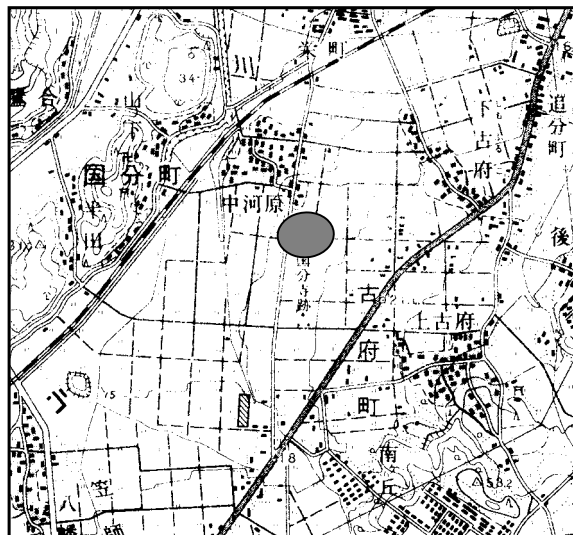
ふるこ　こくぶ 古府・国分遺跡

所在地 七尾市国分町地内

調査面積 6,050㎡

調査期間 平成18年4月25日～同年12月19日

調査担当 岡本恭一 和田龍介 空良寛 松井直弘



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

古府・国分遺跡は、邑知地溝帯北端の沖積地に位置し、標高13～15mを測る。南には国指定史跡の能登国分寺跡附建物跡群がある。奈良時代から中世に到るまで連綿と遺跡の形成が見られる場所である。

発掘調査は、一般国道159号改築（七尾バイパス）に係るもので、平成17年度から実施している。今次の調査では、平安時代、鎌倉時代の集落を確認した。

調査区ごとに見ると、I・J・K区では11世紀から13世紀の掘立柱建物、井戸、土坑などを確認し、J・K区では大型の井戸が集中することを確認した。M区では掘立柱建物、井戸、畝溝状遺構を確認した。時期は10世紀と考えられる。G・N区

では、9世紀の掘立柱建物を確認した。これは平成17年度の調査で一部が確認されていたものである。

今次の調査によって、能登国分寺の北で、10世紀から13世紀にかけて連続して集落が形成されていることが明らかになった。
(三浦純夫)



調査区配置図 (S = 1 / 2,500)



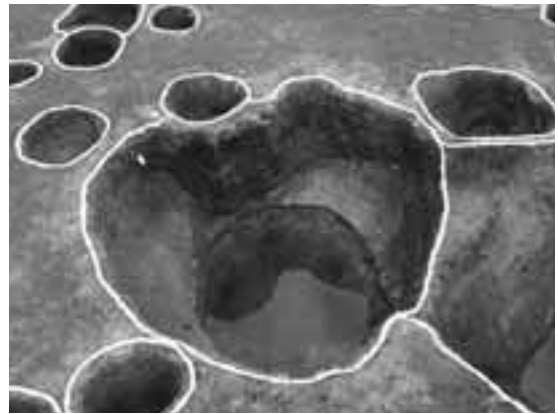
G区完掘状況（南から）



I区完掘状況（北から）



J区完掘状況（南から）



J区井戸



K区掘立柱建物（南から）



M区遺構検出状況（南から）



M区掘立柱建物（西から）

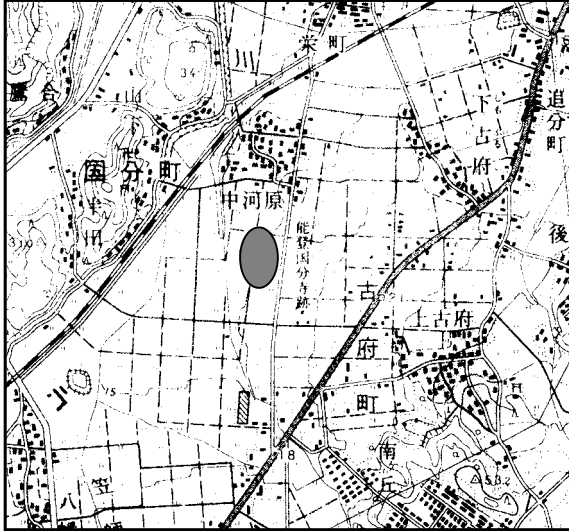


N区完掘状況（東から）

ふるこ 古府・国分遺跡（能登歴史公園関連）

所在地 七尾市国分町地内
調査面積 1,300㎡

調査期間 平成18年9月1日～同年10月26日
調査担当 岡本恭一 和田龍介



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

本遺跡の発掘調査は、都市公園事業能登歴史公園（国分寺地区）に係るもので、公園計画の策定に資するために内容確認調査を実施した。能登歴史公園の予定地は、国指定史跡「能登国分寺跡附建物群」の西に接していることから、能登国分寺あるいはそれに関連する遺構の存在が予想された。調査は、幅3mのトレンチを計5本設定し、必要に応じて拡張した。

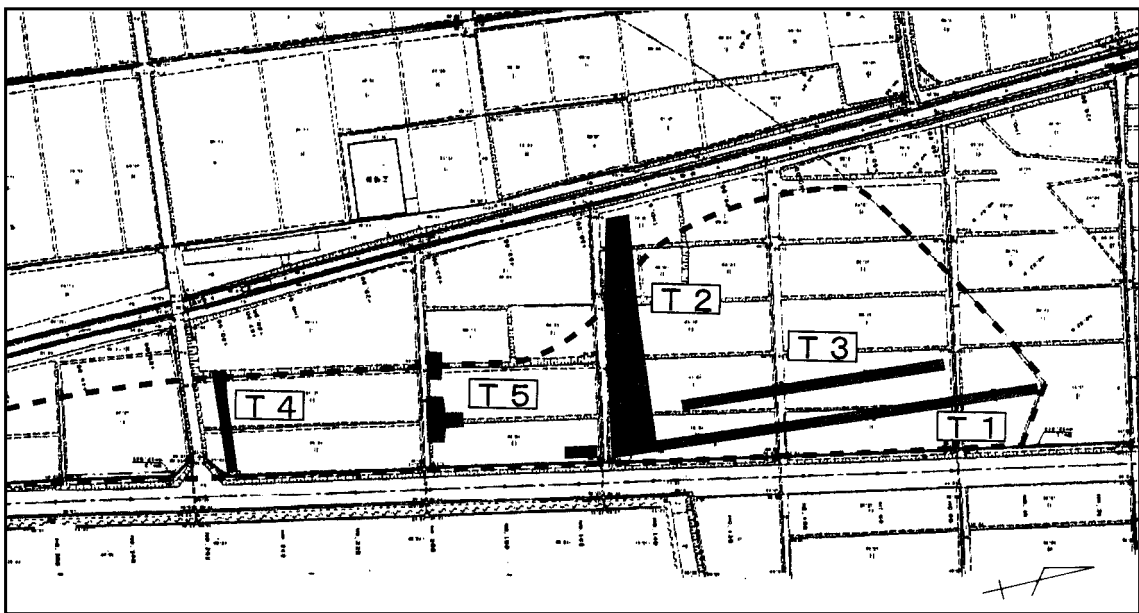
調査の結果、トレンチ2において東西方向の掘立柱列と掘立柱列に並走する溝を確認した。これらは国分寺の寺域の北側を画する遺構群と見られ、今次の調査で最も重要な遺構と判断された。以下、トレンチ2の成果を中心に報告する。

掘立柱列

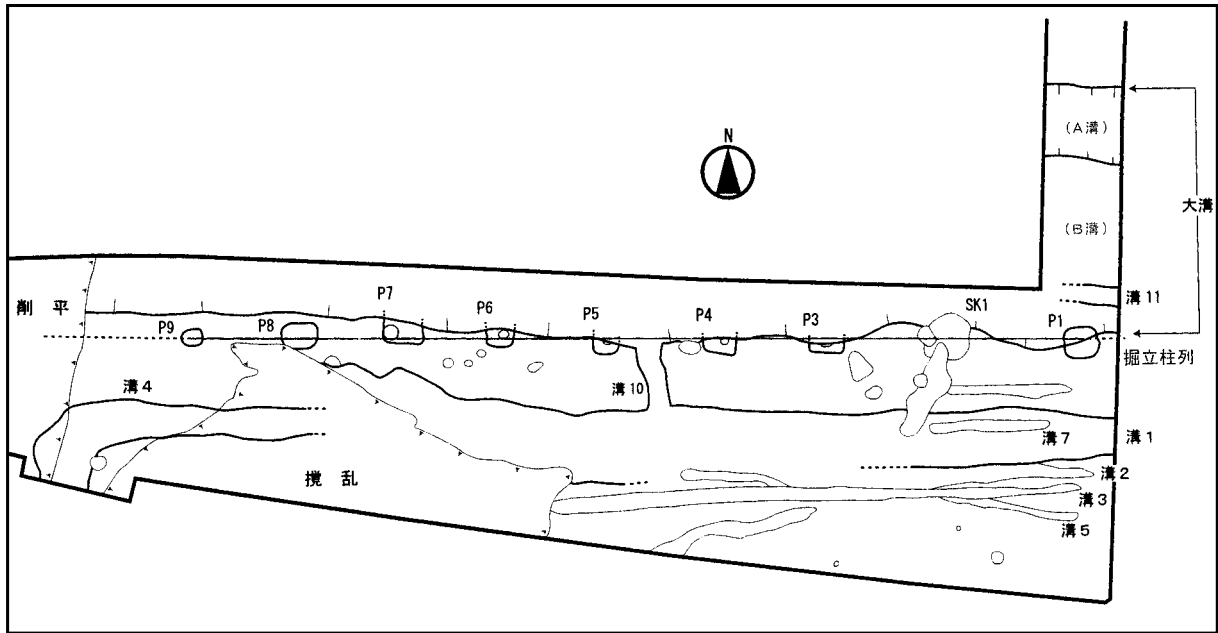
1列確認した。主軸は座標軸より92°東に振れている。確認できた柱穴は計8基で、P9より西側の柱穴は後世の削平によって確認できなかった。掘方は一辺80～150cmの方（長方）形である。P6で直径35cmの柱根を検出した。柱間は3.50m～4.66mと一定ではない。建造時期は確定できなかったが、廃絶時期は10世紀中頃と推定される。

溝1・4、溝11

溝1・4は掘立柱列の南約3.5mで柱列とほぼ同じ主軸で並走している。溝4では、ほぼ直角に南



トレンチ配置図 (S = 1 / 2,000)



トレンチ 2 掘立柱列と溝 (S = 1 / 300)



トレンチ 2 掘立柱列 (東から)

に曲がる屈曲部を確認した。廃絶時期は掘立柱列とほぼ同時期と推定される。溝11は、一部を確認しただけで時期も明確でないが、大溝以前に機能していたことが確認できた。

大溝

掘立柱列、溝1・4、溝11の北側を約1mの間隔を空けて並走する。幅約11m、深さ0.4~0.9mを測る。11世紀末~12世紀の廃絶と推定されるもので、国分寺の区画を継承していた可能性がある。

以上のように、今次の調査で能登国分寺の北側を画する施設として、掘立柱列とその内側(南側)を並走する溝(溝1・4)、掘立柱列の外側(北側)を並走する溝(溝11)で構成される遺構群を確認した。これらの建造時期は確認できなかったが、10世紀中頃には廃絶していたことを確認したことにより、能登国分寺の寺域やその変遷を考える上で大きな成果を得たと言える。

(三浦純夫)

七尾城跡

所在地 七尾市古屋敷町地内

調査期間 平成18年4月26日～平成19年2月7日

調査面積 7,220㎡

調査担当 夷藤 明 中屋克彦 金山哲哉 空 良寛 金田哲也



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

調査成果の要点

- ・ 戦国時代の井戸、大型土坑、柱穴と見られる小穴、町割り等の区画溝など多くの遺構を検出した。
- ・ 土師器、陶磁器、土製品、木製品、銅銭などの遺物が多数出土した。
- ・ 建物の建て替えや、敷地造成の状況などから、数時期の遺構が存在することが明らかとなった。
- ・ 調査地は、能登畠山氏の居城であった七尾城の城下町の一部と推測される。

七尾城は、標高約300mの本丸を中心に、尾根筋にいくつもの曲輪が設けられた、戦国時代屈指の難攻不落の山城として知られている。

その城下町については、平成3年に実施された七尾市教育委員会の発掘調査によって、道路や短冊形の屋敷地が並ぶ町並みが確認され、はじめて考古学的にその存在が明らかになった。

今回の発掘調査は、一般国道470号能越自動車道（七尾氷見道路）建設に係るもので、平成17年度に引き続き2年度目の調査である。調査対象は市道矢田郷80号線から庄津川までの延長約400mにわたる道路計画路線内で、七尾城総構えのすぐ外側にあたる場所である。

調査区の西側では、井戸や土取り穴と推定される大型土坑を複数確認したほか、建物の柱穴と考えられる小穴を多数検出している。その数の多さから建物も複数回の立て替えが想定され、他の遺構の状況と合わせ、数時期の遺構が存在していることが明らかになった。町割りに伴うと見られる区画溝も検出しているが、後世の削平によりその全貌は不明である。

平成17年度の調査により鍛冶関連工房群の存在が推定された古屋敷大池の西側の区域では、越前焼の大甕が据えられた土坑数基を確認した。こうした遺構は染物屋などの可能性が考えられ、町割りなどの痕跡が少ないものの、付近には職人たちが活動した町屋が並んでいたことも推定される。

また、この付近では、町屋廃絶後に盛土による造成がなされていることも明らかとなった。造成後は布掘り状に柵をめぐらせた施設が立地し、町屋とは明らかに異なる性格の区域に変化したことが伺われる。

七尾城の城下町については、これまでも総構え構築等に伴う城下町の再編が指摘されてきたが、今回の調査成果からも城下町が数度にわたり再編されたことが推定される。 (中屋克彦)



調査範囲全景（北東から）



土取り穴等の大型土坑



柵をめぐるせた施設



集石遺構



越前焼大甕出土状況

おおつき 大槻ブンゾ遺跡、はるき 春木A・B遺跡、はるき 春木キッショウ遺跡、はるき 春木ハチノタ遺跡

所在地 中能登町大槻、春木地内

調査期間 平成18年5月15日～平成18年7月5日

調査面積 1,290㎡

平成18年11月8日～平成18年12月22日

(大槻ブンゾ遺跡640㎡、春木A・B遺跡40㎡、春木キッショウ遺跡60㎡、春木ハチノタ遺跡550㎡)

調査担当 白田義彦 安中哲徳 森 由佳

調査成果の要点

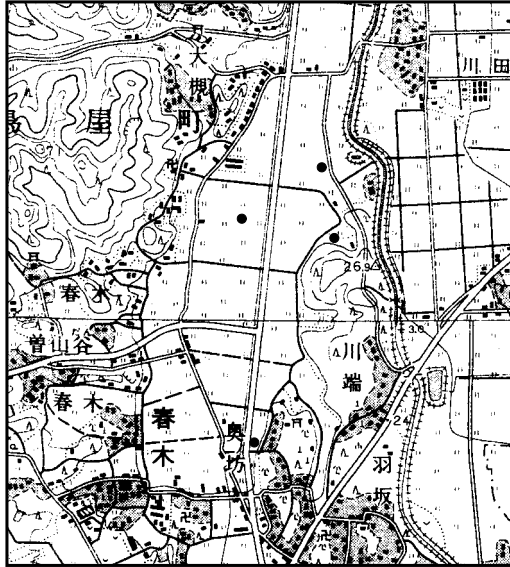
遺跡は全て中能登町北部の水田中に立地。

大槻ブンゾ遺跡 - 弥生時代～中世の掘立柱建物や竪穴建物、井戸、土坑、溝を検出。弥生土器、土師器、須恵器、珠洲焼、陶磁器、石製品、木製品などの遺物が出土。

春木A・B遺跡 - 土坑や溝を検出。周辺から弥生時代～中世の遺物が出土。

春木キッショウ遺跡 - 土坑や溝を検出。弥生時代～古代の遺物が出土。

春木ハチノタ遺跡 - 古代の堀や溝で囲まれた屋敷地内に掘立柱建物や井戸、土坑、畑の畝溝を検出。弥生土器、土師器、須恵器、木製品など弥生時代～古代の遺物が出土。



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

調査は県営ほ場整備事業鳥屋西部地区に伴うもので、パイプライン・用排水路敷設箇所や町道付替箇所、貯水池を対象としている。平成17年度に大槻ブンゾ遺跡、大槻キッチャマエダ遺跡、大槻ヤマゾ遺跡、春木マエダ遺跡の4遺跡の発掘調査を行い、弥生時代～中世までの遺構を確認した。

平成18年度は下記4遺跡の発掘調査を5～7月、11～12月の2回に分けて行った。

大槻ブンゾ遺跡

遺跡は中能登町北部を流れる二宮川左岸の水田中に位置している。平成17年度の調査では、古代(奈良～平安時代)及び中世(鎌倉～室町時代)の集落跡を確認し、一部で上・下層の2層に及び調査を行った。上層には、中世後半の掘立柱建物や井戸、土坑、溝などを検出し、包含層や遺構から、土師器や珠洲焼、陶磁器、製塩土器、石製品、銅銭、鉄滓など古代～中世の遺物が多量に出土した。

大槻ブンゾ遺跡



遺跡完掘状況 (中央から北へ)



遺跡完掘状況 (中央から南東へ)



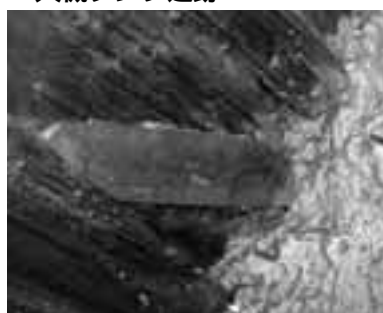
井戸枠検出状況 (南から)

平成18年度は下層の調査を中心に行なった。弥生時代後期～中世前半の掘立柱建物や竪穴建物、井戸、土坑、溝などを検出し、弥生土器、土師器、須恵器、珠洲焼、陶磁器、石製品、銅銭などの遺物が多量に見つかった。中世の掘立柱建物柱穴の中には、柱根の残っているものが多く、縦板組の井戸からは、井戸の水がよく出るためのまじないと考えられる「水従竹道流出齋」と書かれた呪符木簡も見つかった。

春木 A・B 遺跡

調査区は丘陵の裾部分にあたり、土坑や溝を検出したほか、調査区周辺から弥生土器、土師器、須恵器、珠洲焼など弥生時代～中世の遺物が見つかった。調査の状況から、遺跡の中心は隣接した丘陵上に存在し、今回の調査区は遺跡の縁辺部に当たるものと考えている。

大槻ブンソ遺跡



呪符木簡出土状況（西から）

春木 A・B 遺跡



遺跡完掘状況（西から）

春木キッシュヨウ遺跡



遺跡完掘状況（北から）

春木キッシュヨウ遺跡

調査区は丘陵の裾部分にあたり、土坑や溝を検出したほか、調査区周辺から土師器、須恵器、陶磁器など古墳時代～中世の遺物が見つかった。調査の状況から、遺跡の中心は隣接した丘陵上に存在し、今回の調査区は遺跡の縁辺部に当たるものと考えている。

春木ハチノタ遺跡

調査の結果、古代の塀や溝で囲まれた屋敷地を確認し、掘立柱建物や井戸、土坑、多数の畑の畝溝状遺構を検出した。遺構からは土師器や須恵器、木製品など古代の遺物が出土し、包含層からは古代の遺物に加え、周辺から流入したと考えられる弥生土器も見つっている。（安中哲徳）

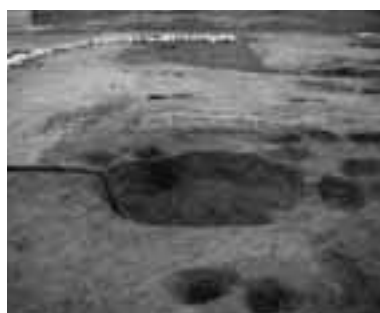
春木ハチノタ遺跡



遺跡完掘状況（北西から）



掘立柱建物検出状況（東から）



井戸完掘状況（北から）

おお 太 田 A 遺 跡

所 在 地 羽 咋 市 太 田 町 地 内

調 査 面 積 1,030m²



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)



遺跡遠景 (南西から)



掘立柱建物 (東から)

調 査 期 間 平 成 18 年 10 月 16 日 ~ 同 年 11 月 27 日

調 査 担 当 澤 辺 利 明 大 路 葉 子

能登半島基部には邑知地溝帯が東西にのび、半島を南北に分断する。この地溝帯南西部には干拓により縮小したものの、かつては県内第2の規模を誇った邑知潟が広がっていた。遺跡は地溝帯南西端にあって、南の宝達山系から北流し邑知潟に流れ込む中小河川によって形成された沖積地に位置する。

発掘調査は一般国道415号道路改良工事に伴うもので、平成15年度に続く第2次調査となる。調査の結果、調査区東半で4間×2間以上の掘立柱建物1棟を、西端で幅約5m、深さ約1.5mの河道を検出した。遺構内外からは中世や近世の遺物が極少量出土するのみで所属時期は不明瞭だが、中世と近世初

頭の掘立柱建物を検出した第1次調査例からみて、今回検出の小振りな柱穴をもつ掘立柱建物は中世期の所産と推測される。河道は中世以降のものとしておきたい。

調査地周辺の水田域では、近年、道路改良工事やほ場整備、工場建設等の開発に伴って多くの遺跡が発見され、太田A遺跡についても今回で3度目となるなど多数の発掘調査が実施され、古代を中心に弥生時代後期以降の遺跡分布が知られている。現在の集落は調査地東方を流れる吉崎川沿いの太田町や山裾の中川町、宝達志水町杉野屋地区に偏在するが、以前は、広く水田中にも展開していたことが明らかとなってきたものであり、一帯が、邑知潟水面との比高差が小さく、現在も大雨の度に河川氾濫を被る地域であることを考えると、周囲を流れる中小河川に制約を受けながらも、その中の微高地上に時々立地を得て集落を営んでいたことが推測される。1次調査で近世の河道が検出されているが、今回検出の河道については太田A遺跡の西端にあたっており、当時、集落端を画した川の可能性が考えられる。 (澤辺利明)

わかみどり
若緑ヒラ野遺跡

所在地 かほく市若緑地内
調査面積 1,280㎡

調査期間 平成18年7月20日～同年10月20日
調査担当 白田義彦 安中哲徳



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

調査成果の要点

- ・縄文時代後晩期、古代の集落跡である。
- ・縄文時代後晩期の環状柱穴列と大型土坑群を検出した。
- ・周辺に古代の須恵器窯が多くあり、古代の工人に関する集落の可能性がある。

本遺跡はかほく市街からやや内陸に入った中山間地域にあり、かつら川に面した丘陵上に位置する。今回は市道部分の調査で、幅約9m、長さ約140mの調査区である。調査区の中央付近に遺構が密集しており、調査区両端に向かうにつれて、遺構は希薄になる。縄文時代の環状

柱穴列は調査区の西端に近いところにあり、縄文時代の大型土坑群は中央部に集中している。環状柱穴列は建て替えられており、直径約6mのものが初めに建てられ、次に直径約5mのものに建て替えられている。柱穴の直径は前者で約1m、深さは約80cmで柱穴内の埋土は堅く締まっていた。後者の柱穴規模はやや小ぶりで直径約60cm、深さ約50cmである。両者とも柱穴に木柱は残っていなかった。

大型の土坑群の土坑形態は、円形、楕円形、方形と様々な平面形を呈する。土坑間の切り合いは多く、頻繁に造り替えられている。大きいもので直径約1.5m、深さ約1.5mを測る。縄文時代の遺物は比較的少なく、破片が多い傾向がある。

古代の遺構は竪穴建物、掘立柱建物、土坑などである。竪穴建物は2基検出しており、いずれも方形を呈し、一辺約7mと約5mのものを検出した。SK21は方形の土坑で、2×1.7mの規模を持ち、深さは約30cmである。写真にあるとおり、口縁部と底部を打ち欠いた瓶が横倒しの状態で出土した。

(白田 義彦)



環状柱穴列



縄文時代の大型土坑群



石斧出土状況



瓶出土状況 (SK21)



古代の土坑 (SK73)



古代の土坑 (SK115)



調査区垂直写真

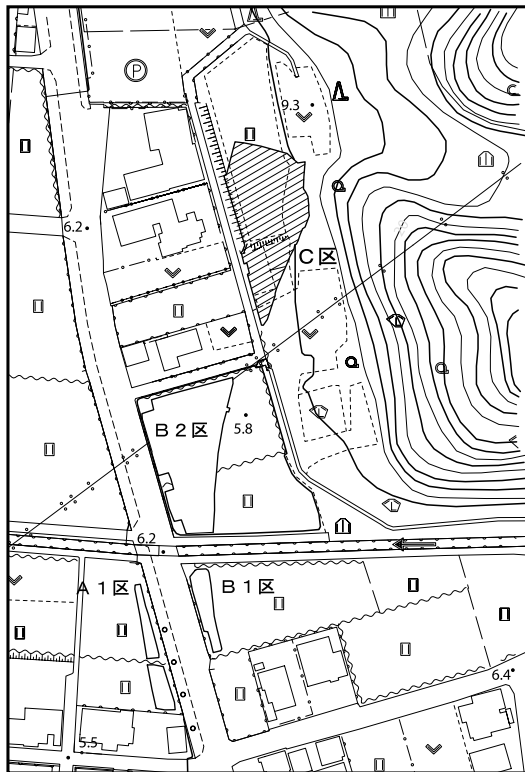
か も 加 茂 遺 跡

所在地 河北郡津幡町加茂地内

調査面積 2,500㎡



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)



調査区位置図 (S = 1 / 2,500)

調査期間 平成18年6月9日～同年12月26日

調査担当 安 英樹 岩瀬由美

加茂遺跡は平成3(1991)年度から長期間にわたって国道8号津幡北バイパス関連の発掘調査が行われてきたが、本調査は津幡北バイパスと交差する県道の改良工事(河北縦断道路)を調査原因とし、平成17(2005)年度から実施されているものである。今年度の調査箇所は現舟橋川の右岸に位置する山麓部分であり、標高は6mを前後する。調査区名は平成17年度(A1区、B1区、B2区)に続くC区として調査を行った。

C区では基本的に中世(第1面)、古代(第2面)、弥生・古墳時代(第3面)の計3面の遺構面を確認した。ただし、各遺構面の分布は異なっており、それぞれに特徴がある。調査区全面に分布するのは第1面のみであり、第2面・第3面の分布は限定される状況であった。また、調査前の現況は県道付近よりも一段高い水田・畑地であり、開墾による削平が予想されたが、調査では各遺構面を覆う厚い堆積層と後世の客土によって、遺物包含層と遺構面が良好に遺存していることが確認されている。

第1面の地形は緩やかな傾斜があり、地滑り等で再堆積した山土をベースとする。中世の遺構面は部分的にもう1面確認できるが、時間差は顕著でない。遺構は掘立柱建物跡、井戸跡、畑跡、流路、区画溝、土坑等を検出しており、出土遺物から中世でも前半の時期が予想される。掘立柱建物跡は複数棟確認しているが、調査区の制約によって規模が確定するものは少ない。井戸跡は井戸側が残る確実なものが3基あり、2基は曲物積、1基は縦板組である。流路は整った形状で直線的に伸びていることから人工の水路と考えており、漆器や下駄等の木製遺物が多く出土している。また、肩部から和鏡が出土しており、祭祀も行われている。遺構の配置としては、山麓に敷地を作り出し、北

から水路、建物、畑を配置し、山側に井戸を集めるといった土地利用を窺うことができる。加茂遺跡で本格的な中世集落が確認されたのは今回が初めてである。

第2面は調査区の南半部に分布する。北半部には分布しておらず、古代の加茂遺跡が基本的に山麓には展開しないことを確認したといえる。地形はほぼ平坦となり、低地的な粘質土をベースとする。遺構は掘立柱建物跡、溝、土坑等を検出した。出土遺物から9～10世紀代の時期が予想される。掘立

柱建物跡は3棟確認しているが、うち1棟は総柱2×2間以上の倉庫であり、平成17年度調査のB2区北端で検出された掘立柱建物跡とともにこのエリアの主要な建物群を構成する可能性が高い。また、古墳時代後期の遺構も希薄ながら同じ遺構面で検出されている。

第3面は調査区の北半部に分布する。第2面と同様に地形はほぼ平坦となり、低地的な粘質土をベースとする。遺構は平地式建物跡、小穴等を検出した。平地式建物跡は部分掘ながら外周溝と柱穴の検出により特定したものである。平地式建物跡の時期は出土遺物から弥生時代中期が予想される。

以上が今回の主な調査成果であるが、加茂遺跡全体を見るとほぼ全域で活発な堆積による埋没が見られ、複数の遺構面が形成されている。この背景には舟橋川上流域からの洪水等による土砂排出の他、周辺山地の痩せた地形を見る限り地滑り、さらに地震など、連鎖しうる災害の存在が予想できる。古代の公的施設や寺院などの調査成果に隠れがちであるが、度重なる災害の中で断続しながらきわめて長期間にわたって営まれた集落の伝統性が、通史的にみた加茂遺跡の本質であることを今回の調査は再確認させてくれた。(安 英樹)



第1面 全景(西から)



第2面 掘立柱建物跡(東から)

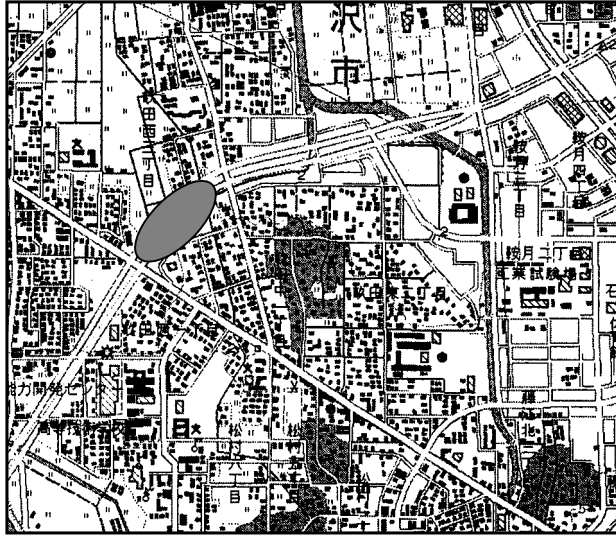


第3面 平地式建物跡(北から)

うねだ しちゅう 遺跡、うねだ 遺跡、うねだ だいとくがわ 遺跡
 畝田・寺中遺跡、畝田遺跡、畝田大徳川遺跡

所在地 金沢市畝田西2・3丁目地内
 調査面積 5,200㎡

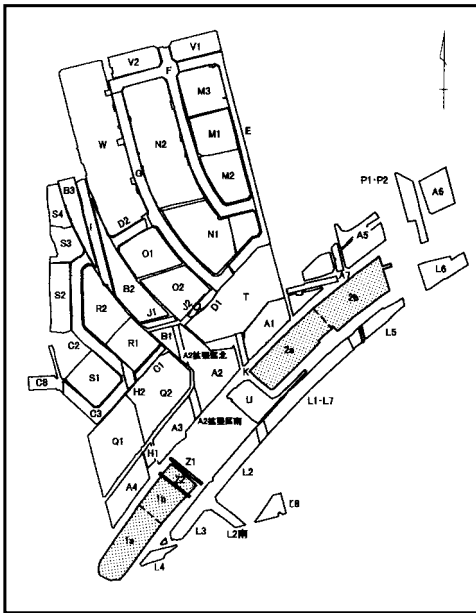
調査期間 平成18年6月27日～平成19年2月8日
 調査担当 土屋宣雄 宮川勝次



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

調査成果の要点

- ・主に弥生時代、古墳時代、中世の集落跡を確認した。
- ・弥生時代終末期にあたる溝を検出した。
- ・古墳時代では、竪穴系建物や掘立柱建物、土坑等を確認し、中後期の溝からは、大量の土器と共に木製品や石製品が出土した。
- ・中世では、総柱の掘立柱建物と井戸や南北及び東西方向を軸とする区画溝等を確認した。



調査区配置図 (アミカケ部) (S = 1 / 5,000)

畝田・寺中遺跡他2遺跡は、金沢市西部の沖積地に立地する。今回の発掘調査は、一般国道305号(海側幹線)改築工事を原因とするもので、調査区の一部は、金沢西部第二土地区画整理事業に係る調査地(平成11～15年度)に隣接する。

今回の調査は、2地区(1区(a・b)、2区(a・b))を対象に実施した結果、主に弥生時代、古墳時代、中世の集落跡を確認した。

弥生時代では、終末期にあたる南西-北東向の溝等を検出した。また、古墳時代では、竪穴系建物や掘立柱建物、土坑、溝等を確認した。特に中後期の南東-北西向の溝からは、大量の土器と共に農具などの木製品や勾玉・管玉といった石製品が出土した。中世では、総柱の掘立柱建物と井戸や溝等を確認している。検出された溝は南北及び東西方向を軸とする水路網(条里溝)の一部にあたり、その軸にあわせて掘立柱建物が確認された。また、2区で検出された溝(SD

22)は東側の末端部でL字に屈曲し、その底部には敷石が施されている状況が確認された。この敷石遺構は、北南長約3.4m、東西幅約0.9m、敷石までの深さ約0.2mで、小石を北側から南側に緩く傾斜させて敷き、屈曲部の南端には大きめの石が配置されており、埋土の下部より鉄刀等が出土した。詳細は不明ながら近接して井戸が確認されていることから、これを利用した水溜的な機能が可能性の一つとして考えられ注目される。

なお、今回は、本遺跡の南域における東・西両端を含めた様相を明らかにし、具体的資料を得ることができた調査であったと思われる。(土屋宣雄)



調査区全景 (1a区)



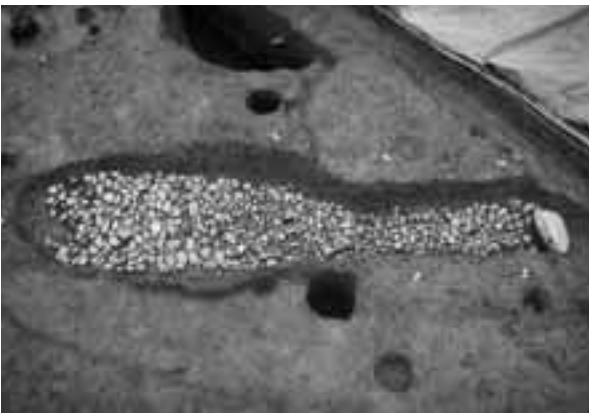
調査区全景 (1b区)



調査区全景 (2a区)



調査区全景 (2b区)



敷石遺構 (SD22 : 2a区)



敷石遺構等完掘状況 (東から)



溝掘り下げ作業 (古墳時代中後期)



井戸側 (曲物 : 中世) 出土状況

なかしんほ 中新保遺跡

所在地 白山市中新保地内

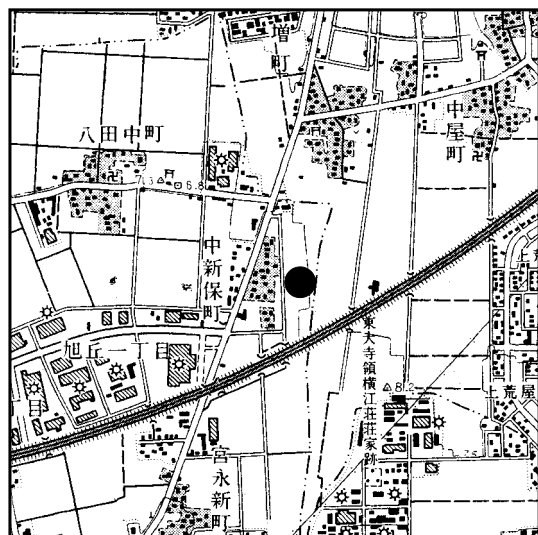
調査面積 3,330㎡

調査期間 平成18年5月8日～同年10月3日

調査担当 西田昌弘、樋口哲子

調査成果の要点

- ・主に、13～14世紀頃の集落跡を確認した。
- ・遺跡の南東部に建物群や井戸などからなる居住域を、北西部では耕作等に伴う溝群を配した生産域が確認でき、集落の様相を把握することができた。
- ・遺物としては、土師器や珠洲焼、加賀焼、青磁、行火、砥石などが出土した。



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

中新保遺跡は、金沢市との市境にほど近い白山市域の北部に位置する。手取川扇状地の扇端部に立地しており、遺跡の東には安原川が流れ、周辺の水田を潤している。調査原因は、国道改築一般国道305号海側

幹線及び緊急地方道路整備事業主要地方道松任宇ノ気線に係る道路建設事業である。

調査の結果、中世の集落跡を中心として、古代から近世にかかる遺構・遺物を確認した。古代については、南北方向に走る溝を1条確認している。溝のみの確認ながら、出土遺物から8～9世紀代に比定でき、ほぼ真北となす軸やその位置関係などから、周辺の横江荘遺跡や上荒屋遺跡などで推定されている条理溝との関連性を窺わせる。遺跡の中心時期となる中世においては、1区南半部で掘立柱建物や竪穴状遺構、井戸、溝などを、2区北半部で規格的に配置された溝群を確認している。溝群の内、東西方向に軸をもつものは総数14条を数え、長さ9～10m・幅0.4～0.5m・深さ0.2～0.4m程度を測る。一方、南北方向に軸をもつものは、一部調査区外へと延びるため全容は不明ながら、現状で12条を確認しており、幅が0.6～0.7m程度と、東西軸の溝と比べやや幅広の傾向にある。本遺跡の南に位置する下福増遺跡においても類似した溝群が確認されており、本溝群も検出状況などから耕作等に伴う溝群と推測している。

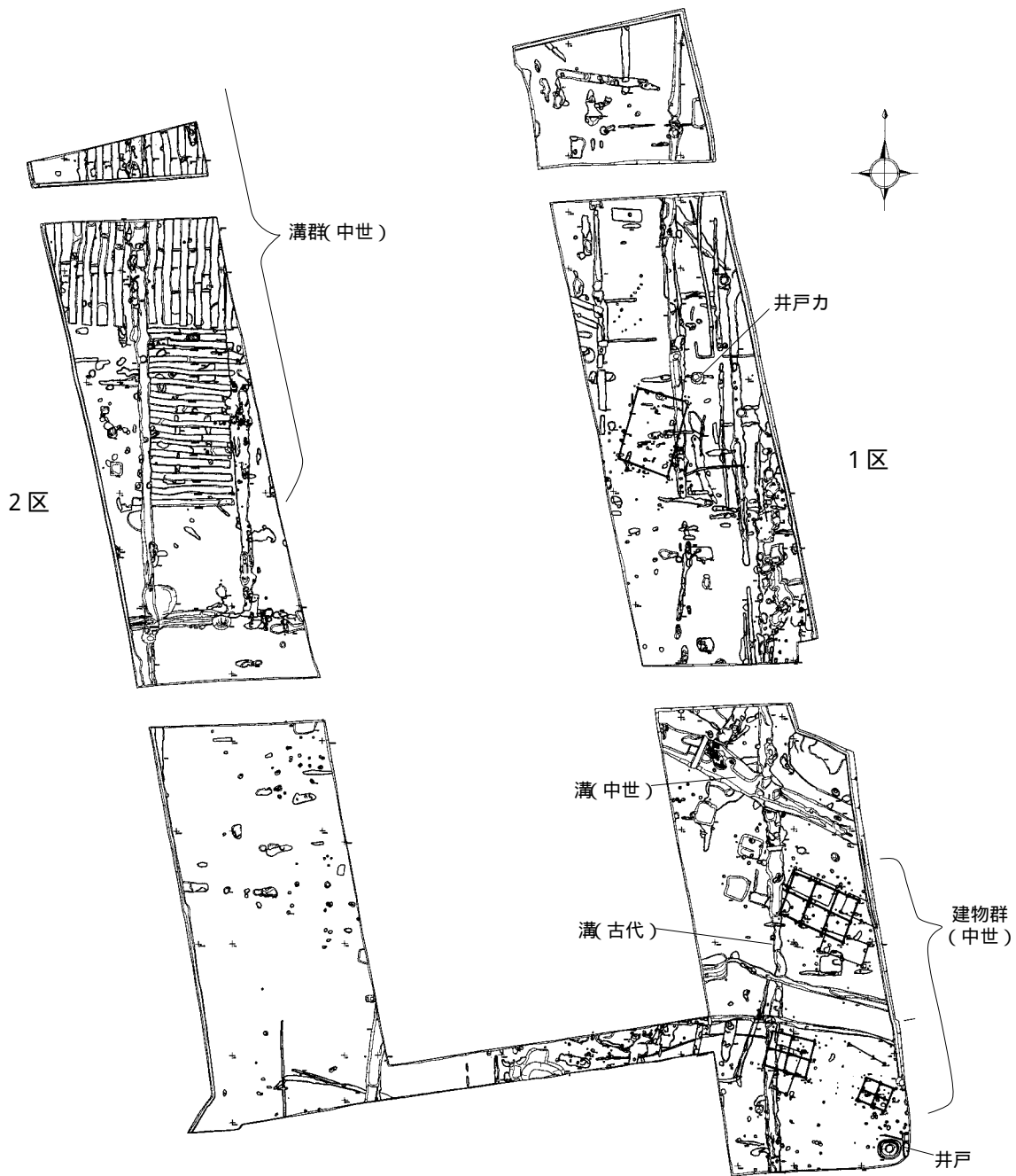
このように、遺跡の北西部を生産域とし、南東部を居住域として空間を配していたことが想定でき、中世に営まれていた集落の全体的な様相を捉えることができた。 (西田昌弘)



溝 (古代) 完掘状況 (南から)



溝 (古代) 遺物出土状況 (南西から)



調査区遺構図 (S = 1 / 600)



中世溝群(北から)

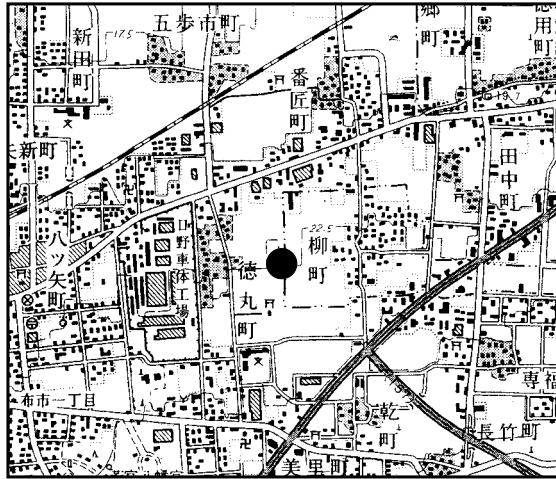


掘立柱建物群(南東から)

徳丸ジョウジャダ遺跡

所在地 白山市徳丸町・野々市町柳町地内
調査面積 2,800㎡

調査期間 平成18年9月25日～平成19年1月31日
調査担当 西田昌弘、樋口哲子



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

調査成果の要点

- ・弥生時代後期の集落跡及び古代の溝等を確認した。
- ・弥生時代後期の竪穴住居は良好な状態で残存しており、碧玉製及び鉄石英製の管玉未製品が多数出土した。
- ・管玉未成品には荒割から仕上げ研磨の手前までに至る様々な段階のものが、多くの細・碎片や敲き石とともに確認でき、盛んな玉つくりの様子が窺える。

徳丸ジョウジャダ遺跡は白山市徳丸町と石川郡野々市町柳町地内にまたがって所在する。手取川扇状地の扇端部に立地しており、調査区を縦断するように手取川七ヶ用水の一つである中村用水が流れる。また、遺跡の南東を仰げば、霊峰白山がそびえ立ち、空気の澄んだ日には、その美しい稜線が青空に映えわたる。

今回の調査は、海側幹線の延長にあたる国道改築一般国道305号及び都市計画道路金沢鶴来線緊急地方道路整備（街路）事業に伴う発掘調査であり、本遺跡としては初の発掘調査となる。

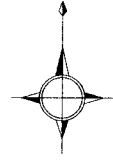
調査の結果、弥生時代の竪穴住居や土坑、小穴、古代の溝などが確認できた。

竪穴住居は2棟検出しており、内、弥生時代後期に比定される竪穴住居1は良好な状態で確認できた。検出面での全長は長軸で約11.5m、短軸で約9.0mを測る。この計測値は周堤と推測される灰黄～黄灰粘質土を含めたものであり、竪穴部のみでは長軸6.8m、短軸4.5mを測る隅丸長方形を呈する。竪穴部を巡る覆土は、竪穴部が埋没する過程で一部流れ込むように堆積しており、ある段階で周堤が崩れつつも、後世の削平を免れた周堤底面近くの覆土が残存し、検出されるに至ったものと推測される。また、削平率の低さ故か、検出面から床面までの深さは約80cmを測り、埋没過程を良好に観察することができた。床面では壁溝が巡り、支柱穴を長軸方向で2本、中央には炭化物を比較的多く含む小穴を、また短軸方向の南東部では比較的深めの小穴を検出している。

出土品も興味深く、甕や高坏といった土器とともに、管玉の未成品やその製作時にでた細・碎片、敲き石等の製作道具といった玉つくりに関する石製品が多数出土した。石材は碧玉、鉄石英の2種類がみられ、前者で荒割～穿孔後の仕上げ研磨を施す手前段階にまで至る未成品と細・碎片を、後者で荒割・形割段階の未成品と細・碎片を確認している。しかし、いずれの石材でも完成品は確認できておらず、製品は全て外へと持ち出されたものと推測される。他方、製作道具として、石英製の敲き石及び台石を確認している。細・碎片の出土が多かったこともあり、床面から約10cmの高さまでの覆土については、全てフルイかけを実施しており、これまでに約2,000点を超える碧玉製の未成品、細・碎片を確認している。今後、フルイ資料の中に錐先等の小さな製作道具が含まれていないか、順次整理作業を進めつつ、本遺跡における管玉の製作技術やその工程を解明していきたい。（西田昌弘）



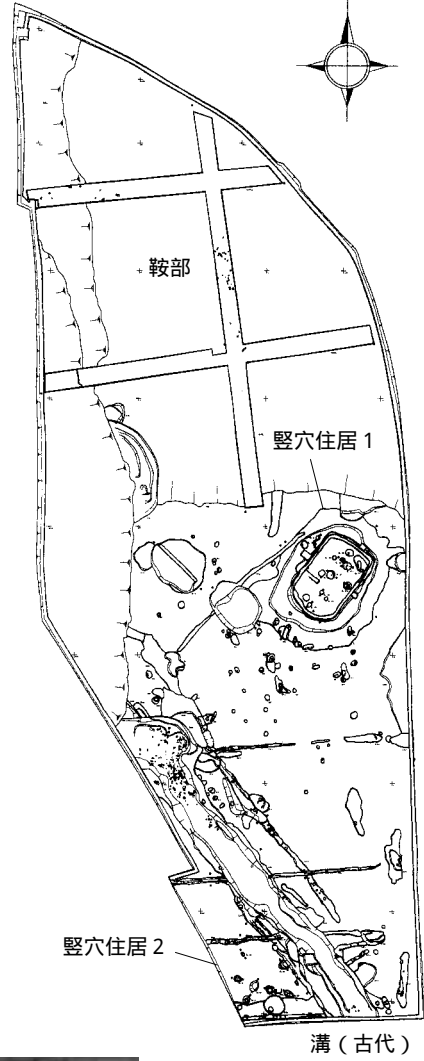
調査区遺構図 (S = 1 / 600)



溝 (古代) 完掘状況 (南東から)



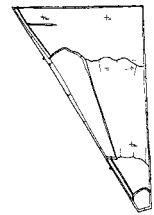
竪穴住居 1 検出状況 (南東から)



溝 (古代)



竪穴住居 1 完掘状況 (北東から)



しらえかけはしがわ
白江梯川遺跡

所在地 小松市白江町地内
調査面積 2,090㎡

調査期間 平成18年8月1日～同年10月31日
調査担当 立原秀明 森 由佳



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

本調査は、梯川河川改修事業に係る発掘調査である。

本年度の調査では、弥生時代終末期～古墳時代の旧河道を検出した。旧河道は、弥生時代終末期～古墳時代初頭には、調査区西部を東から北西方向に流れていたが、古墳時代前期に調査区中央付近で、北東から南西方向に大きく流れを変え、後期にかけてやや東から西方向に流れを変えつつ、全体的に南東方向へ移動していったことが確認された。

遺物は、古墳時代前期の河跡を中心に出土しており、土器や舟形木製品のほか、槽・火きり棒・たも枠などの木製品が出土した。また後期の河跡からも、斎串や竪杵などが出土した。(森 由佳)



調査区全景 (東から)



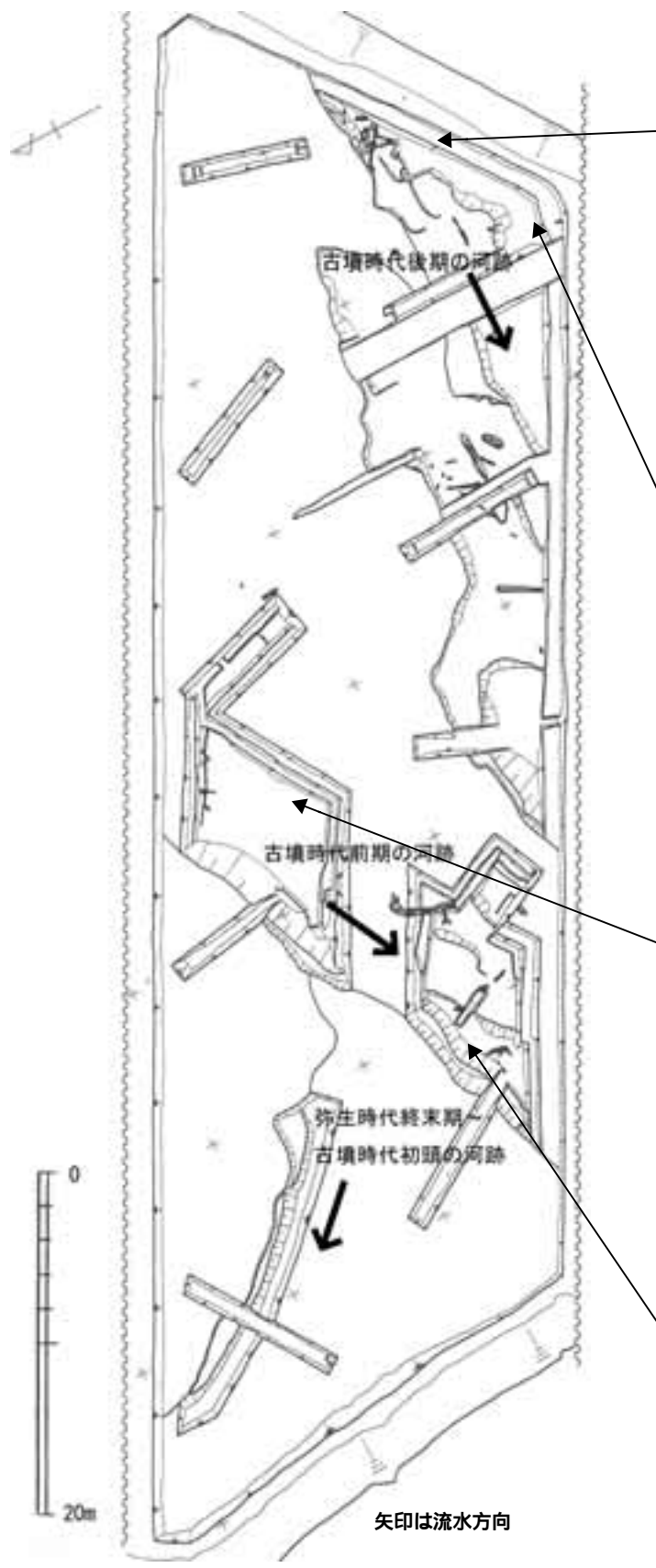
弥生時代終末期～古墳時代初頭の河跡 (北西から)



古墳時代前期の河跡 (北から)



古墳時代後期の河跡 (南から)



豎杵出土状況



斎串出土状況



土器出土状況



舟形木製品出土状況 (底部)

遺構配置図 (S = 1 / 400)

熊坂花房砦跡

所在地 加賀市熊坂町地内

調査面積 1,800㎡

調査期間 平成18年7月6日～同年10月30日

調査担当 松山和彦 谷内明央



遺跡の位置 (S = 1 / 25,000)



調査区の位置 (S = 1 / 7,000)

調査成果の要点

- ・本調査は一般国道8号改築南郷拡幅事業に係る発掘調査である。
- ・加賀市熊坂町花房の東側丘陵に位置する。
- ・古墳時代や中・近世の遺構・遺物を確認した。
- ・古墳時代では径15mの円墳を検出した。
- ・中・近世では堀切状の溝、土塁状の隆起、削平された平坦面、尾根道、焼土坑を検出した。
- ・土師器、須恵器、陶磁器、石器が出土した。

本遺跡は加賀市熊坂町花房の東側丘陵に位置し、通称シロヤマと呼ばれている。遺跡内では曲輪・堀切・土塁などの遺構が分散して確認されているが大半は自然地形である。西尾根は比較的明瞭に土塁・堀切が残っており、越前境と大聖寺方面を望める好位置にあることから、本遺跡は見張り台としての機能を十分果たしていたと推定される。また、江戸時代に書かれた『藩国見聞録』には「熊坂嶺に城跡が四個所あり」と書かれており、熊坂黒谷城跡・口之城跡・奥谷城跡に当砦跡を加えた4遺跡のことを指しているものと考えられる。

調査区は現花房集落北側の尾根上に立地している。調査成果としてはまず、径15mの円墳1基の発見が挙げられる。墳丘の西側半分は後世の削平を受けて壊されていた。墳丘の中央で主体部を検出し、管玉が16点出土した。管玉は主体部の南

端で出土していることから、被葬者は頭を南に向けて埋葬されていた可能性が高い。円墳の北側で周溝を検出しており、周溝付近から古墳時代前期の土師器が出土した。また、堀切状の溝や土塁状の隆起を検出した。溝は尾根を斜めに走るような状態で確認しており、中央には地山を削り出してできた土橋がかかっていた。古墳の溝底で節理に沿った砂岩層が確認されており溝と同じ方向に走っていたことから、採石目的で掘られた遺構の可能性もある。土塁状の隆起は地山を削り出してつくられており、戦国時代の砦跡との関連が注目される。そのほか、近世以降に削平された平坦面や尾根道、焼土坑を検出した。尾根道は調査区内で途切れることなく、南北方向に続いていた。 (谷内明央)



大聖寺市街地を望む（南から）



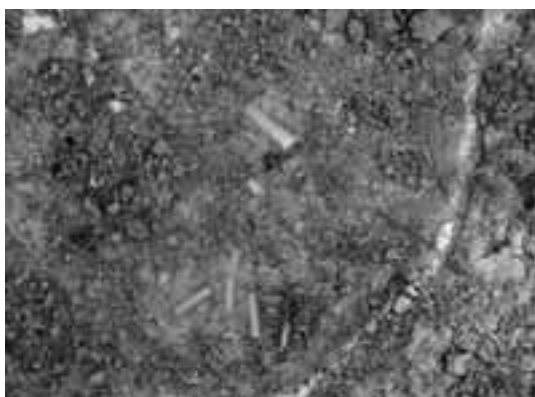
古墳完掘状況（北から）



主体部完掘状況（北から）



周溝断面（西から）



管玉出土状況（西から）



土器出土状況（南から）



堀切状遺構（南から）



土壘状遺構（南から）

平成18（2006）年度下半期の遺物整理作業

第1班

下半期では、洲衛窯東支群（輪島市、平成4年度調査）の遺構図のトレース作業から始め、その後三木A遺跡（加賀市、昭和61年度調査、平成6・7年度調査）、東三階A遺跡（七尾市、平成17年度調査）の記名、分類、接合から遺構図トレースまでの整理作業を行い、粟津小学校遺跡（珠洲市、平成18年度調査）は、記名・分類、接合の整理作業を行った。三木A遺跡では、旧石器時代の石器を見られることができ、うれしかった。が、石器の実測は土器以上に目に神経を集中しなければならなかった。（松田智恵子）



写真1 土器の記名と接合



写真2 土器の実測

第2班

18年度下半期においては、上半期で記名、分類、接合を終えた小島西遺跡の出土品実測、及びトレース作業を行った。その点数は1,214点にもおよんだ。

特にD2区下層から出土した9世紀代の人面墨書土器は、赤外線カメラで撮った写真と実物を照らし合わせての実測となり、図化面は5面にも及んだ。また、多量の土師器皿では、内面に見られる圏線にも注意を払い実測した。大きな石鉢の実測は、机の上に乗せることも、傾げることもままならない重量品で、その調整痕を観察するのが大変だった。実測遺物の点数が多いだけに、パンケースに収納する時も遺物確認、実測図やトレース図の整理等の確認は、慎重な作業となった。



写真3 石造物の実測

1年間を通して行う長期の整理作業は、それなりにやりがいがあった。そして発掘担当者との密な協議と、班員とのチームワークの必要性をより強く感じた。（黒田和子）

第3班

正友じんとくじま遺跡（宝達志水町、平成18年度調査）、鉢伏カクチ遺跡（かほく市、平成17年度調査）、森ガッコウ遺跡（かほく市、平成17年度調査）、中新保遺跡（白山市、平成18年度調査）、的

場農業倉庫前遺跡(羽咋市、平成16年度調査)の記名・分類・接合・実測・トレースまでの作業を行った。

短期間で全工程を終えるのは慌ただしく、作業に入る時には、傷みの激しい物や判り難い物は無いようにと思う。遺物を開き、接合を観る時間にも限りがあるからである。そんな中でも、印象に残ったのは大型木器の実測で、森ガッコウ遺跡の礎板では調整痕を探し、箕の杵木の実測では、紐が巻かれていた痕跡などを観察した。中新保遺跡の井戸杵に使用されたいた曲物では、内面に残るケビキや樺皮の結束の様子など、大型木器の観察は体力もいる。時間のない中での作業では、遺物の風化具合も大きくひびき、遺物の種類、状態と作業時間の配分は、私たち整理スタッフにとっては大きな課題である。

(小林直子)



写真4 木製品の実測



写真5 曲物の実測

第4班

9月に着手した飯田町遺跡(珠洲市、平成17年度調査)では、中世から近世にかけての遺物を整理した。珠洲焼の甕、すり鉢、中国製青磁碗、瀬戸・美濃焼などが出土しており、なかでも井戸杵として用いられた珠洲焼の甕2点と、底部に回転系切り痕のある13~14世紀の土師器の皿は、珠洲地方特有の出土品であり印象的であった。続いて整理作業に着手した良川北遺跡(中能登町、平成16年度調査)は出土品も少なく10日間程で整理を終えた。そして今年度の最後は大川遺跡(小松市、平成18年度調査)で、今夏の現場研修で見学させてもらった遺跡である。

近世には小松城下町の一角であり、水陸交通の結節点でもあるこの地を經由して様々なものが金沢城下町へも運ばれ、随分と繁栄した様子がうかがわれた。調査で検出された北国街道と堀跡から発見



写真6 土器の分類と接合



写真7 石製品の実測

された石垣を実際に見学しているため、遺物の接合時には、出土地点が具体的にイメージでき、大変身近なものに感じられた。残念ながら完形品は少ないものの中国陶磁器、初期伊万里から明治期の陶磁器までと、多種多様な遺物を接合し、それらを実測する事が出来たことは印象深い。(新谷由子)

第5班

下半期では、渡合遺跡(輪島市、平成17年度調査) 太田B遺跡(羽咋市、平成17年度調査)の間にはさみ、上半期から引き続いた八幡遺跡(小松市、平成4～6年度調査分)の実測・トレース作業を行った。

渡合遺跡、太田B遺跡ともに遺物量が少なく、短期間の整理作業であったが、そのなかで特筆すべきは、太田B遺跡の竹管水道であろう。埋設された水道管の部分に竹(孟宗竹)を使い、そのジョイントとなる部分を角材で作ったもので、近代から昭和20年代の前半頃まで使用されていたという。人々の知恵と工夫がうかがえる一品である。

他方、八幡遺跡の遺物の多くは窯資料であり、重ね焼、型、窯道具、歪みのあるもの等、実測のしにくいものが多かった。その反面、普段では見ることのできない遺物をじっくり観察する機会でもあった。陶磁器や瓦などの当時の焼成方法がうかがえる資料も多く、これからの近世窯資料を整理する際の参考としていきたい。(横山そのみ)



写真8 水道部材の実測



写真9 鬼瓦の実測

第6班

記名・分類・接合からトレース作業を終えるまで、遺跡ごとに整理の作業過程を写真撮影したものを、作業の成果簿として作成するのも、私たちの大切な仕事の一つである。

報告書作成作業との関係から、上半期より引き続いた加茂遺跡(津幡町、平成14年度調査)の整理作業を12月から2月にかけて一時中断し、農林事業の中川A遺跡他3遺跡(羽咋市、平成17年度調査)と大槻ヤマゾ遺跡他2遺跡(中能登町、平成17年度調査)の整理作業を実施した。これらは事業の内容が、農林事業分と国庫補助事業分の2本に分かれており、作業量が少なくても、別々に写真を撮る必要があった。短い期間に行う複数の作業、細かい過程に分かれる整理作業では、常に写真を撮る必要に追いかけていた。このため中断した加茂遺跡の作業へ戻っても以前のペースを取り戻すために、記録と記憶力との葛藤が有り、なかなか大変だった。(河村裕子)



写真10 土器の接合



写真11 トレース作業

第7班

下半期は、上半期から引き続いた大川遺跡（小松市、平成17年度調査）の整理作業として、桶を利用した4基の井戸枠の組み立てから始まった。一枚一枚の側材を番号順に並べ、ナイロン紐で編み込みながら桶を組み上げた。木器の実測では、この桶利用の井戸枠のほかにも橋脚と思われる大型木器、精巧な造りの船形製品など異色な遺物もあり、その作業は予想以上に時間を要するものであった。

木器の実測作業をすべて終わると、いよいよ上半期に実測した大量の陶磁器のトレース作業である。当時の職人達の筆づかいに少しでも近づけようと、遺物と図面をにらめっこしながら、面相筆を駆使した作業であったが、画筆の勢いや呉須、釉の濃淡など、なかなか思ったような仕上がりとならず苦心した。

私個人としては、年代が古い初期伊万里の染付けのほうが、やや時代が下った肥前陶磁、瀬戸・美濃焼などより難しく思われた。4ヶ月以上にわたり、極度の集中力を要する陶磁器のトレースを行うことは、非常に困難な作業であったが、作業成果簿のトレース図の美しい仕上がりには、ほぼ1年間行ってきた大川遺跡の整理作業への充実感が湧いてきたのも事実である。（小林多恵子）



写真12 井戸側の組立



写真13 陶磁器のトレース

復元班

下半期の復元作業は、上半期から引き続く大川遺跡のように多くの遺物を断続的に仕上げる遺跡と、点数が少なく短期間に仕上げる遺跡が混在した。

始めは、実測作業に耐えられるかどうか、マーコやキャリパーで測ってみて、最小限に石膏を入れて補強をする。次に完成から仕上げとなるが、なかには土器内面や断面を観察できる箇所を残すことが必要となり、小さな窓穴を開けておく事もある。

実測図を参照しながら復元する遺物もある。須恵器の甕など、大型の土器はまさにそれである。口縁から胴部にかけては、接合点がある土器が多いが、接合点がない底部周辺の復元は大変で、土器全体の形や傾き、高さなどをよく確認しながらの作業になる。下半期も大きな甕から小さな皿や杯など、大きさも形も様々な復元を行った。（前田すみ子）

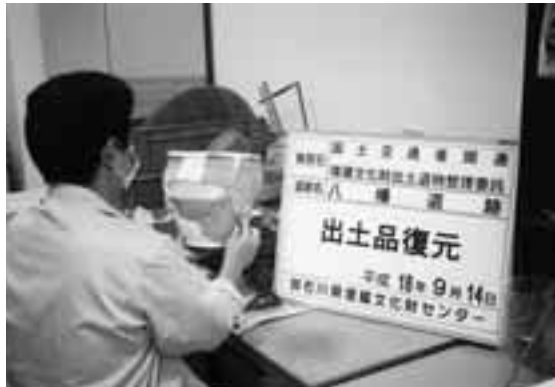


写真14 小甕の復元



写真15 中型甕の復元

洗浄班

下半期では、平成18年度発掘調査の大川遺跡（小松市）、大谷中学校東遺跡（珠洲市）、大槻ブンゾ遺跡（中能登町）、若緑ヒラ野遺跡（かほく市）、粟津小学校遺跡（珠洲市）、古府・国府遺跡（七尾市）など、全部で13遺跡の洗浄・乾燥作業を行った。

大川遺跡の出土品は近世のものが多く、立派な徳利や鉢、九谷焼の茶碗類が沢山あり、色々と面白いものがあった。動物の大きな骨もあり、大変びっくりした。大谷中学校東遺跡は、製塩土器がぎっしり詰まったパンケースが63箱もあり、土器に着いた土が落ちにくく洗浄に苦労した。また、宿神社前の土器類は、弥生から古墳時代のもといわれ、とくに須恵器が多く見受けられた。若緑ヒラ野遺跡では、大きな軽石などが混じっていたり、土器が黒く染まったように汚れて、大変取りにくい状態であった。中新保遺跡は、石鏃と中世から近世の茶碗類が目立つ存在であった。（上尾春代）

弥生住居の想定復元

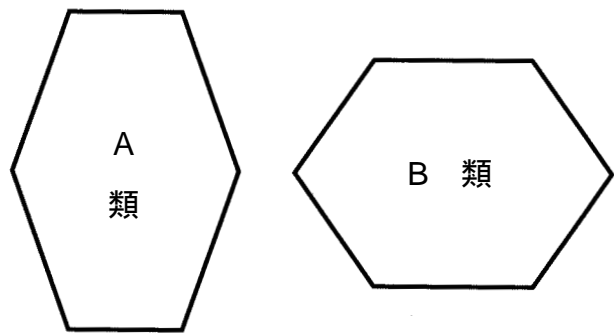
久田 正弘

1. はじめに

近年、北陸地方では弥生時代中期の調査や報告書刊行が多くみられ、遺構・土器・石器・木製品などのデータが蓄積されてきたが、まだまだ資料不足な感は否めない。その中でも、遺構に関しては明治以降の圃場整備事業などの影響により攪乱・削平がなされた為に、集落の全体像のみならず1つの建物さえも、復元出来ない調査も多い。よって、今回は壊されている弥生住居を報告書の記述などを元に想定復元してみたい。たとえば住居と報告されているが柱配置が不明確な例や、連続する土坑や不連続な土坑が連なる例などを外周溝と想定して、その内側に柱配置が確認されるのかを検討してみたい。なお多角形の柱配置では、縦長の配置をA類、横長の配置をB類(第1図、宮川ほか2004)とする。

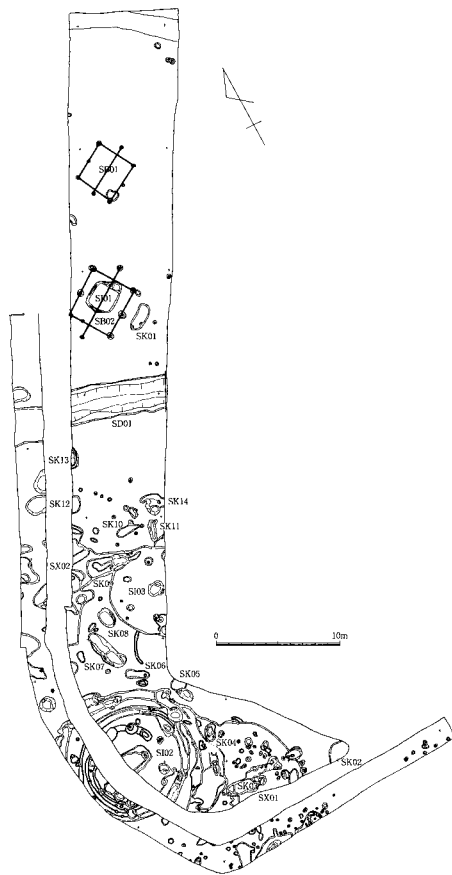
2. 白山市野本遺跡の復元例

石川県白山(旧松任)市野本遺跡の弥生住居の想定復元を試みたい。4次の発掘調査が行われ、1次(木立ほか1993)・3次(金山2002)、2次(前田1995)・4次(金山2002)は近接しており、関連がある遺構が検出され、八日市地方7~10期の土器が出土し、主体は9・10期と思われる。1・3次調査区(第2図左)ではSD01より北側に2棟の棟持柱建物(SB01・02)が報告された。SB02の内側にはSI01(後期)、東側1mにはSK01(後期中葉)があり、両者とも関連ある遺構と把握された。一連の遺構(第2図右)と考えると楕円形の周溝(推定内寸8.3×5.7m、推定外寸10.4×6.8m)を持ち、B類の柱配置(6.4×3.7m)をもつ竪穴住居とみることも可能である。その理由としては、報告書の記述と、金沢市戸水水コダ遺跡・大友西遺跡では掘立柱建物40棟が報告(出越2002)されたが、棟持柱建物が存在しないことを参考にした。しかし、加茂遺跡では中期後半の可能性がある棟持柱建物(松尾ほか2005)があり、田嶋明人・林大智氏からは棟持柱建物は後期には存在すること、桁行きが2間であること、柱の規模から棟持柱建物と認識すべきと指摘を受けた。

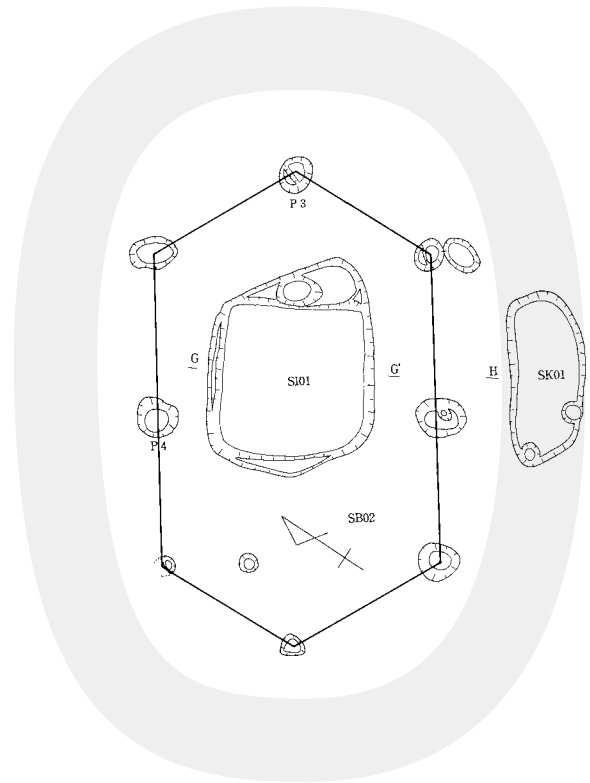


第1図 多角形柱配置の分類

次に第3次SI02・03、SX01(第3図)を検討したい。SI03は多角形の竪穴住居(八日市地方9期)であり、周辺には墓坑と思われる土坑があり、竪穴住居との関連が指摘された。その指摘などを元に第3図左下を想定した。多角形の竪穴住居に楕円形の周溝が伴い、周溝はSK06・07・10が繋がる幅の狭い可能性とSK05(後期)・07などを含んだ幅広い周溝の可能性もあろう。竪穴と周溝も北東方向に主軸を持つ可能性があり、正六角形の柱配置がA類の短いタイプと思われる。SI02は楕円形の竪穴住居(八日市地方10期、安2004)で建替えがあり、柱は方形配置・六角形配置が想定(第3図右上)された。1・3次調査の距離は国家座標を利用していないので正確な位置関係ではないが、竪穴・周溝とも楕円形である。よって、正六角形配置で未調査区内に柱を想定するよりも1次調査区まで延長



3次全体図 (1 / 600)

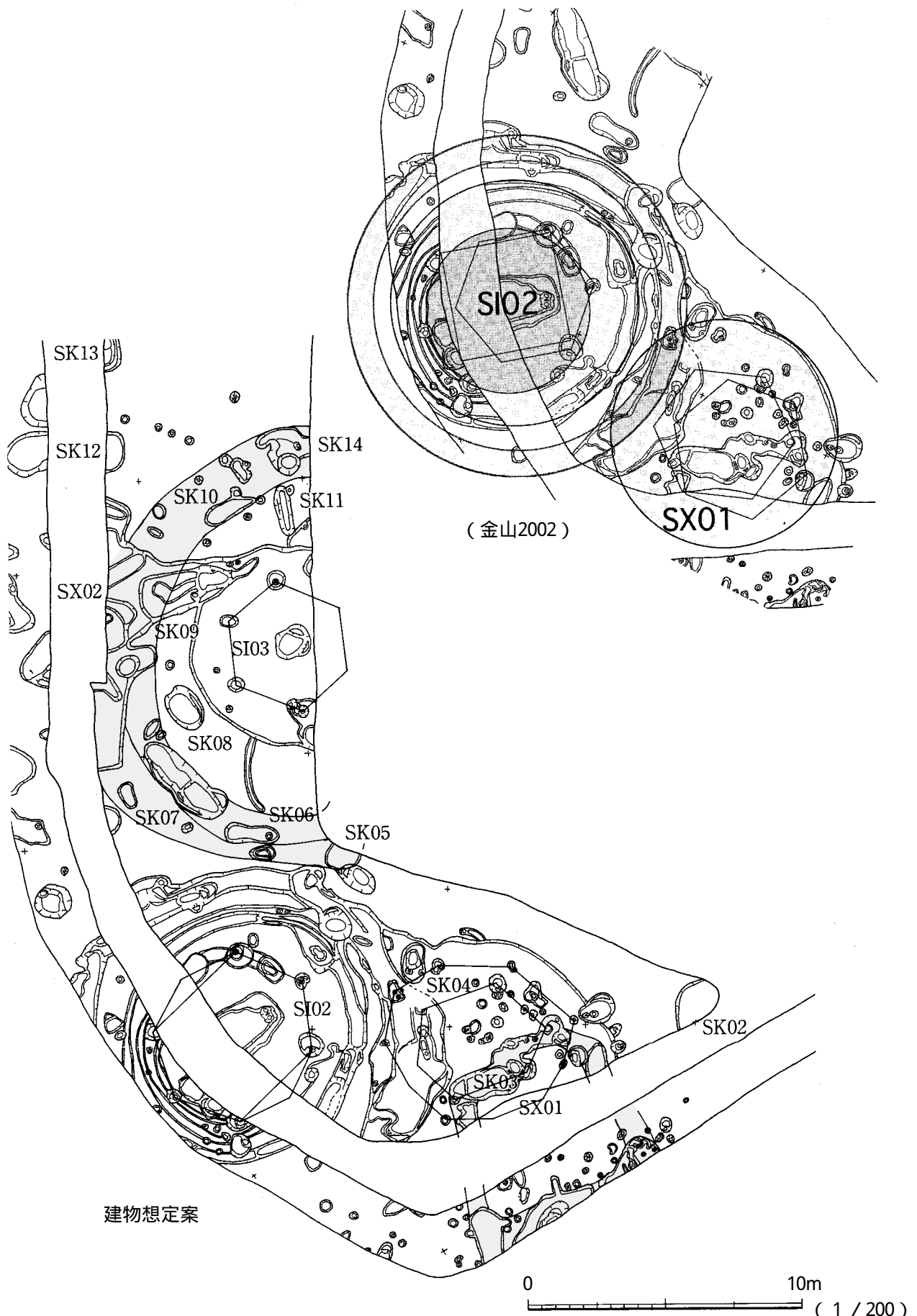


0 5 m (1 / 100)

第2図 野本遺跡の弥生住居1

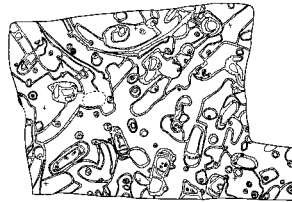
して六角形 (6.3×4.6m、桁行は1か2間、2間はSB02を参考)と八角形 (6.3×6m)のB類を想定してみたい。SX01は楕円形の竪穴住居(八日市地方9期)であり、正六角形の支柱配置で建替えが想定されたが、検討の結果、東西方向に長軸を持つ六角形(4.9×3.5m)のB類を想定し、外側にも多角形の柱を想定した。しかし、支柱穴の数からは建替えが想定可能であるが、2棟目を明確に想定出来なかったので筆者の復元に問題が多いからであろう。他にSK03と1次調査区の溝群とで周溝も想定可能なのかもしれない。

2・4次調査(第4図上段)では、墓坑・墓坑と想定される土坑(前田1995第35図)があり、4次調査では浅い溝群の連結(第4図中段)を平地式建物か竪穴住居の外周溝と想定されたが、調査区が狭いためと支柱穴が確認されないので躊躇(金山2002)された。2次調査区では1棟の竪穴住居と1棟の小型竪穴住居が検出されたが、小型竪穴住居(SI02)は誤認も想定(前田1995)された。SI01(八日市地方8期)は多角形の支柱配置が数例想定可能であり、北側と西側には直線的な周溝が存在(第4図下段)する。2次調査区の北側にも周溝が想定可能であるが、調査区の制約から指摘のみに留める。また、南西側には4次調査区に続く周溝が想定可能であるが、厳密な距離関係や柱穴の深さが確認出来ないの、竪穴住居の可能性を指摘するに留める。

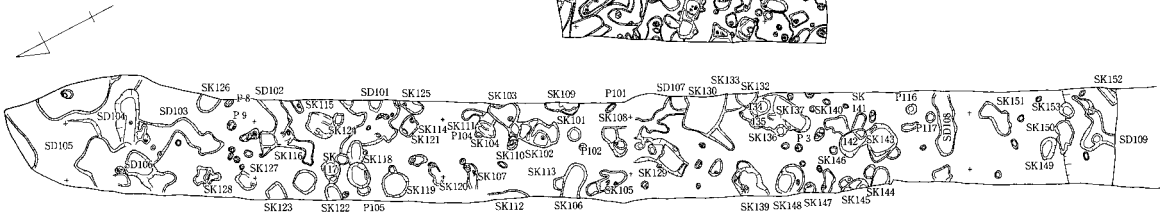


第3図 野本遺跡の弥生住居2

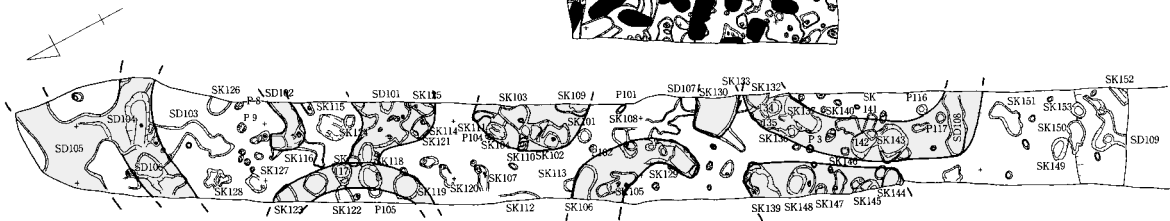
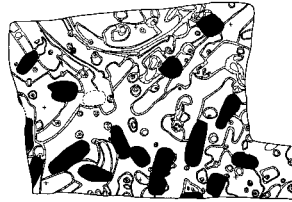
4次全体図



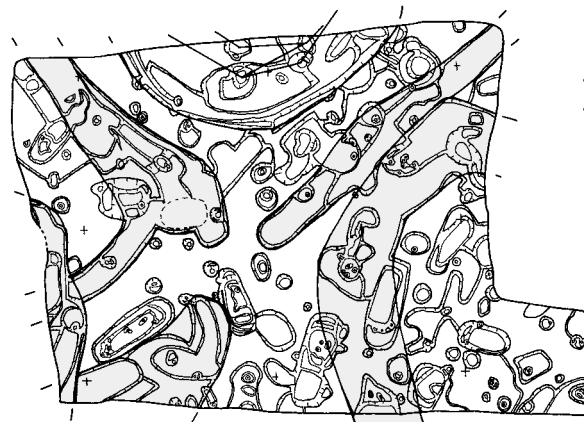
平成6年度調査区
(2次調査)



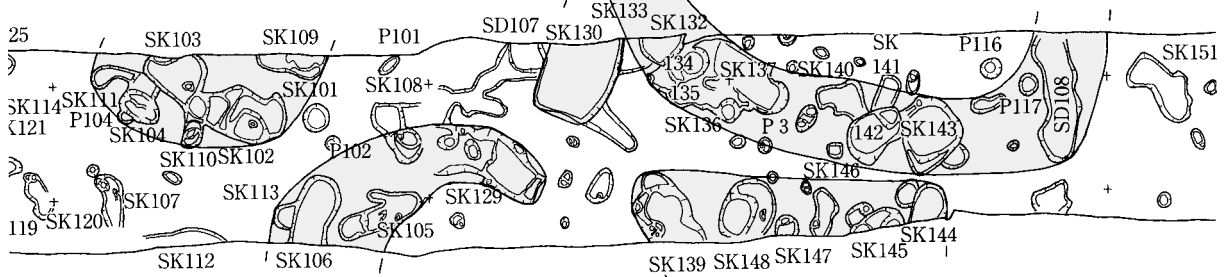
想定図



0 20m (1/400)

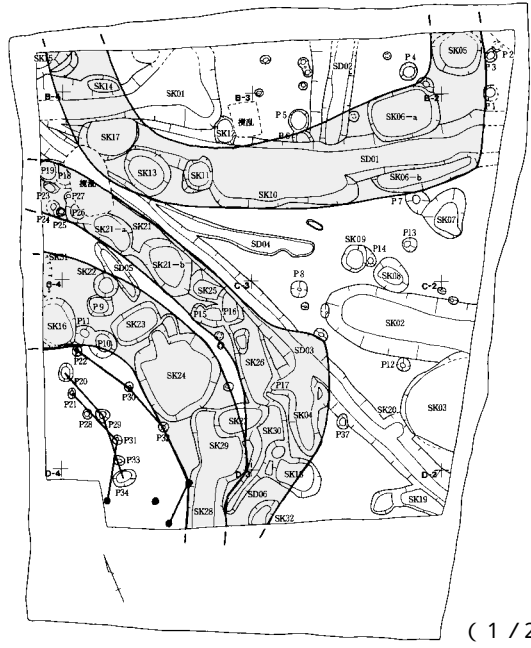
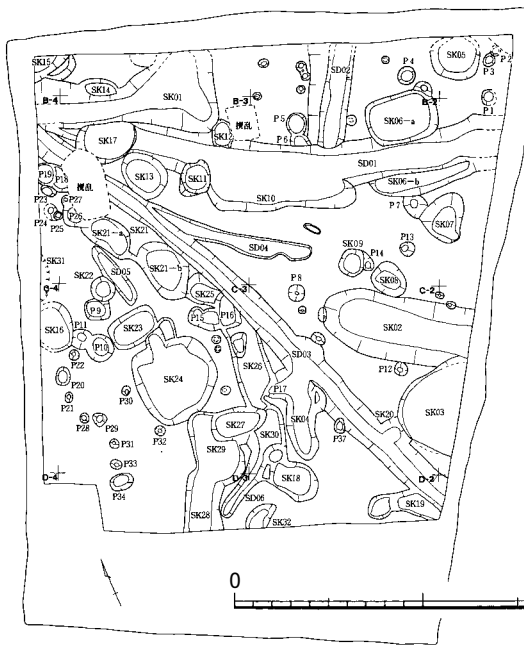


- ・黒塗りは墓坑と墓坑想定土坑 (前田1995)
- ・アミは想定周溝



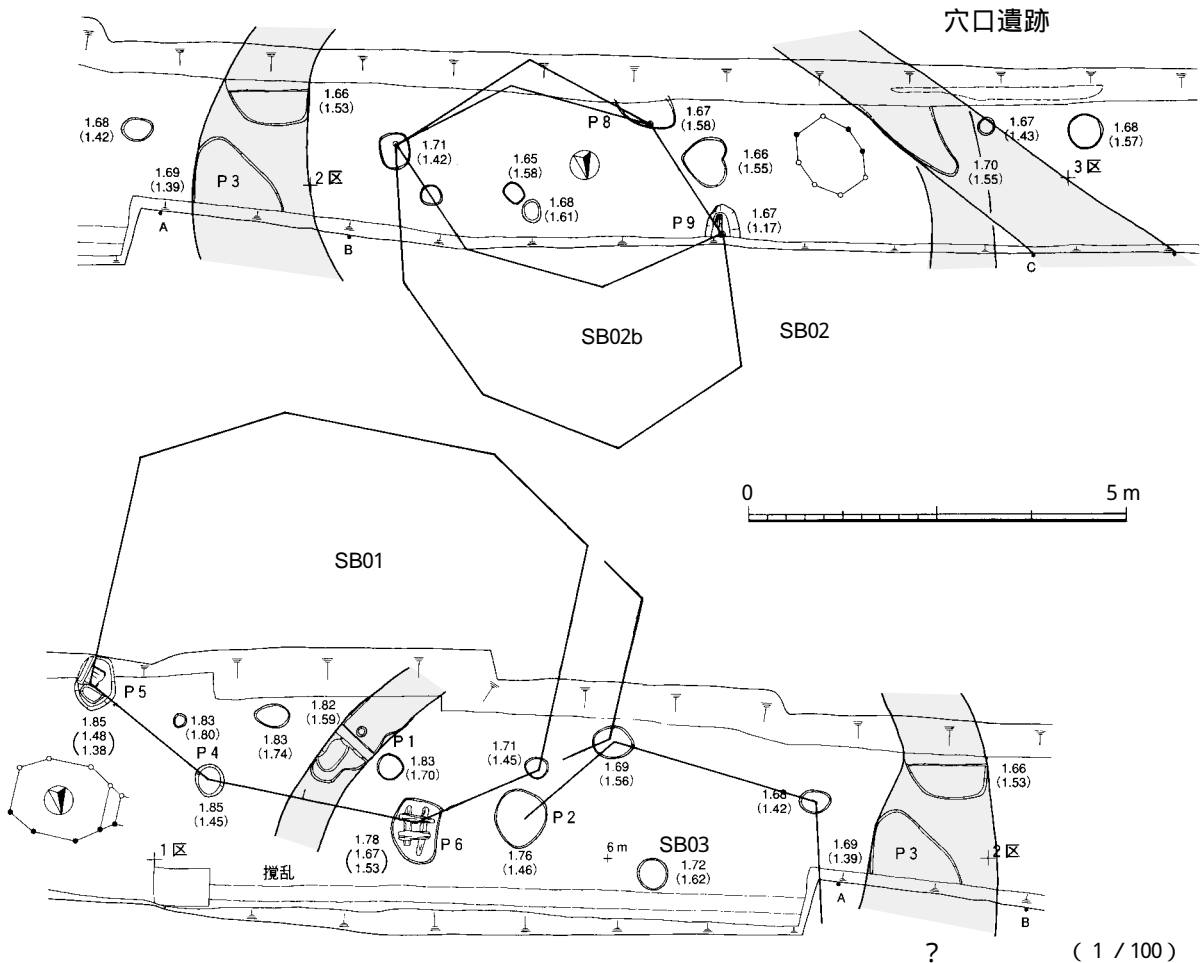
0 10m (1/200)

第4図 野本遺跡の弥生住居3



(1 / 200)

吉崎・次場遺跡



穴口遺跡

(1 / 100)

第5図 能登地方の弥生住居

3. 羽咋市吉崎・次場遺跡の復元例

石川県羽咋市吉崎・次場遺跡の第16次調査区の弥生住居の想定復元を試みたい。第5図左上が全体図であり、支柱穴(P20・29・34)と連結土坑群(P19・23~SK26~SK32、内径10m前後)が住居(八日市地方7期)であり、もう1つの柱穴群と連結土坑群の存在が指摘(宮下1998)された。第5図右上のは報告書の写真から推定復元した柱穴であり、支柱穴付近には別の多角形配置の柱穴列があり、支柱穴の外側にも多角形の柱配置が想定される。その外側にはSK34・16~SK24~SK28があり、周溝と想定可能である。よって、2つの柱穴列・周溝は建替えの可能性と、支柱穴と内外の周溝による幅広の周堤帯を支える柱穴列の可能性も想定される。また、第5図右上側にも土坑が不連続に隅円方形に巡る可能性がある。

4. 志賀町穴口遺跡の復元例

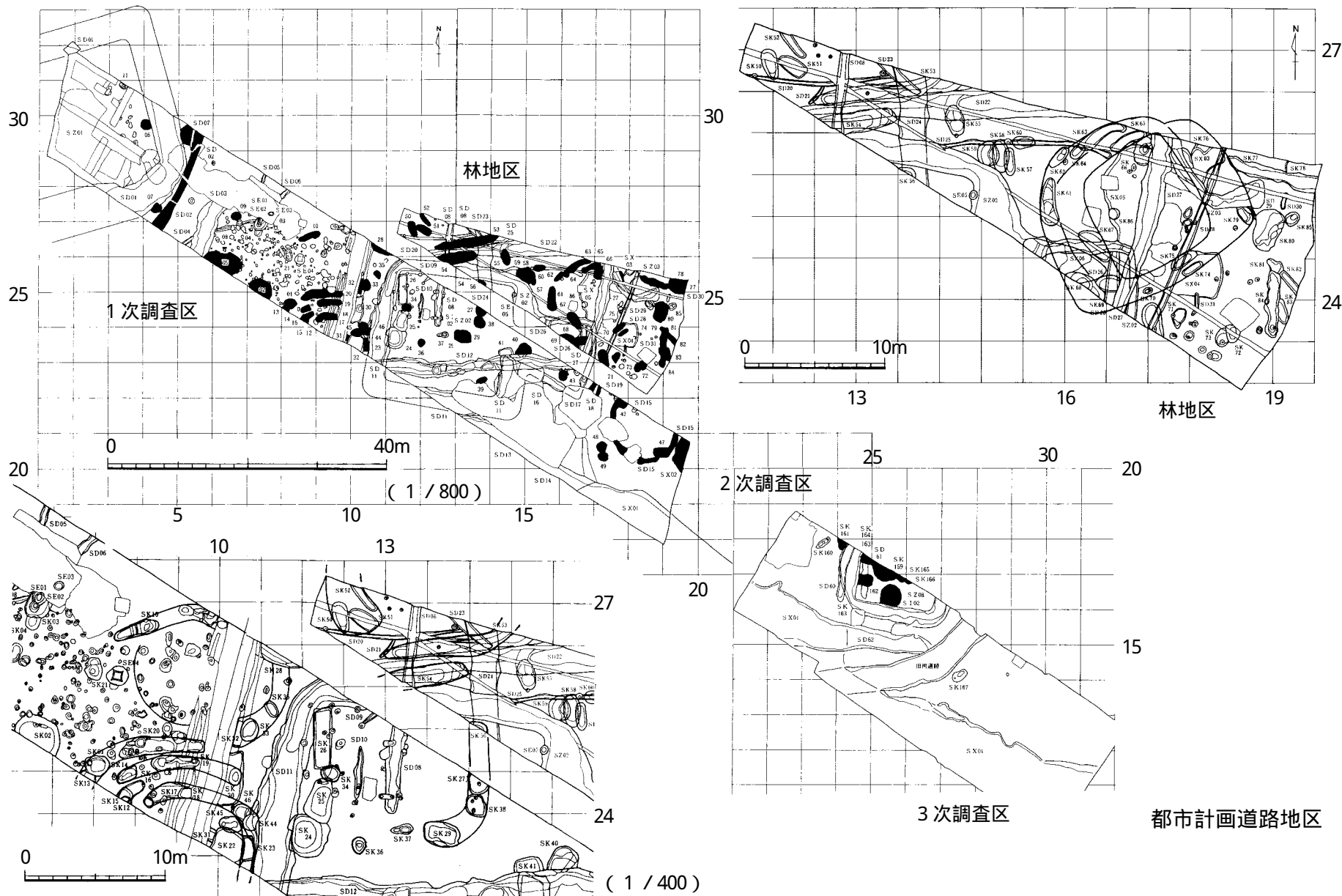
石川県羽咋郡志賀町穴口遺跡B区(第5図下)では、調査時には礎板や柱根の存在から住居を認識していたが、幅2mの調査区なので復元を成し得なかった。報告書作成時に東的場タケノハナ遺跡(宮川ほか2004)・猫橋遺跡(久田ほか2004)の例を参考にして、筆者が後期の建物2棟(八角形の柱配置、A類)を復元し、他の住居の存在も想定(宮川・久田ほか2004)した。SB01の入り口の柱を想定した柱穴は、P2と柱穴とで多角形配置の柱穴列(A類)を想定すれば、溝・土坑・P3を周溝と想定することも可能(SB03)である。またSB02と溝の距離は2mであるが、土坑・P3との距離は0.5~0.8mと近すぎるので、P3などは西側の溝(3区)と一連の遺構(SB02の周溝)の可能性が高いと思われる。しかし、B類を想定すれば土坑・P3との距離が短いのは問題ないのかもしれない。しかし、SB01と03は重なっていることから、時間差が想定される。SB02はSB01例を参考に八角形(A類、5×3.8m)を復元したが、一般的な六角形(SB02b、B類、4.5×2.3m)も想定可能であるが、梁行きの幅が狭すぎるので報告書案の方が無難と思われる。

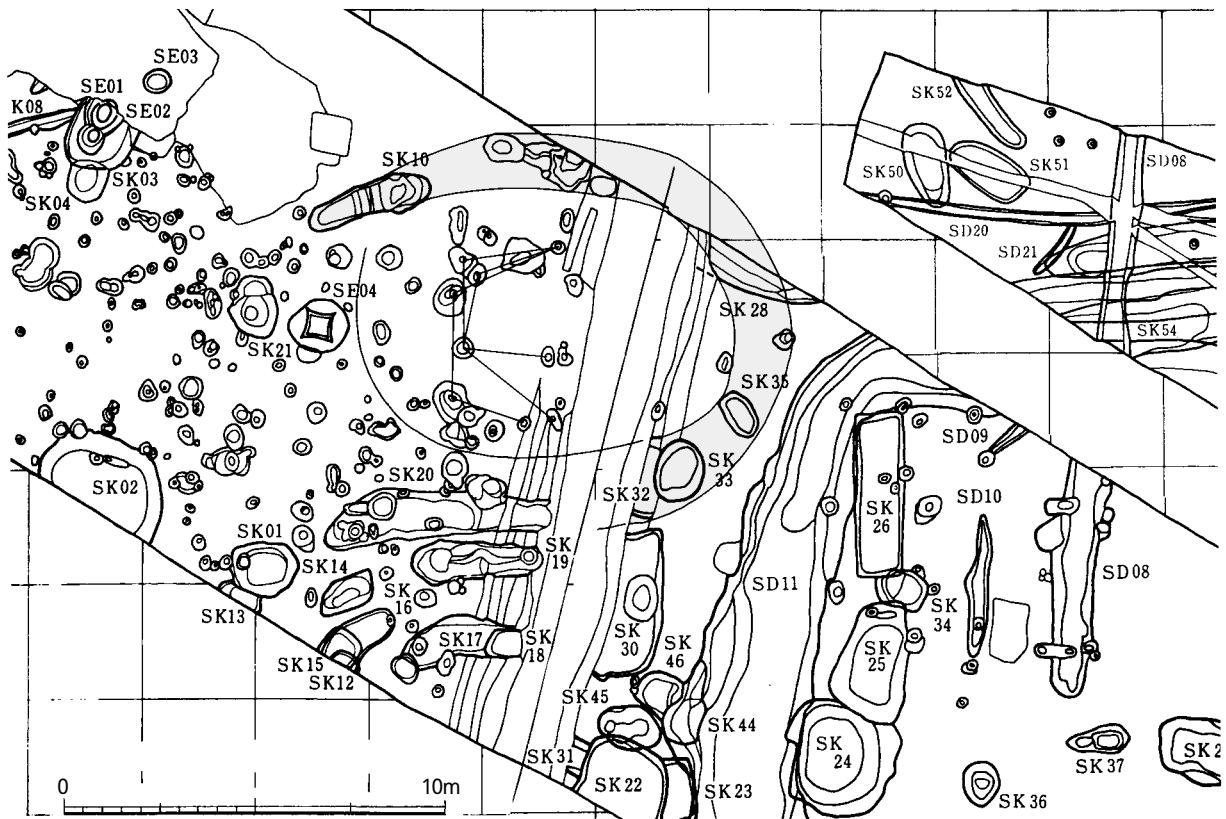
5. 高岡市石塚遺跡の復元例

富山県高岡市石塚遺跡は弥生時代中期の遺構が多く調査され、土坑は土坑墓の可能性が提示(山口1992)されて以降、多くの地区が墓域(岡田ほか2001、藤田2003)と認識された。しかし、方形周溝墓以外は土坑が集中しているだけであり、土坑の床面や土層には木棺の痕跡は確認されていないので、土坑群を周溝と仮定して弥生住居を想定復元してみたい。石塚遺跡は和田川から西側に別れた五十玉用水から、北西方向に分かれた上北島用水を境にして南北に大きく分かれるようである(第10図下側)。北集落には東から都市計画道路・きぼう・老子地区などがあり、南集落には東から窪田・日本海ホーム・宮崎地区、67・68・71年調査区などがある。

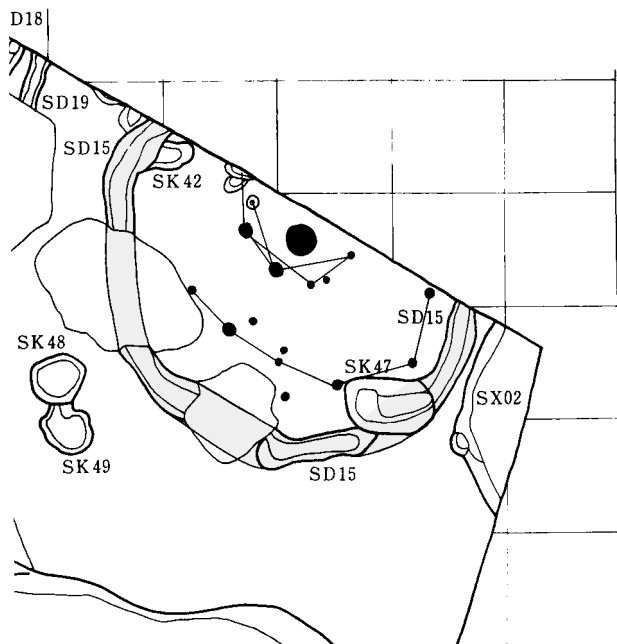
まず、北集落を検討してみたい。都市計画道路地区(第6図)では3次の調査(山口1987・1988、岡田ほか2001)と林地区(山口1992)が行われ、八日市地方9・10期が主体である。都市計画道路地区は北西方向に伸びる大きな鞍部に沿った微高地に立地し、古墳・中世・攪乱により多くの遺構が影響を受けている。第6図中央は概要報告での記述を元に弥生中期の遺構を黒塗りにしたものであり、1・2次調査区の境(第6図右下)では北側には土坑群が周溝状に巡り、南側には3条の周溝が想定可能である。またSK06・02は周溝の入り口部の可能性が想定されよう。2次調査区東側に位置する周溝状の遺構群(SD15など)は住居の可能性が想定される。他に2次調査区と林地区の境には隅円方形の周溝(内寸9.5×9.5m)と、林地区西端の北側にも周溝が想定可能であるが、不明確である。林地区東側では多くの土坑が隅円方形の周溝状に巡る可能性(第6図左上)があり、周溝は2条と思

第6図 石塚遺跡の弥生住居1

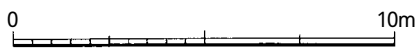




都市計画道路地区



SD15全形（南西から）



(1 / 200)

(黒塗りは筆者が写真から想定復元)

第7図 石塚遺跡の弥生住居2

われ、周溝内寸10×10mと10×9.5mと想定される。周溝はほぼ10mの隅円方形の周溝が造り替えられた可能が想定される。しかし、周溝内では4角形や多角形配置の柱穴列は想定しがたいので、住居としては否定的要素もあるが、造り替えが想定可能なので方形周溝墓の可能性は低いと思われる。3次調査区壁付近には土坑などが周溝状（岡田ほか2001）に巡る可能性もあり、周辺出土土器には一部古い土器が出土している。

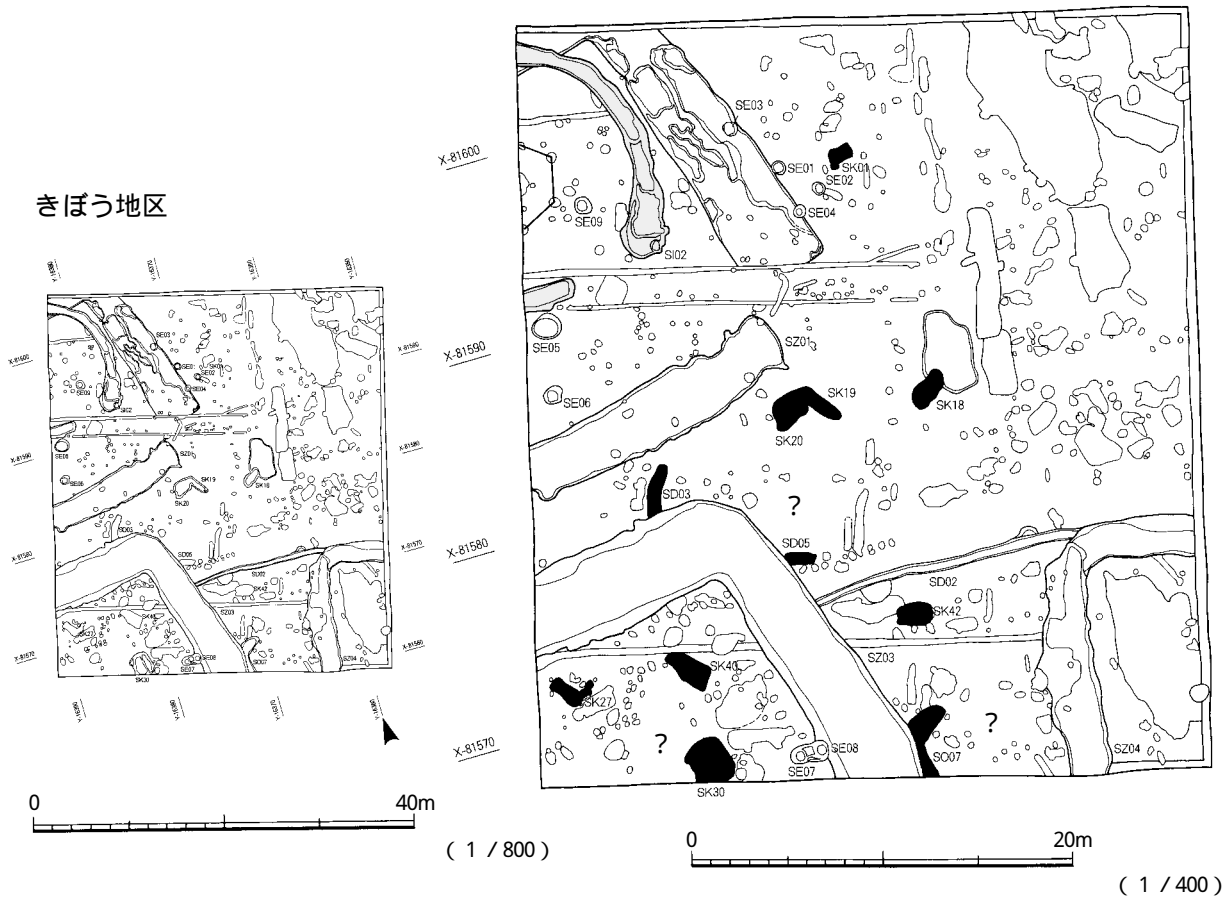
次に、住居の可能性のある遺構群を検討してみたい。第7図上段はSK10・28・35・33・32が楕円形に巡る可能性があり、その内側には一段低く（山口1987図版三上）になっている。低い部分の内側には、多角形配置の柱穴列（大きな柱穴列=4.5×4m、小さな柱穴列3つ=4.6×5・3×4.4m）が想定可能であり、その外側にも柱穴列が存在する可能性もあろう。しかし、低い部分は攪乱とみることも当然であり、中世の井戸（SE04）に伴う掘立柱建物の柱穴の可能性もある。本来は中世の掘立柱建物を復元してから、弥生住居の柱配置を検討すべきであるが、概報の記述だけでは筆者には無理であった。次にSD15は、北西方向に主軸（推定9.4m）を持つ楕円形である。内側（第7図右下）には灰穴炉と思われる土坑や多角形配置の柱穴列（3.6×3m）とSD15周辺にも多角形配置の柱穴列があるようにも見える（山口1988図版七下）。よって、住居に伴う遺構として推定復元したが、掘り下げられていないことから、攪乱の可能性も当然高い。

きぼう地区（第8図）は都市計画道路地区1次調査の北側に位置し、分布調査により3基の方墳が確認された（荒井2004）。発掘調査により弥生中期の周溝を持つ建物（SI02）が検出され、石塚遺跡における初めての住居址であり、高田地区の工房址SX07（第9図下）も含めて弥生時代の住居は稀である（藤田2003）という。SI02の周溝内は9.6×9.2m、多角形配置の柱穴列は3.6×2.8mが推定された。調査区には古墳群が存在し、中世の遺構や攪乱も多く、その影響と思われるが、中世の井戸は8基あるが掘立柱建物が報告されていない。第8図右側は概報の記述を元に弥生時代の遺構を黒塗したものである。SD07とSK18・20・30は土器の出土状態などから、土坑墓ではなく土器が廃棄された遺構と認識（藤田2003）され、従来の土坑認識とは異なっている。SK20はSK19と接しており、SD03・05を含めて楕円形の周溝を想定可能であり、またSD07の東側にも不連続な土坑が隅円方形に巡る可能性がある。その他にも、周溝状に巡る遺構群が想定可能であるが、概報の記述だけでは遺構の時期が特定されないので不明確なままである。遺構の時期は八日市地方9・10期主体であるが、若干の土器が古い可能性（八日市地方8期）が指摘された。

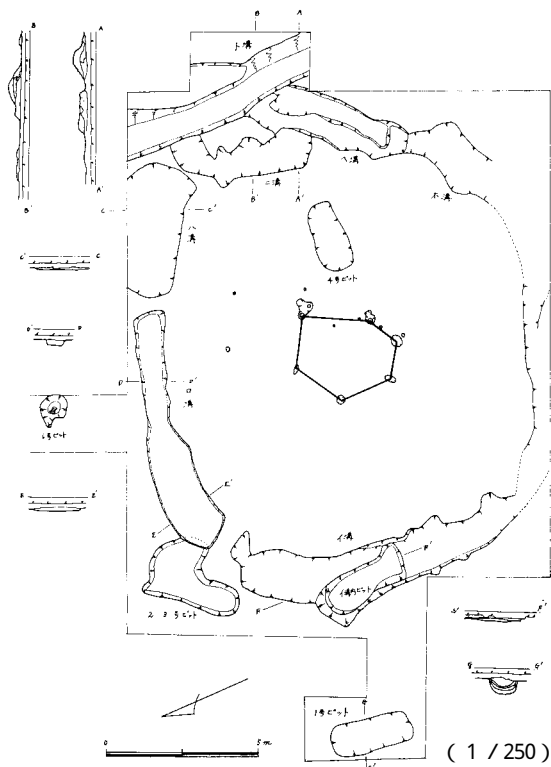
きぼう地区SZ04は周溝から中期の土器しか出土していないことや石塚古墳群の主軸と異なることから弥生中期後半の方形周溝墓とされた。しかし、一辺12m以上と推定される周溝墓は弥生中期としては規模が大き過ぎること、きぼう地区SZ02（14m）と規模が近いこと、2次調査SZ02・4次調査SZ04と方位が一致する可能性があること、周溝の幅が広い（1.8~2.6m）ことなどから、古墳（方墳？）と想定（第10図上）したい。また林地区にあるSZ03は方墳が想定（山口1992・岡田ほか2001）されているが、南東辺の中央部が開口していることやSK80などが撥形に開く位置に存在することから、小型の前方後方墳を想定してみたい。また規模や形状からは周溝を持つ建物を想定すべきであるが、古墳と同じ時期なので躊躇した。

北集落の西側に位置する老子地区（第10図下）では東側に小さい鞍部と西側には土坑（山口1996b）があり、白石地区では弥生土器のみ出土（山口ほか1998）だが、高岡環状線地区まで弥生中期の遺構（荒井・山口1999）があるので、石塚遺跡が北西側に延びていることが確認され、時期は八日市地方9・10期が主体と思われる。

次に南集落を検討してみたい。南集落は石塚遺跡の主体的な地区であり、67・68・71調査では多く



68年調査区



の遺構・土器が紹介（上野1974）された。68年調査地区（第8図下）では古墳の周溝に囲まれた柱穴群を弥生住居（周溝を持つ建物）と想定（久田1992）したが、時期・覆土の色が異なる（上野章氏教示）ようであり、岡本淳一郎氏も周溝を持つ建物と認定していない（岡本2006）。遺構の時期が異なるなら、2・3号ピットとイ号溝内ピットと6号ピットなどが周溝（内寸14m以上なので別の柱穴列が必要）になる可能性と、または古墳の周溝によって弥生住居の周溝が壊された可能性を想定したい。また71年調査区でも周溝が巡る可能性があり、住居と想定されるが、詳細は不明なので指摘のみとする。

窪田地区（山口1997）には大きな鞍部があり、福島地区東側（荒井1999）を巡って北集落東側の鞍部に繋がる可能性と上北島用水方向に繋がる可能性があり、また福島地区西側を巡って上北島用水に繋がる可能性と正和地区に伸びる可能性が想定（第10図下）されよう。その正和地区は鞍部（八日市地方7期）であり、石塚遺跡では谷部や窪地が入り組んでいたことが指摘

第8図 石塚遺跡の弥生住居3

(山口1997)された。

宮崎地区(第9図上)はほぼ同時期の遺構であり、土坑墓と想定(荒井1997)された。東側では、不連続に続く土坑群(SK123・129・134・132)が周溝状に巡る可能性とSK130で北側に隅円方形に巡る可能性が指摘できる。また、西側では土坑(SK131・139~142)が楕円形に巡っており、SK139~142では土坑が2列の周溝状である。その内側には2mの間隔を置いて、多角形の柱配置が想定可能である。しかし、柱穴と想定されるピットの深さが記載されていないので、本当に支柱穴に成り得るのかは定かでは無い。

高田地区は北東側が低くなることが写真から伺え、鞍部近くに位置している。SX07(第9図下)が玉造工房とされ、7×5mの範囲が想定(山口1995)された。柱配置は五角形(4.7×4.3m)が2つとSK96を周溝と想定するか、SK96内の柱穴を使って六角形(B類、4.9×4.1m)を想定することが可能である。五角形の柱列から2.1m、SK96から0.8m、六角形の柱列から1.3mに方形周溝墓が存在する。方形周溝墓や土坑群が古く、SX07が新しいと想定された。北西側には土坑群があり、2条に巡る可能性があるため周溝と思われるが不明確である。

森田地区(第10図下)では方形周溝墓3基が検出され、SZ04の墳丘部から八日市地方6期の土器(下濱貴子氏教示)が墳丘部に食い込む形で出土し、方形周溝墓より以前の可能性が指摘(山口1993)された。安川2地区東側は縄文後・晩期の大鞍部(荒井1997)があり、南東側を弥生中期の鞍部(SX58)が切っており、SX58は森田地区東側の鞍部に繋がる可能性と、縄文の鞍部に沿って北上する可能性があろう。

旭建設地区・日本海ホーム地区では遺構の多くが土坑(土坑墓の可能性)なのと、周辺には方形周溝墓や土坑墓が多く検出されたので、石塚遺跡の南側一帯が墓域(山口1996a)と位置付けられた。旭建設・日本海ホーム地区では八日市地方7期主体で若干古い土器が存在する可能性がある。東側に位置する旭建設地区の東側には鞍部があり、西側に位置する日本海ホーム地区では航空写真(写真2)から判断すると遺構ないし攪乱の染みが周溝状に見える部分が数箇所ある。周溝状の染みは攪乱の可能性も高く、また後世の削平により遺構が判然としないことから、想定自体が無理かもしれない。し

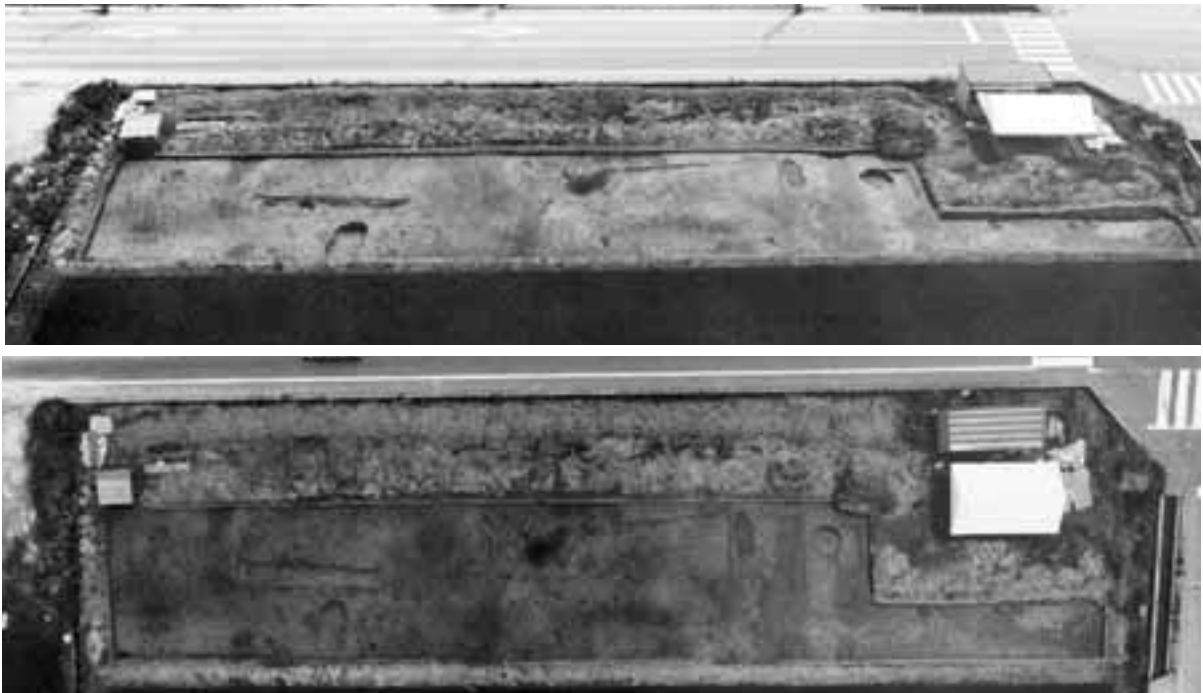
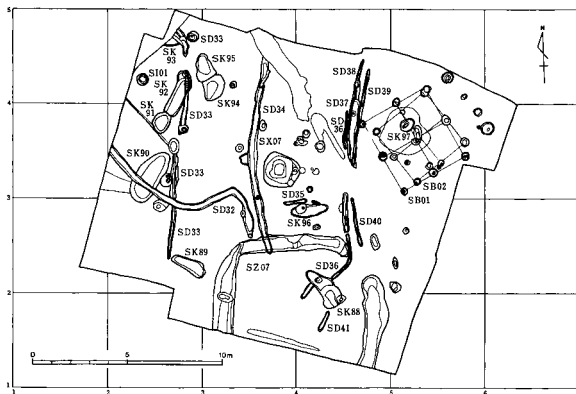
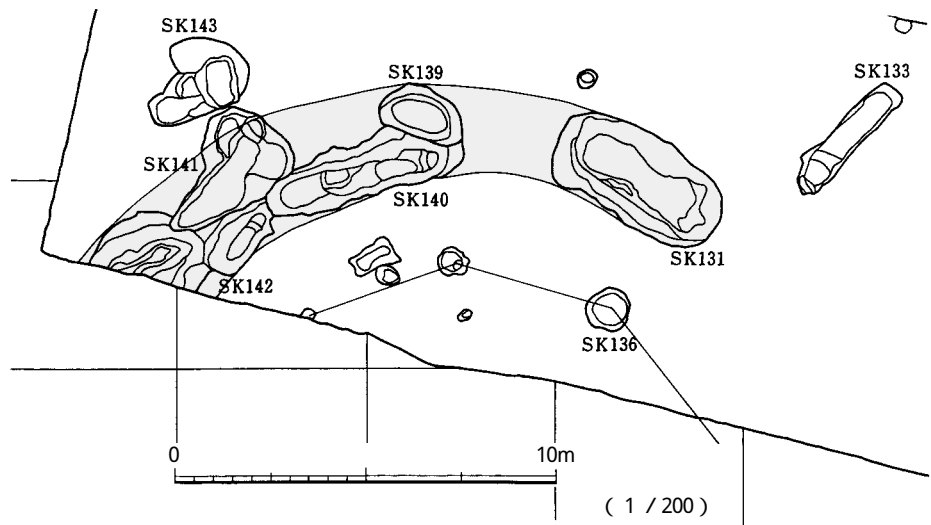
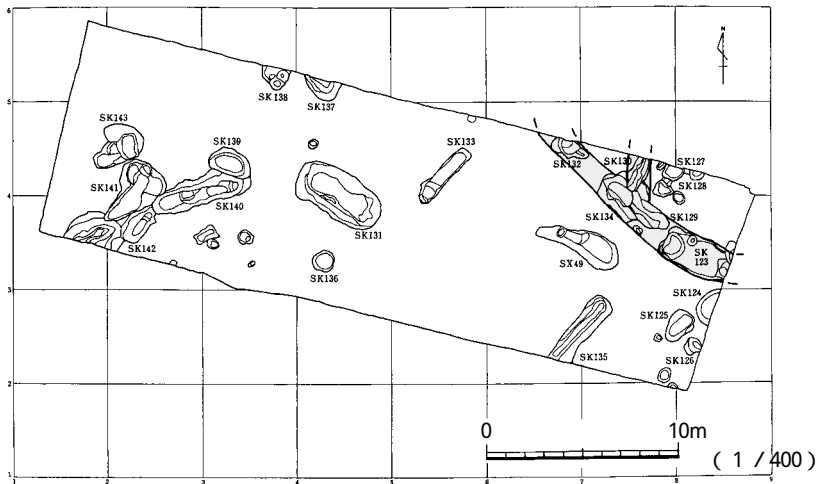
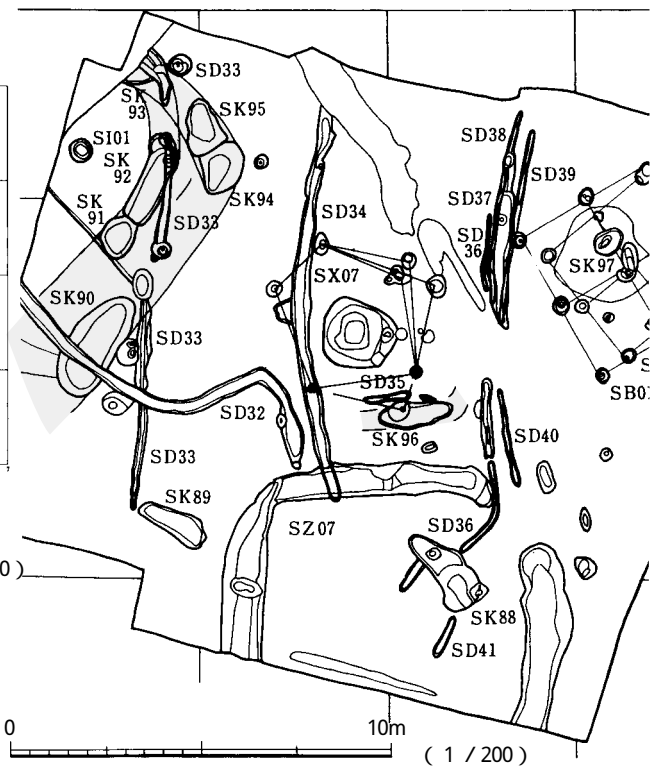


写真2 日本海ホーム地区全景

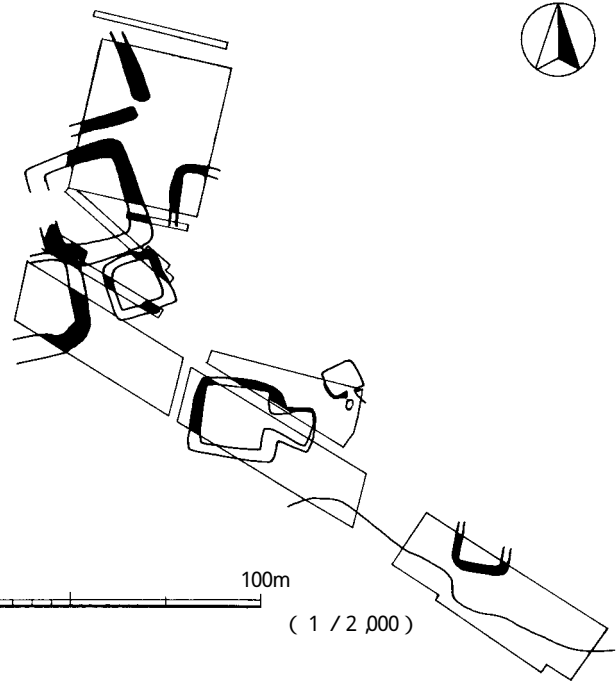


高田地区

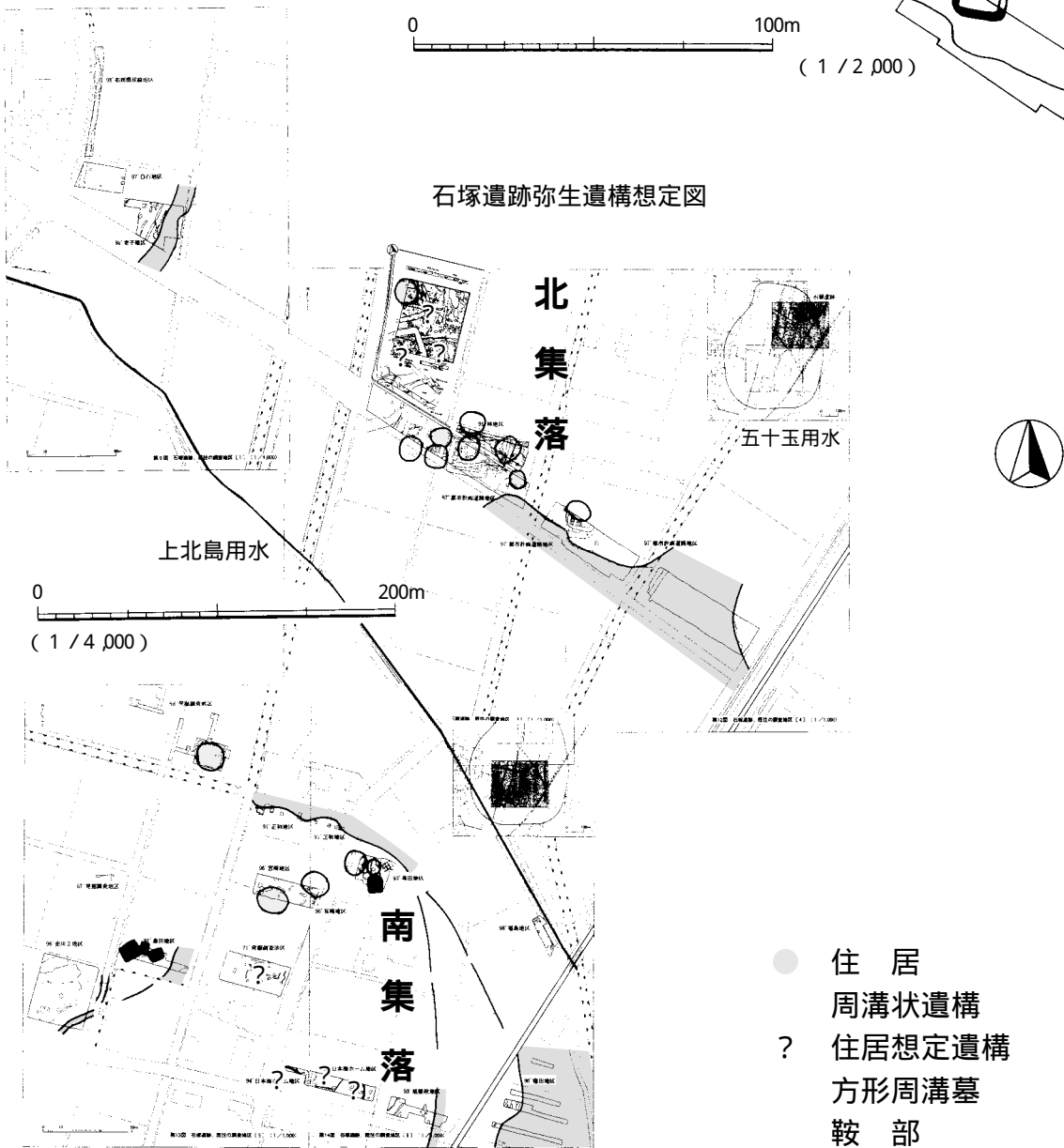


第9図 石塚遺跡の弥生住居4

石塚古墳群全体図



石塚遺跡弥生遺構想定図



第10図 石塚遺跡の集落想定図

かしヒスイ製勾玉と未成品、玉造工具類が出土していることから、単なる墓域ではなくて集落域と想定したい。

上記の想定復元を元に石塚遺跡の弥生中期の遺構配置（第10図下）を検討してみたい。北集落では南と東側に大きな鞍部があり、それに沿った微高地に中期中葉（八日市地方8期）から土器が確認され、弥生中期後半の住居と周溝状遺構（住居？）が多く確認される。この微高地は古墳時代前期には前方後方墳・方墳による墓域（第10図上）となる。南集落の東側（窪田地区）に大きな鞍部があり、上北島用水に沿って北西側に繋がっていたと思われ、その南西側の微高地に南集落が立地する。南集落では中期中葉（八日市地方6～8期）を主体としており、住居は68年・高田・宮崎地区、周溝状遺構は高田・宮崎地区、住居想定遺構は71年・日本海ホーム地区に存在する。住居は上北島用水路付近（大鞍部）に沿った微高地上に北西方向に存在し、方形周溝墓は微高地内の小鞍部に沿って存在した可能性が指摘できる。

石塚遺跡は大きく2つの集落に分かれ、南集落が古く（八日市地方6期）鞍部周辺に方形周溝墓が存在し、森田地区では墓域を形成している。北集落は少し遅れて土器（八日市地方8期）が確認され、中期後半が主体であり、栗林式系土器と榎田型石斧（馬場2001）も伴うなどの相違点を指摘できる。しかし、調査地点や調査面積などを考慮して、2つの集落とも同時併存しており、中期中葉の主体は南集落にあり、中期後半の主体は北集落にあるとしておきたい。両集落とも大きな鞍部に挟まれた微高地に住居があり、方形周溝墓は微高地内の小鞍部近くに立地したようである。

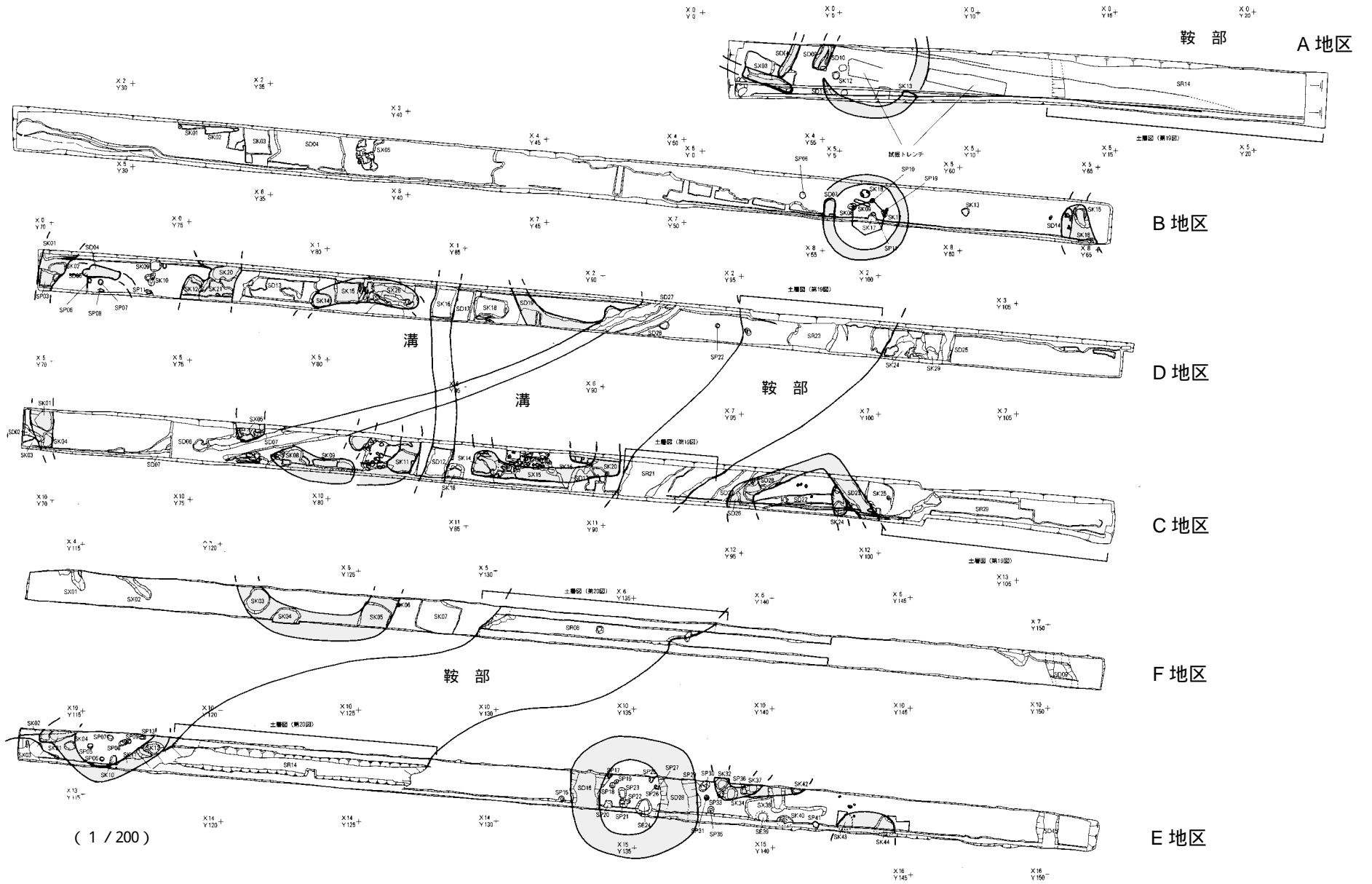
6 射水市作道遺跡の復元例

富山県射水（旧新湊）市作道遺跡（金三津など2006）を検討してみたい。幅3mの調査区なので遺構は全体を捉えられないが、遺構の時期は八日市地方遺跡8・9期である。報告書の記述を元に浅い土坑群などを周溝と想定すると10数箇所（第11図）があげられる。また、A地区西側とD区西端の周溝状遺構内には柱穴が確認されることから、住居の可能性が想定されるが、中世の遺構も存在するので定かではない。住居の可能性のある遺構群を第12図に提示した。B区東側ではSK17を灰穴炉とした六角形配置の柱穴列（推定2.6×2.4m）と周溝（SD07、推定内寸4.7m）が想定可能である。E地区西側では楕円形の周溝が想定可能であるが、内側には明確な柱配置を復元するには難しい。またE地区中央には円形に巡る幅広の周溝（幅4.2m）と内側には多角形配置の柱穴列（3.7×3.2m、B類か）が想定可能であるが、中世の井戸が接しているため柱穴も中世の可能性も高い。想定復元した遺構群の全体像は第12図下である。住居ないし周溝状遺構は14基あり、住居ないし方形周溝墓は2基がある。しかし、調査区幅が狭いことや遺構の深さ・時期などが不明確なので、周辺の調査や多くの方々の検討を待ちたい。

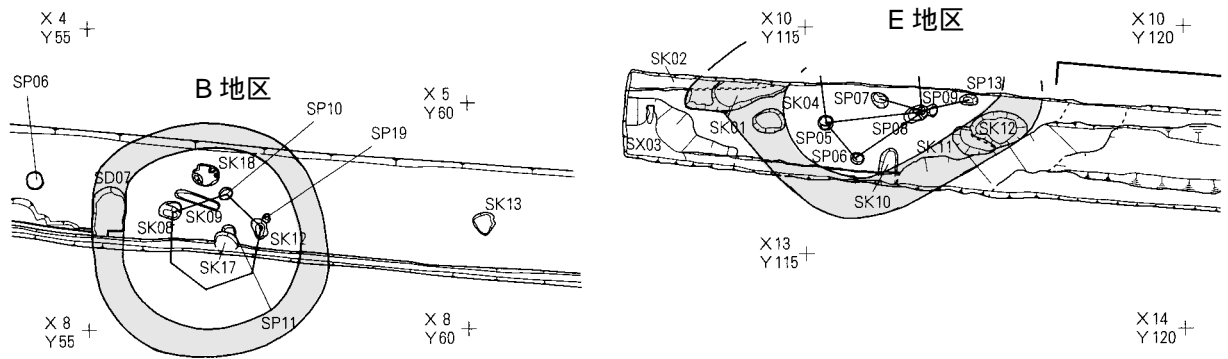
7 大阪府の復元例

大阪府の事例として、2例を紹介したい。第13図左側は寝屋川市讃良郡糸里遺跡であり、住居が4棟紹介（中尾2007）された。住居1の周りには土坑があり、性格は不明とされながら住居との関連性が高いとされた。今年3月大阪府立弥生博物館での展示を見学した際に、周溝が伴う可能性を認識した。住居1・2には土坑が周溝を持つ建物の可能性が高いことや、住居2と住居4の間には土坑が弧状に巡る可能性が指摘でき、住居5の存在を想定される。この認識は近畿弥生の会において東京都の及川良彦氏も同じ認識を示されており、荒唐無稽な想定でもないようである。柱配置も含めて、今後の報告を期待したい。第13図右側は寝屋川市八雲遺跡の第Ⅱ様式の住居（西口1987）である。土坑2

第11図 作道遺跡の弥生住居 1

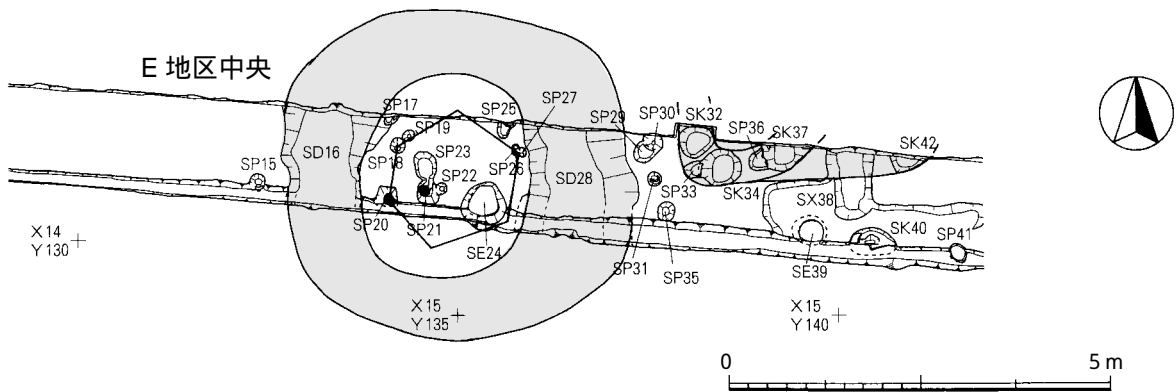


(1 / 200)



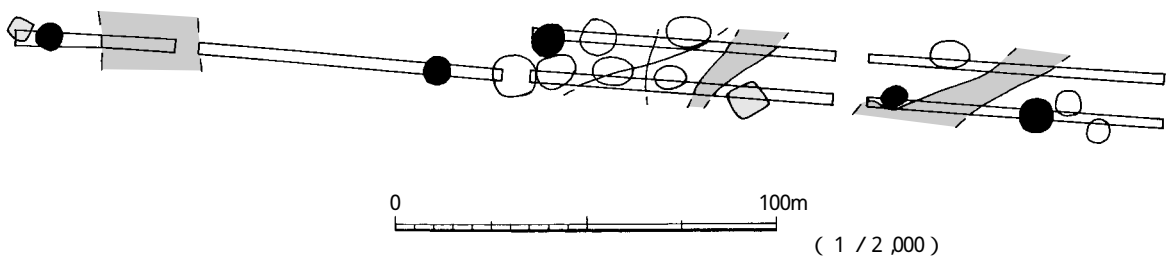
X 4 + Y 55 + X 5 + Y 60 + X 8 + Y 55 + X 8 + Y 60 + X 10 + Y 130 + X 10 + Y 135 + X 10 + Y 140 + X 10 + Y 115 + X 13 + Y 115 + X 14 + Y 120 +

住居想定案



(1 / 100)

集落想定案



(1 / 2,000)

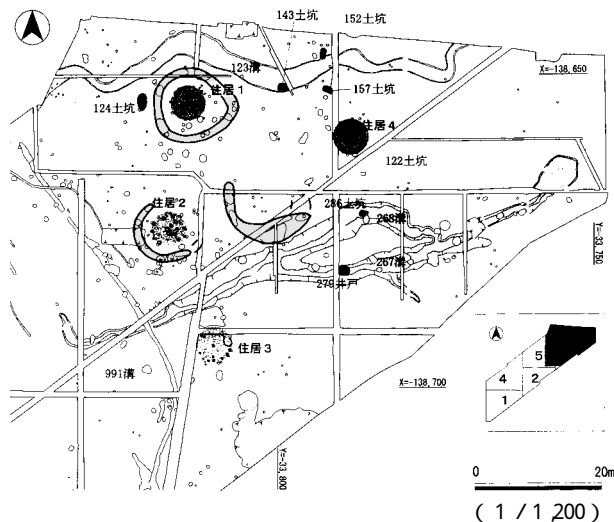
住居

住居か方形周溝墓

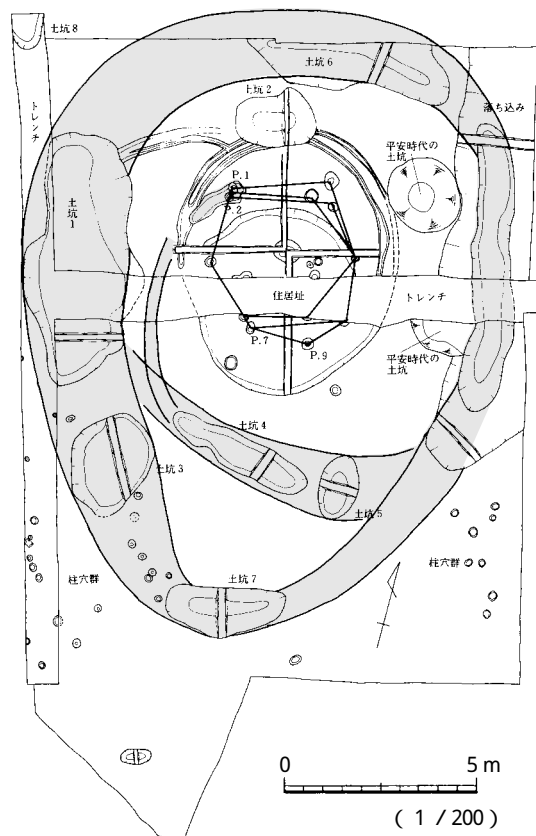
周溝状遺構

鞍部

第12図 作道遺跡の弥生住居 2



讃良郡条里遺跡



八雲遺跡

第13図 大阪府の弥生住居

は住居より新しい遺構であり、中央に棟持柱をもつ六本柱とされており、建替えが想定された。外側には土坑が存在し、玉造工房（竪穴）に伴う施設と認識（森田1990）されたが、周溝を持つ建物（久田1999・岡本2006）と思われる。土坑4・5は不整楕円形の周溝に交わる可能性と、土坑4とP1・2に伴う溝は共に浅い遺構なので、繋がって別（建替え）の周溝になる可能性もあろう。柱配置は六角形（岡本2006）が数パターンと七角形（A類）の可能性が想定される。

8. おわりに

今回は、住居と認識された遺構の再検討と、建物と認識されていない遺構群を報告書の記述や写真を参考にして住居と認定することを主眼とした。及川良彦氏が関東地方の方形周溝墓の中には実は周溝を持つ建物があることを提案（及川1998）され、岡本淳一郎氏により周溝を持つ住居が全国的に集成（岡本2006）されて、全国的な認識が深まっていると思われる。しかし、幅が狭い調査では遺構の個別認識はされても、遺構群と認識されていない例が多い。また小さな柱穴を半截して深さや土層をしっかりと記録するが、遺構群のまとめりとして柱穴列や建物と認識して報告することを気にしていない報告もあるように思える。これらの疑問から、遺構群として認識する必要性を感じ、自分なりに想定復元した。しかし、復元はあくまでも筆者の想定であり、今後遺構群として認定されるかは各方面から検討していただきたい。本稿をまとめるにあたり、多くの方々から教示を得たので氏名を記して謝意としたい。敬称略、伊藤雅文、上野 章、及川良彦、金三津英則、田嶋明人、下濱貴子、林 大智、藤田慎一。

参考文献

- 荒井 隆 1997 『市内遺跡調査概報Ⅵ』 高岡市教育委員会
- 荒井 隆・山口辰一 1999 『石塚遺跡調査概報Ⅴ』 高岡市教育委員会
- 荒井 隆 1999 『市内遺跡調査概報Ⅸ』 高岡市教育委員会
- 荒井 隆 2004 『市内遺跡調査概報ⅩⅣ』 高岡市教育委員会
- 上野 章 1974 「弥生時代付古式土師器」『富山県史考古編』 富山県
- 岡田一広ほか 2001 『石塚遺跡・東木津遺跡発掘調査報告』 高岡市教育委員会
- 岡本淳一郎 2006 「周溝を持つ建物の分類と系譜」『下老子笹川遺跡発掘調査報告書』 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 及川良彦 1998 「関東地方の低地遺跡の再検討 弥生時代から古墳時代前半の「周溝を有する建物跡」を中心に」『青山考古第15号』 青山考古学会
- 金三津英則ほか 2006 『作道遺跡発掘調査報告』 射水市教育委員会
- 金山弘明 2002 『野本遺跡Ⅲ』 松任市教育委員会
- 木立雅朗ほか 1993 『野本遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
- 出越茂和 2002 「弥生時代後期から古墳時代初頭の村落」『大友西遺跡Ⅱ』 金沢市埋蔵文化財センター
- 中尾智行 2007 「讃良郡条里遺跡 集落と初期遠賀川」『近畿の弥生時代は底を打ったか?』 近畿弥生の会
- 西口陽一 1987 『八雲遺跡発掘調査概要・Ⅰ』 大阪府教育委員会
- 馬場伸一郎 2001 「南関東弥生中期の地域社会(上・下)」『古代文化第53巻第5・6号』 古代学協会
- 久田正弘 1992 「北陸地方西部における弥生時代の地域性について」『石川県埋蔵文化財保存協会年報3』 石川県埋蔵文化財保存協会
- 久田正弘 1999 「弥生時代中期の北陸と長野の関係」『長野県考古学会誌92号』 長野県考古学会
- 久田正弘ほか 2004 『猫橋遺跡』 石川県埋蔵文化財センター
- 藤田慎一 2003 『石塚遺跡調査概報Ⅵ』 高岡市教育委員会
- 前田清彦 1995 『野本遺跡』 松任市教育委員会
- 松尾 実ほか 2005 「加茂遺跡」『石川県埋蔵文化財情報第14号』 石川県埋蔵文化財センター
- 宮川勝次・久田正弘ほか 2004 『穴口遺跡・穴口貝塚』 石川県埋蔵文化財センター
- 宮川勝次ほか 2004 『東的場タケノハナ遺跡』 石川県埋蔵文化財センター
- 宮下栄仁 1998 『吉崎・次場遺跡第16次』 羽咋市教育委員会
- 森田克行 1990 「住まいと生産活動」『季刊考古学第32号』 雄山閣
- 安 英樹 2004 「北陸」『弥生中期土器の平行関係』 埋蔵文化財研究会
- 山口辰一 1987 『石塚遺跡調査概報Ⅰ』 高岡市教育委員会
- 山口辰一 1988 『石塚遺跡調査概報Ⅱ』 高岡市教育委員会
- 山口辰一 1992 『市内遺跡調査概報Ⅰ』 高岡市教育委員会
- 山口辰一 1993 『市内遺跡調査概報Ⅲ』 高岡市教育委員会
- 山口辰一 1995 『石塚遺跡調査概報Ⅲ』 高岡市教育委員会
- 山口辰一 1996a 『石塚遺跡調査概報Ⅳ』 高岡市教育委員会
- 山口辰一 1996b 「石塚遺跡、老子地区」『市内遺跡調査概報Ⅳ』 高岡市教育委員会
- 山口辰一 1997 『市内遺跡調査概報Ⅴ』 高岡市教育委員会
- 山口辰一ほか 1998 『市内遺跡調査概報Ⅷ』 高岡市教育委員会

法仏式と月影式

田嶋 明人

1 はじめに

本稿の当初の目的は、月影式の上限を確定し、月影式の様式的特徴を整理することにあった。それは、筆者にとっては、漆町編年で月影Ⅱ式を白江式（田嶋1986、2006）としたことにより、月影式の「型式」内容の再整理が必要となっていたことにもよる。しかし、検討を進める内に、法仏式新段階（表1での2群）の全てを月影式と同一の様式としてとらえざるを得ないと思えるに至り、法仏式の上限と法仏式の様式内容の検討も必要となった。

具体的検討では、月影式の特徴とされる「強固な地域性」を象徴する北陸固有型式の中から、供膳、墳墓への供献、祭祀等に用いられた形式（以下祭式土器と呼ぶ）を対象とし（注1）、その成立、展開、変質・衰退の推移を跡づけることとした。北陸固有型式にこだわったのは、法仏式と月影式が、いわゆる外来系土器を主要な組成とする猫橋式（注2）と白江式に挟まれてある土器群であることにもよる。

結果として、法仏式新段階と月影式とを同一様式として理解することを提案し、法仏式新段階と月影式は大別様式の中での小様式ととらえた。そして、法仏式古段階（表1でのⅤ-3群）を法仏式から除外した。また、法仏式と月影式の境に関する作業仮説と、従来から議論のあった塚崎21号竪穴の帰属についての試案を提示した。

このことにより、月影式が顕著な個性をもった個別の様式であるとの自らの呪縛（註3）から一応の解放を得たとも思っているが、新たな課題も生まれた。そして、祭式土器という一部形式での検討に終止し、さらには、現物にほとんどあたらないまま、報告書により検討を進めたため、重大な誤りや、誤解が多々あるのではないかと思われる。ご寛容頂き、ご叱正、ご教示の程お願いしたい。

2 研究状況

1) 編年案について

表1は、今回提示する編年案である。漆町編年との関連では、法仏式にあたる2群を2分割。（+）群を3-1群、3群を3-2群とし、月影式にあてた。4群から白江式としたことの根拠等は、別に報告（田嶋2006）している。

本稿では、2群（法仏式）と3群（月影式）を主たる検討の対象とするが、後続する4群以降の理解は漆町編年によるとして、先行するⅤ様式併行期の様相については、以下のような理解の元、検討を進めている。Ⅴ-2群とⅤ-3群は一つの様式に包括できるとの予測でいる。

Ⅴ-1群 Ⅳ様式からの様式的特徴を踏襲する段階

Ⅴ-2群 その様相を払拭し北陸型様式の直接的端緒となる段階

Ⅴ-3群 北陸型様式の素地が作られる段階

2 群 北陸型様式（地域）が成立・開花する段階

表1 加賀でのV様式併行期から白江式にかけての編年

編年案			標式資料			現状での型式名	谷内層 1983	楠 (1996)	栃木 1995	高橋 2000
群	型式名	漆町 編年 (1986)	加 (北加賀)	賀 (南加賀)	越前・能登・越中 (比較資料)					
1群	V(仮称) 1	1群	(南新保J区1号溝)	(猫橋9号溝)		猫橋式		2期		
	V(仮称) 2		八田小耐II区3号住居6号溝等 旭SI64							
	V(仮称) 3		二口町竪穴 桜田・示野中SB10	平面梯川106号溝 平面梯川105号溝						
2群	2 1	法仏式 2群	中奥・長竹4次2区SI01 八幡SH-22 北安田南出3区SI01 竹松3号住		江上A SD1、SD2他 (越中) 谷内ブンガヤチ30号土坑 (能登)	法仏式	法仏式	3期	7期	後期IV期
	2 2		倉部SI02 中奥・長竹3次3区SK02 中村ゴウデン8号住		鹿首モリガフチT8 (能登) 奥原2号住 同4号住 (能登)					
3群	3 1	月影式 3群	高橋セボネSK54 八里向山A SI101A 一塚SX22 戸水大西SE18		吉崎次場 S-3b土坑 (能登)	月影式	月影I式	4期	8期	庄内併行I期
	3 2		御経塚シンデンSK50 御経塚タチナカ7号住 御経塚タチナカ14号住		竹生野4号土坑 (能登)					
4群		4群	月影土坑 御経塚シンデンSI07 御経塚ツカダ82-3住		谷内ブンガヤチ2号竪穴 (能登) 東古市縄手1号住 (越前)					庄内併行II期
5群		白江式 5群	御経塚ツカダ82-2住 (松寺A-1号溝) (漆町33号溝)		今浜A4号竪穴 (能登)	白江式	月影II式	5期	9期	庄内併行III期
6群		6群	南新保D、BG-20 松寺SK56 額新町ST01	漆町298号土坑 漆町7号溝下層	滝谷八幡社SB10 (能登)					

() 参考資料

2) 研究状況と課題

< 法仏式と月影式の現況 >

月影式は、浜岡賢太郎、吉岡康暢が設定（浜岡・吉岡1962）、谷内尾晋司がⅠ式とⅡ式に細分した（谷内尾1983）。しかしその後、先にも触れたが、筆者が漆町編年で月影Ⅱ式を白江式（田嶋1986、2006）としたことにより、「型式」内容の再整理が必要となっていた。漆町編年では、この課題に答えるものとして（+）群を設けたが、詳細は未検討のままとなっていた。

法仏式は、谷内尾が上記論考で猫橋式と月影式をつなぐ「型式」として設定した。法仏式に関しても、その後、栃木英道、楠正勝が詳細な編年を提示（栃木1995、楠1996）したが、時間幅で谷内尾が設定した法仏式と整合しているとはいえず、栃木と楠の編年の間にも根幹部分で不一致が見られる。

この状況は、法仏式、月影式が、資料が少ない中、点的資料で設定された「型式」であったことにもよるが、その後、資料が増加したにもかかわらず、「型式」的、様式的特徴を何に求めるかの検討が必ずしも十分でなかったことに原因があると考えている。このことは、塚崎21号竪穴資料を、時間軸では概ね共通理解に達しているにもかかわらず、法仏式とするか、月影式とするかで確定をみていないことにも、象徴的に現れている。

< 研究事例 >

該期での様式理解に関しては、吉岡が、塚崎Ⅱ式（21号竪穴段階）を塚崎Ⅲ式（月影式）に包括するか、塚崎Ⅰ式（月影式以前）に包括するかの検討にあたって、結論は保留しているが、塚崎Ⅰ式との比較で祭式土器の形式・組成の違いを指摘している（吉岡 1976）。該期の様式理解にあたって祭式土器を検討対象とした最初の事例であろうか。

その後、谷内尾により法仏式が設定されるが、それを受け栃木は、月影式前段階の土器様相の理解として、猫橋式からの系譜をもつ土器、新たに出現する形式、猫橋式からの系譜をもつものから派生し別個の形式として展開するもの、からなり、は月影式に継承され主体的形式となるとし、様式を構成する形式・組成に言及。さらに、の動きを、Ⅴ様式を二分する画期と評価する。そして、を法仏式の組成として理解し、谷内尾編年の法仏式概念を修正・再構築した上で、月影式の前段階の全て（Ⅴ 3群、2群＝筆者追記）を再度、法仏式と呼称したい、とする。栃木の指摘は、該期の組成に詳細な検討を加えたものとして大いに評価できるが、を月影式に継承され主体的形式となるとする一方で、月影式の独創性とは何かが問題になる（新出形式は、月影甕と結合器台のみ）とする。潜在的にせよ法仏式と月影式を独立した様式であるとして検討を進めたためか、とも理解している。

対して木田 清は、月影式に見られる形式の出現をもって月影式とするとした（木田1998）。丹後系の北陸型鉢形高杯（注4）の出現をもって月影式とするのである。木田の理解では、法仏式新段階のかなりの部分が月影式となる。「月影式とされた版型」の再検討を迫るものとして、同時に栃木の課題を解決するための切り口の一つとして評価したい。

一方、吉岡は、弥生期の土器の編年と画期を検討するなかで、弥生Ⅵ期を設定し、法仏式をⅥ - 1期、月影式をⅥ - 2期とし、両型式をⅥ様式の大別様式の中を含めた（吉岡1991）。さらに、先行するⅤ期の土器様式の特徴を（多地域の形式を＝筆者追記）合成した北陸型土器組成の成立、Ⅵ期を定型化された北陸型祭式の成立、と論じている（吉岡1991）。ただ、吉岡の論考発表時には、加賀・能登ではⅤ - 3群の良好な資料がみられなかったこともあるが、Ⅴ - 3群と法仏式との関連は判然としない。

その後、栃木、楠により詳細な編年が提示されることになる（栃木1995、楠1996）。

< 楠編年、栃木編年にみる法仏式 >

加賀、能登を対象とした、該期の編年的研究は多い。主要なものをあげれば橋本(1975)、吉岡(1976・1991)、谷内尾(1983)、栃木(1995)、楠(1996)、堀 大介(2002)がある。もっとも詳細な編年が示されている楠編年、栃木編年から、法仏式の理解について具体的に検討する。

楠編年は北加賀地域の土器群を対象とし、3期を法仏式とし、4小期に細分する(楠1996)。次項で検討するが、筆者が該期の指標と考えている北陸型形式(図1・2)の出現時期(ないしは存在するとする時期、以下同じ)を編年表からみると、北陸型の鉢形高杯は、初現形式A類および定型化形式Ⅱ類が3-2期、器台は初現形式B類が3-3期、定型化形式は3-4期、有段小型壺は初現形式A・B類が3-(2)・3期、定型化形式Ⅱ-Ba類が3-3期と4期の交、有段鉢は初現形式が一部3-2期で主体は3-3期、定型化形式Ⅱ類は3-3期には確実に出現するとする。

このように、楠編年では3-2期に、北陸型の鉢形高杯、有段鉢の初現形式と鉢形高杯の定型化形式Ⅱ類を置くが、器台、有段小型壺、有段鉢の主体は初現形式も含め3-3期以降、3期の後半段階とする。そして3-2期とする鉢形高杯は溝等資料であることから帰属を保留するとすれば、検討の対象とした形式の出現時期は3期でも新しい段階となる。楠編年と私案との対比は表1に示したが、楠編年3期が私案のⅤ-3群から2群にまたがっているとの理解で良ければ、ここでみた形式の出現時期は、楠編年の後半段階で、2群に相当するとできる。時間軸は概ね一致することになる。

栃木編年は能登地域の土器群を対象に、法仏式併行期を7期とし4小期に細分する。そして7期は楠編年3期に対応するとする(栃木1995)。楠編年同様、該当形式の出現時期をみると、鉢形高杯ではB類の初現形式が7-1期と2期の交、器台は初現形式D類が7-1期、定型化形式Ⅱ類は7-3期、有段小型壺は定型化形式Ⅱ-Bb類が8-1期、有段鉢は初現形式E類が7-1期、定型化形式Ⅱ類が7-2期とする。栃木編年は、楠編年と異なって、北陸型の鉢形高杯、器台、有段鉢等の初現形式の出現を7-1期におき、器台、有段鉢の定型化形式Ⅱ類も7-2・3期と古く置く。

楠編年3期は、私案でのⅤ-3期を含めているのは前記の通りで、私案の様式区分と異なる。従って、北陸型の形式に関しては、楠編年の3期を区分する指標としては重視されるはずもない。対して、栃木編年では、栃木自ら指摘した前記の動きとして、くだんの形式の出現を7期成立の指標としているようにとれる。が、7期と楠編年3期とは併行関係にあるとする。両者の編年は、時間軸と法仏式とする様式内容の理解で大いに異なっているとしかできない。栃木編年7期に関しては、私案での2群に相当すると理解し、該期の有効な編年とみたい。

3 北陸型形式の成立と推移

1) 北陸型形式について

2群には、組成をなす各器種に北陸型の形式が成立すると整理している。2群の祭式土器の中から鉢形高杯、器台、有段鉢、有段小型壺、有段細頸壺を対象に、北陸型とできる形式を抽出し、その形式分類を試みる。さらに型式的特徴により初現形式、定型化形式とに分ける。初現形式は北陸型の祖形となる形式。定型化形式とは北陸型形式としての完成型式を指す。また、定型化形式に関しては、初現形式の型式的特徴を踏襲するものをⅠ類。型式を大きく変化し明瞭な北陸固有型式とできるものをⅡ類とする(註5)。Ⅱ類の要件をさらに示せば、便宜的ではあるが、型式変化を踏まえプロポーションでの完成型式であること、全体の器肉が一定し薄く仕上げて(仮器化)いること、類例が

定量的にみられること、等である。

北陸型形式を以上により整理してみたが、初現形式と定型化形式については典型的なものは容易に区別できるが、中間的形態の型式もみられ、初現形式と定型化形式の系列に関しても、その間の推移が必ずしも連続的でなく、別要素が付加されることもまみられた。ここでの分類、系列の整理については、北陸型形式の多様性と推移の大枠を理解頂くための暫定的なものとして了解頂きたい。

<鉢形高杯 図1> 2群にはV群以来の有稜高杯もみられるが、該期に出現する鉢形の杯部をもつ高杯を対象とする。A類からD類の4類を抽出した。鉢形高杯は、北近畿地域の高杯の系譜で理解している。

1・4は、A類、B類の初現形式で多分に山陰の影響もみられる。型式特徴から初現形式であるが北陸固有の形式としたい。1は該期の甕口縁に近い形態をもつ。擬凹線をもたない型式は確認していない。2は、初現形式の形態的特徴を備えており定型化形式Ⅰ類とする。定量みられる。3は本類の定型化形式Ⅱ類とできようか。4はB類の初現形式で口縁部下端も薄く作り鋭く屈曲する。擬凹線をもたない型式もみられる。5は、A類ないしB類の系列にある定型化形式Ⅰ類としたいが、有段鉢F類との関連も残したい。6は希な事例であるが、A類ないしB類の系列にある定型化形式Ⅰ類としたい。7はB類系列の定型化形式Ⅱ類とできようか。

C類とした8は、緩く屈曲した頸部から口縁部を伸張する形態の初現形式で、北陸固有の形式としたいが、特徴が少なく保留する。9は定型化形式Ⅰ類とできようか。Ⅱ類とできる事例は例示しなかったが少なくない。

D類とした10、11は初現形式。北近畿に先行形式が見られ、その系譜の形式であることは確実であるが、口縁部を伸張している点で、北陸型としての型式変化をはじめた変容形式ととらえたい。12は定型化形式Ⅰ類とできよう。Ⅱ類は確認できていない。

他にも北陸型とできる鉢形高杯の系列が存在するとみているが、確定に至っていない。

<器台 図2> 山陰系譜の器台を対象とする。A類からD類の4分類6細分した。対象とする初現形式はすべて北陸型の固有型式と考えている。

A類(1~5)は、口縁部と筒部との間に明瞭な境をもたない形式、口縁部がさほど伸長しないものをA-1類とし、1~3を初現形式。伸長するものをA-2類とし、4を初現形式とした。筒部は3のような柱状のタイプと、4・5にみるラッパ状に湾曲すタイプがみられる。ここでは、全形の分かる資料が少なく、筒部での分類はとらなかつた。14はA-2類の系列での定型化形式Ⅱ類とできようか。そして筒部柱状のタイプに属する。器台での定型化形式Ⅱ類は本例を挙げることで省略する。なお、5は、口縁部を伸張を完了しており全体の形状では定型化した型式と同一の形態を備えるが、器肉がやや肉厚で均一でなく、擬凹線文やスタンプ文で加飾しており、定型化形式Ⅰ類とする。スタンプ文等での加飾の有無は、その器種や使用の場との関連での検討を要するが、一般論として古い様相とできよう。B類(6~10)は、口縁部と筒部との間に明瞭な境をもつもので、A類同様口縁部伸張の程度によりB-1類とB-2類に細分した。8は越前の事例で、B-1類と判断しているが、本類のすべてがこの形式で占められるとはできない。なお、B-1類あるいはA-1類では、V期での山陰系器台と区別の難しいものを含む。

C類は、小型で、定型化形式となっても口縁部がさほど伸長しない形式として分類した。11は初現形式としておく。

D類とした12・13は、脚部が受け部に匹敵するまでの大きな脚部をもつ。本類も口縁部、脚部が伸長するタイプと相対的に伸長しないタイプがみられるようである。12・13は定型化形式Ⅰ類、Ⅱ類は

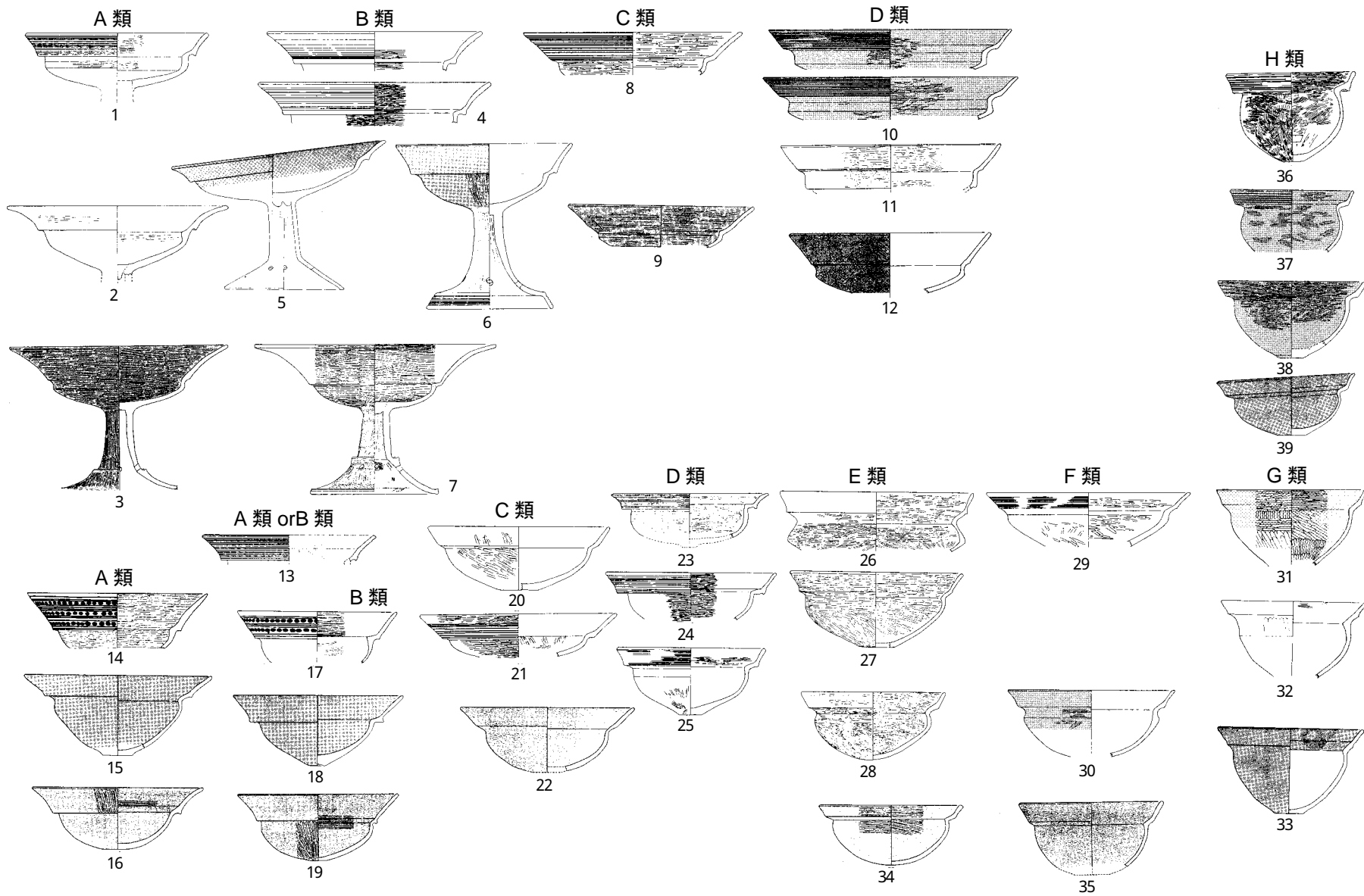


図1 鉢型高杯・有段鉢の分類 (S= 1 / 8)

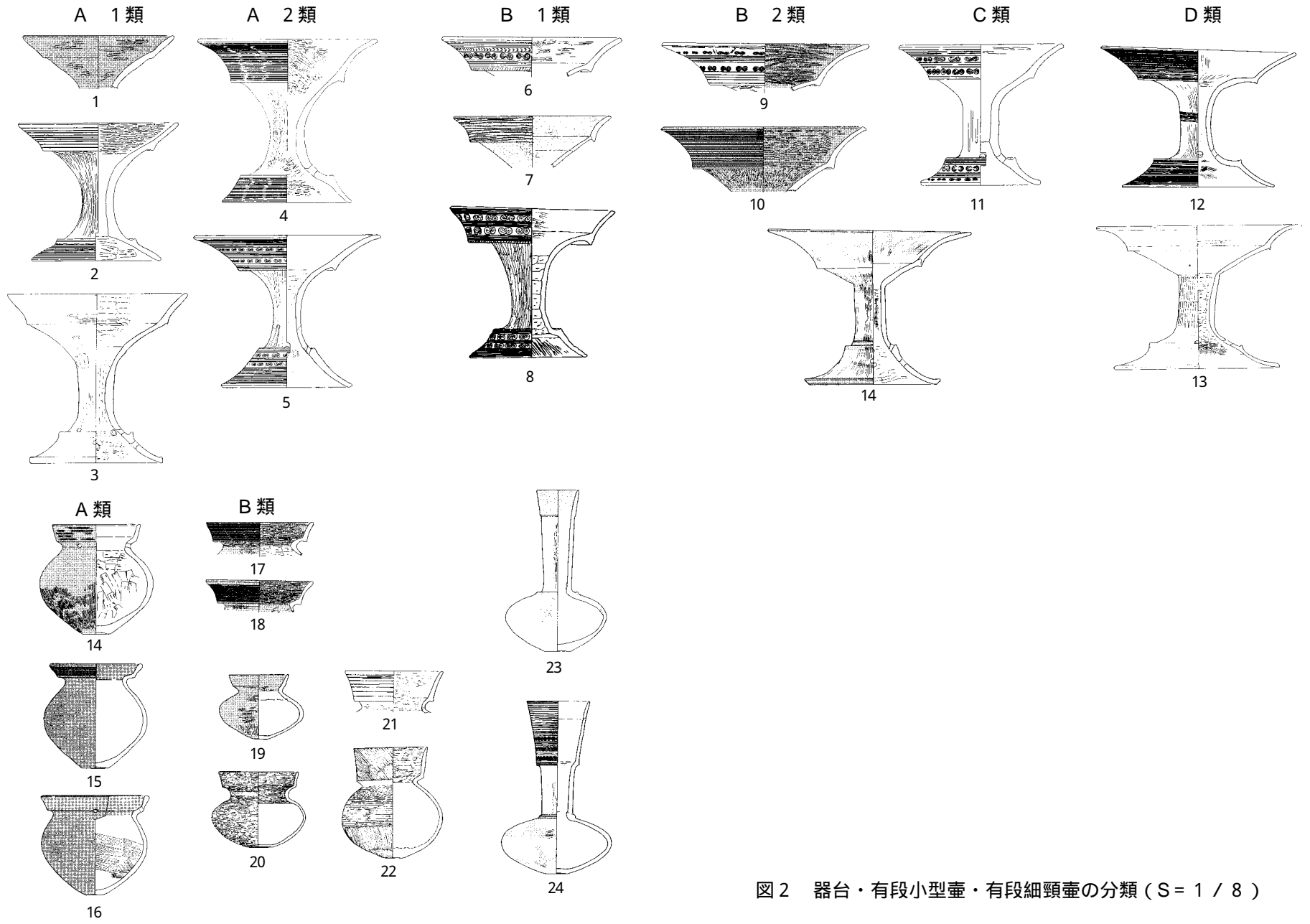


図2 器台・有段小型壺・有段細頸壺の分類 (S = 1 / 8)

確認できていない。

北陸型への変化を山陰での変化と対比すれば、口縁部を伸張させる変化は連動しているが、外反伸張させ、先端部を薄く作る点で異なる。ただ、山陰においても鼓型器台への変化が確定する前後の形式には、北陸型初現形式と類似した形式が見られる。

<有段鉢 図2> 有段の精製鉢を対象とする。山陰、北近畿等を主たる系譜とするきわめて多様な精製鉢がみられる。8類に分類した。他に定量的にみられる形式であっても今回の分類から除外したものは多い。有段鉢の初現期の形式は、山陰、北近畿等の形式と峻別できないものが多い。そのことで、高杯や器台のごとく初現形式を北陸型に限定できないが、当該形式が一斉に出現する状況と、その出現を端緒として北陸型の形式が生み出され、盛行することを根拠に、北陸外地域の形式と類似するものも含めここでは初現形式と扱う。

A類からC類は、それぞれ高杯のA類からC類に対応し、D類~G類、中でもE類は高杯D類の系譜と理解している。A類では、14・15を定型化形式Ⅰ類、16を定型化形式Ⅱ類とするが、15については定型化形式Ⅱ類の特徴を保持する。13はA類ないしB類と関連する初現形式で山陰にも事例がみられる。B類では、17・18を定型化形式Ⅰ類、19を定型化形式Ⅱ類とするが、18は15同様Ⅱ類の特徴を保持する。初現形式が確定できた時点で再検討したい。C類では、20・21が初現形式、22は判然としないが口縁部の屈曲が緩慢な形状から同類の定型化形式Ⅱ類に該当する可能性をもつ。

D類からG類は先行形式、類似形式が北近畿地域にみられる。型式変化ではA類~C類のように口縁部を大きく伸長しない。D類の23・24・25、E類の26、27、F類の29、G類の31・32を初現形式とする。G類は北近畿に酷似した資料がみられるが、他は、併行期の北近畿での形式と比較し、微妙ではあるが口縁部を伸張しており、北陸型への変容形式としたいが、教示をお願いしたい。28はE類、30はF類、33はG類の定型化形式Ⅰ類。34・35はこれら形式の系譜に連なる定型化形式Ⅱ類としたい。H類は山陰に類似形式がみられる形式。本類も型式変化では口縁部をさほど伸長しない。36を初現形式、37・38を定型化形式Ⅰ類、39は同系譜の定型化形式Ⅰ類か。

なお、F類の内29は高杯の可能性もある。また、A類の定型化Ⅰ類とした15は、高杯の項でも触れたが、F類との関連でとらえるべきか。有段鉢は、当初より深いタイプと浅いタイプが見られるが、総じて深いタイプから浅いタイプへ、底部をもつものから丸底へと推移する。

<小型有段壺 図2> 有段口縁の小型精製壺を取り上げる。A・B類ともに山陰系譜の形式で、先行形式、類似形式がみられる。A類は、口縁部を伸張させず端部を丸く作り、頸部に円孔を穿つ。B類は口縁部を外反伸張させ、先端部を細く作る。A類では14を初現形式、15・16を定型化形式Ⅰ類とする。Ⅱ類についてはB類との区別ができない型式になると想定しているが不明。B類は17・18を初現形式。19~22は、A類との関連も含めその推移をたどれないが、B類の定型化Ⅱ類としておく。また、19・20は口縁部を伸張しないのに対し、21・22は伸張する。便宜的に前者をBa類、後者をBb類としておく。

<有段細頸壺> 細頸壺はV - 3群には確実に見られるが、2群期に精製品が出現する。口縁部有段の23・24は北陸型の形式として良からう。当該壺は、頸部全長と段部から口縁端までの長さの比を型式変化の指標とできる。23を初現形式、24を定型化形式としておく。

2) 2群土器にみる北陸型形式の様相

<古相> 図3は、加賀の土器群から古相とできる北陸型形式を抽出したものである。北陸型の形式は、若干の定型化形式Ⅰ類を含むが、そのほとんどが初現形式からなる。

鉢形高杯ではA類(7・22・28・29)(注6)、B類(21)、C類(36・37)の初現形式と、C類と思われる定型化形式Ⅰ類(35)からなる。D類は確認していない。また、38は有稜タイプの北陸型の可能性をもつものとして掲載したが、事例が希で形式として認定できていない。器台の可能性もある。器台ではA類(8・15・16・18)、B類(26・27・30・31・39)、C類(17)の初現形式と、A類の定型化形式Ⅰ類(34)からなる。10・11は高杯の脚部の可能性をもつがスタンプ文をもった17・39との関連で掲載した。有段鉢では、C類(40・41・20?)、D類(5・19・33)、H類(1)の初現形式とF類(13)、H類(2・14)の定型化形式Ⅰ類がみられる。他に今回分類から外した6の定型化形式Ⅰ類?、32の初現形式が見られる。有段小型壺ではA類(12)、B類(23・24)の初現形式がみられる。

これら形式の共有関係から遺構間の併行関係を検証できるまでの資料は整っていないが、該期の標式資料である北安田南出3区SI01を軸に見ると、鉢形高杯A類7では八幡SH-22の22、北安田南出1区SD02の28・29と共有関係が見られ、有段鉢D類5では竹松3号住(19)との共有関係がみられることから、鉢形高杯B類の初現形式21も該期の所産であることができる。また、無量寺Bの溝状資料は一括資料とはできないが、有段鉢D類33との関連から、A類の定型化形式Ⅰ類器台34も該期の可能性をもつと推測している。その他、有段鉢H類の定型化Ⅰ類、器台初現形式等の共有関係もみられる。

以上で見たように、初現形式を主体とし、定型化形式Ⅱ類を含まない土器群が存在することは確実である。このような土器群を古相としてとらえている。

<新相> 図4は、土器群から新相の北陸型形式を複数に出土している事例を中心に抽出したものである。意外と事例は少ない。図4で明らかのように、定型化形式Ⅱ類を主体とし、先での土器群との様相差は明らかである。

鉢形高杯では定型化形式Ⅰ類ないしⅡ類(1・12)、A類系譜かと推定している定型化形式Ⅱ類(4)、B類の定型化形式Ⅱ類(14)、C類ないしD類との系譜をうかがわせる定型化形式Ⅱ類(2・3・13)が見られる。器台では定型化形式Ⅱ類(6)と、Ⅰ類としたい16、帰属時期を保留するがC類(15)とがある。有段鉢では、定型化形式Ⅰ類ないしⅡ類(19)、有段小型壺ではB類の定型化形式Ⅱ類(5)が見られる。

なお、相川A群土器の資料(7~10)は、該期の資料とされているものであるが、有段小型壺A類7は型的に新しいとできるが初現形式であり、器台10も初現形式とせざるを得ない。対して鉢形高杯はC類系譜かと推定される定型化形式Ⅱ類(8・9)からなる。明らかに新旧の形式が混在した資料と考えている。

以上は希少な事例であるが、鉢形高杯の定型化形式Ⅱ類との供伴では、祭式土器での明確な初現形式は見られないとできる。そして、古相とした土器群との様相差は余りに大きい。初現形式からなる土器群から、定型化形式からなる土器群への推移については、定量的にみられる有段鉢の型式変化での検討が有効と考えているが、少なくとも北加賀では定型化形式の段階での有段鉢は顕在しない。次に、この間の状況を能登の資料を援用しつつ概観する。

<能登での状況> 図5の1から14は、能登での古相とできる北陸型形式を抽出したものである。加賀同様、初現形式が主体となる。

荻市下層大溝は時期幅があるため、2~5の高杯D類のみ抽出した。D類は加賀では確認していない。徳前C SD12他の資料(6~10)は、竪穴を囲む溝資料で一活性は高いと判断している。D類高杯6、A類器台8、A類ないしB類有段鉢7、E類有段鉢9等、初現形式からなる。谷内ブンガヤ

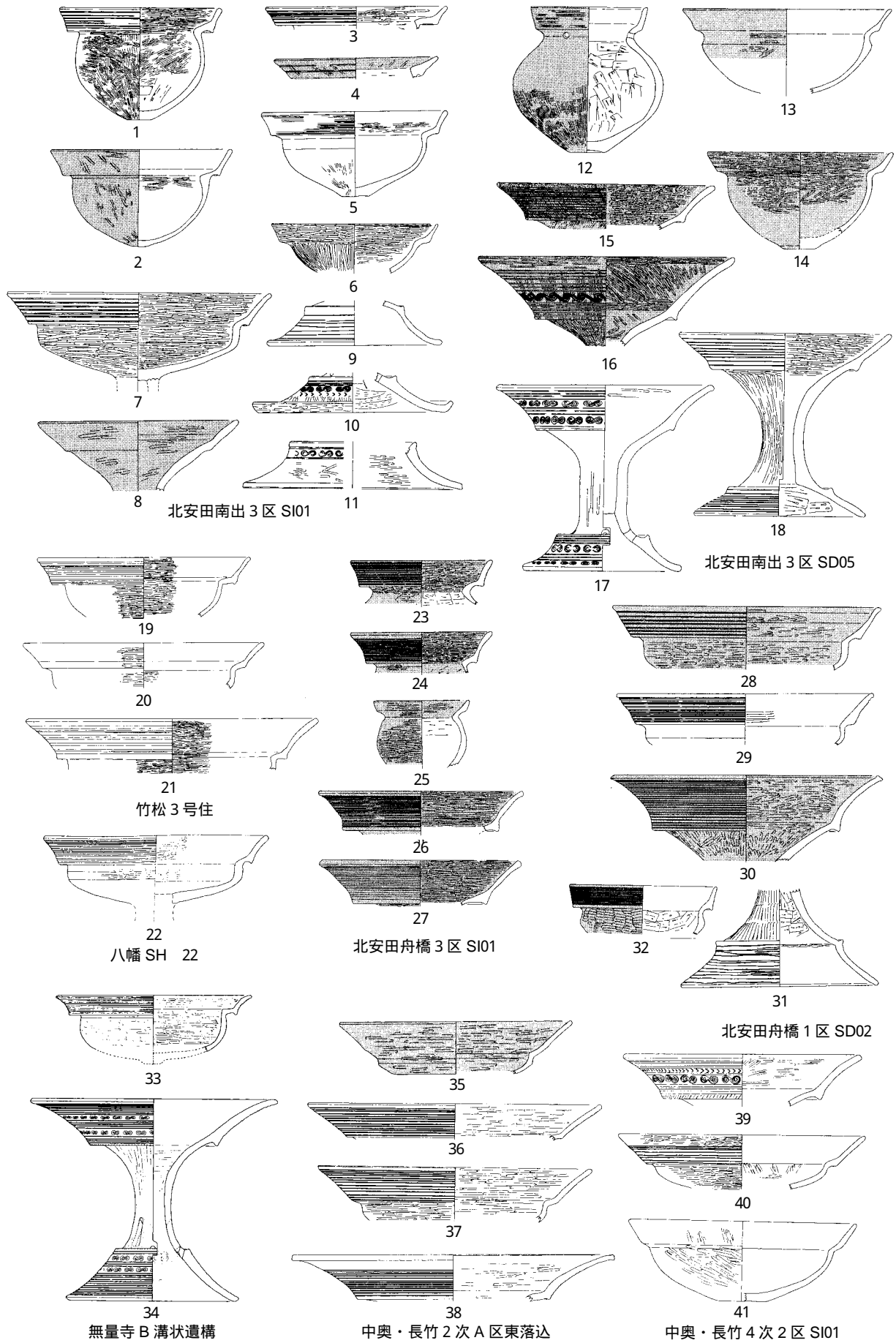


図 3 古相の北陸型形式・加賀 (S = 1 / 6)

チ3号竪穴下部の器台12は脚部形状が変異しているがA類の初現形式とできようか。また、谷内ブンガヤチ30号土坑の13・14は、丹後系の台付鉢の2 - 1群併行期の資料と考えているものであるが、口縁部を伸張しており、該期での変化を象徴する参考事例としてあげた。

図5の15~32、図6の33~69は土器群から新相の北陸型形式を抽出したものである。ただし、図6の59~69は、3群に下る可能性を検討している。

鹿首モリガフチの資料(図5、15~28)は、溝資料ではあるが、祭祀に伴うとされ、時間幅なしとはしないが一活性は高いとみている。器台の明確な事例を欠くが、古相から新相への推移を窺う好資料である。高杯では、15・16は定型化形式Ⅰ類ないしⅡ類でC類の系譜かと推測している。対して

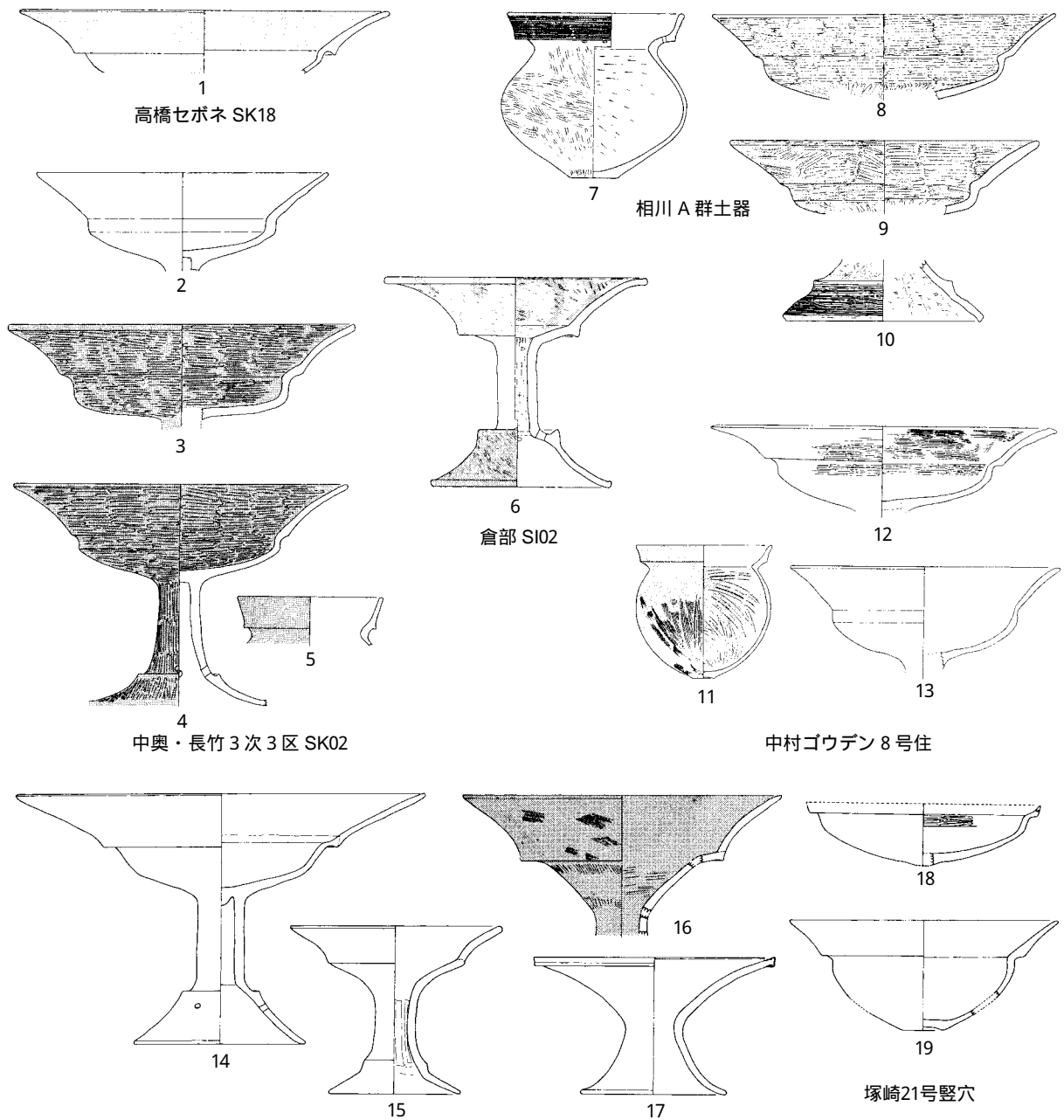


図4 新相の北陸型形式・加賀 (S = 1 / 6)

17は器肉を薄く作っているが、初現形式の形態を踏襲した亜種とでき、類例を知らないが、A類ないしB類系譜の定型化形式Ⅰ類、18もA類ないしB類系譜、あるいは有段鉢F類との関連が考えられる定型化形式Ⅰ類。有段鉢(19~23)は、定型化形式Ⅰ類に分類したが、先の分類でも触れたとおりⅡ類の特徴を備える。有段小型壺では初現形式A類の系譜に連なる定型化形式Ⅰ類の24~27とB類系譜の定型化形式Ⅰ類かと推定される28からなる。

当該資料は、定型化形式Ⅰ類を主体にⅡ類を含んでいる可能性をもち、初現形式は含まない、とできる。また、定型化形式Ⅰ類としたものでも、器肉を薄く作り赤彩する等、定型化形式Ⅱ類に類似する。当該資料は初現形式を含まない。定型化形式Ⅱ類成立前後の事例としたい。

後続する土器群と考えているのが、奥原4号住(29~32)、矢田4号溝(33~40)、奥原2号住(41~46)等である。奥原4号住の有段鉢32は有段鉢A類、31はB類の典型的な定型化形式Ⅱ類で、鹿首モリガフチ有段鉢19・22等と比較するなら、小型化し、底部が丸くなり、器肉が一層薄くなるなどの型式差が見られる。矢田4号溝の有段鉢38・39、奥原2号住有段鉢43でも同様の変化がみられる。

さらに新しい土器群と考えているのが、宿東山1号住、同・SG-01の土器群である。1号住の器台59・60は、改めて述べるまでもなく定型化形式Ⅱ類とだが、器肉が一層薄くなり小型化している。1号住の有段鉢63も浅くなり同様の変化が見られる。SG-01有段小型壺67・68は、2-2群以降に盛行する口縁部を伸張するBb類ともみられる。組成を議論できる資料ではないが、2-2群以降に盛行する壺が、鉢より多い。これら特徴は、3群併行期の様相かとみている。

一方、宿東山6号住は、竪穴を拡張しており、二時期の資料からなるが、明らかに古いとできるものを検討する。有段鉢50・51は初現形式とできるもので、有段壺52も器肉を薄く作っているが初現形式の形態を踏襲する。また、器台57・58は、1号住と比較しても大型で重厚な造りの定型化形式Ⅱ類とできる。55の高杯はA類の定型化形式Ⅰ類とできる。これら資料に関しては、鹿首モリガフチ資料の時期を下るものではない。

<中沼C遺跡での検討 図7> 中沼C遺跡は方形周溝墓からなる墳墓遺跡。折戸靖幸は供献された器台と細頸壺のセットを出土状況を踏まえて整理し、図7にみる変遷を想定した(折戸1989)。からは筆者が追記したものであるが、折戸は をⅠ段階、 をⅡ1段階、 ・ ・ をⅡ2段階とする。この変遷を北陸型形式の分類に即してみれば、 の器台は初現形式D類、細頸壺は北陸型での検討から除外したが、2群には見られる加飾された形式である。 の器台は口縁部を伸張しているがB類の初現形式ないしは定型化形式Ⅰ類とできよう。有段細頸壺は初現形式、 の器台は定型化形式Ⅰ類の可能性をもつ大型で重厚な作りで、有段細頸壺は定型化形式Ⅱ類とできるが、口縁部長に対し有段部が短く古相とできる。対して ・ の器台、細頸壺は、器肉を薄く均一に作った典型的な定型化形式Ⅱ類とできるものである。折戸が示した推移は、北陸型形式の成立、展開で筆者が想定している推移とも良く整合する。

3) 小 結

北陸型形式からみた2群の推移は、初現形式からなる段階、 定量の定型化形式Ⅰ類が主体を占め定型化形式Ⅱ類出現前後の段階、 定型化形式からなる段階として大枠整理できよう。

の段階は、加賀での北吉田南出3区SI01、竹松3号住等、能登での徳前C SD12他が該当する。該期は初現形式よりなる段階であるが、北吉田南出3区SI01の有段鉢にみるように定型化形式Ⅰ類を確実に含む。また、無量寺B溝状遺構の器台は定型化形式Ⅰ類とした。共伴関係に保留部分を残すが、該期に器台にも定型化形式Ⅰ類が成立していた可能性を予測させる。

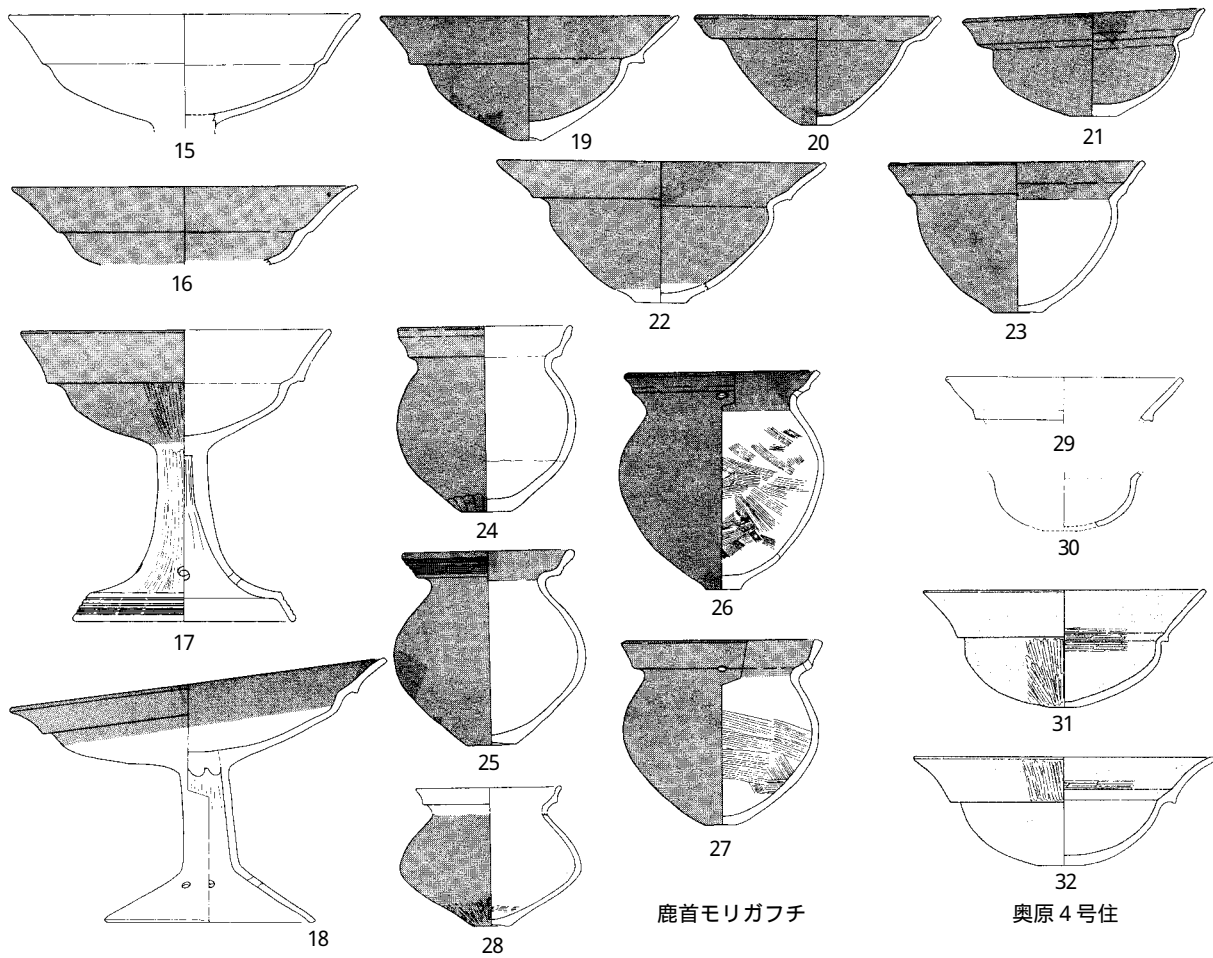
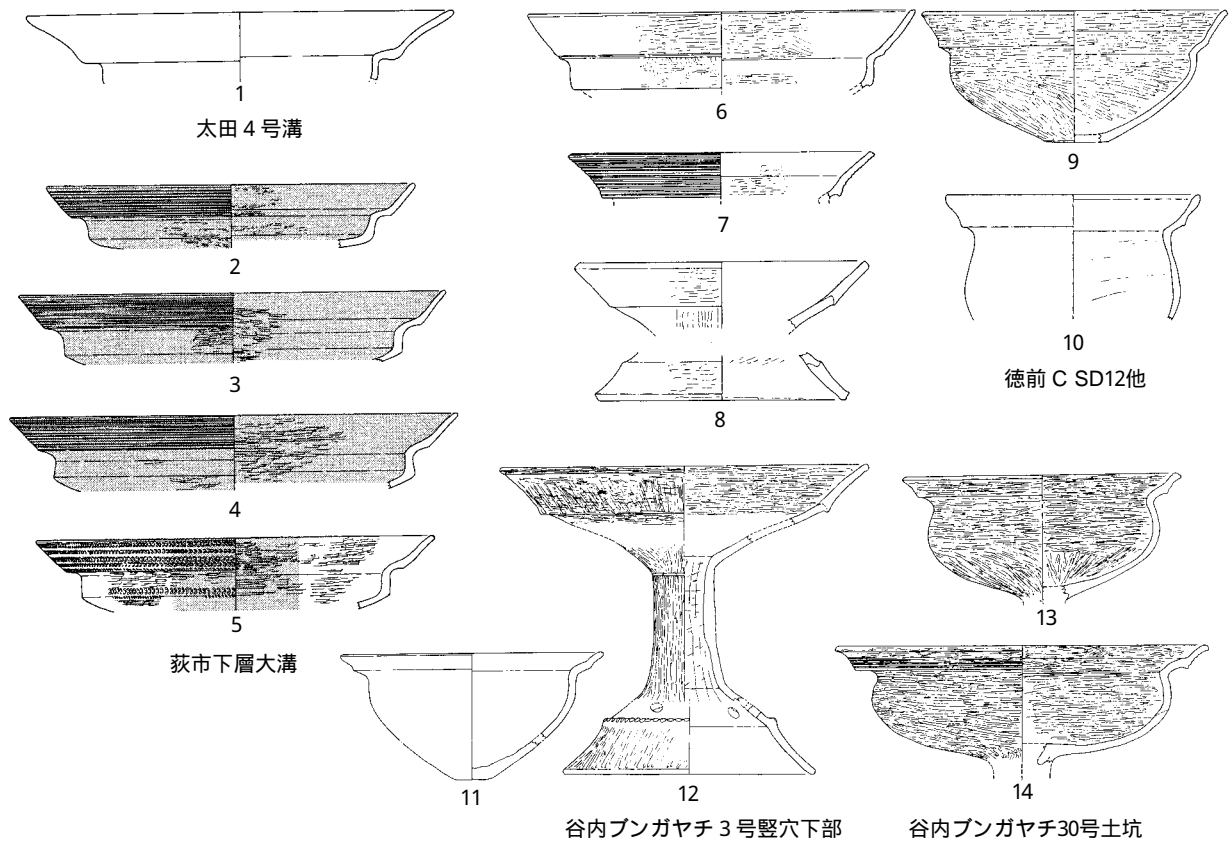


図5 2群での北陸型形式・能登 (S=1/6)

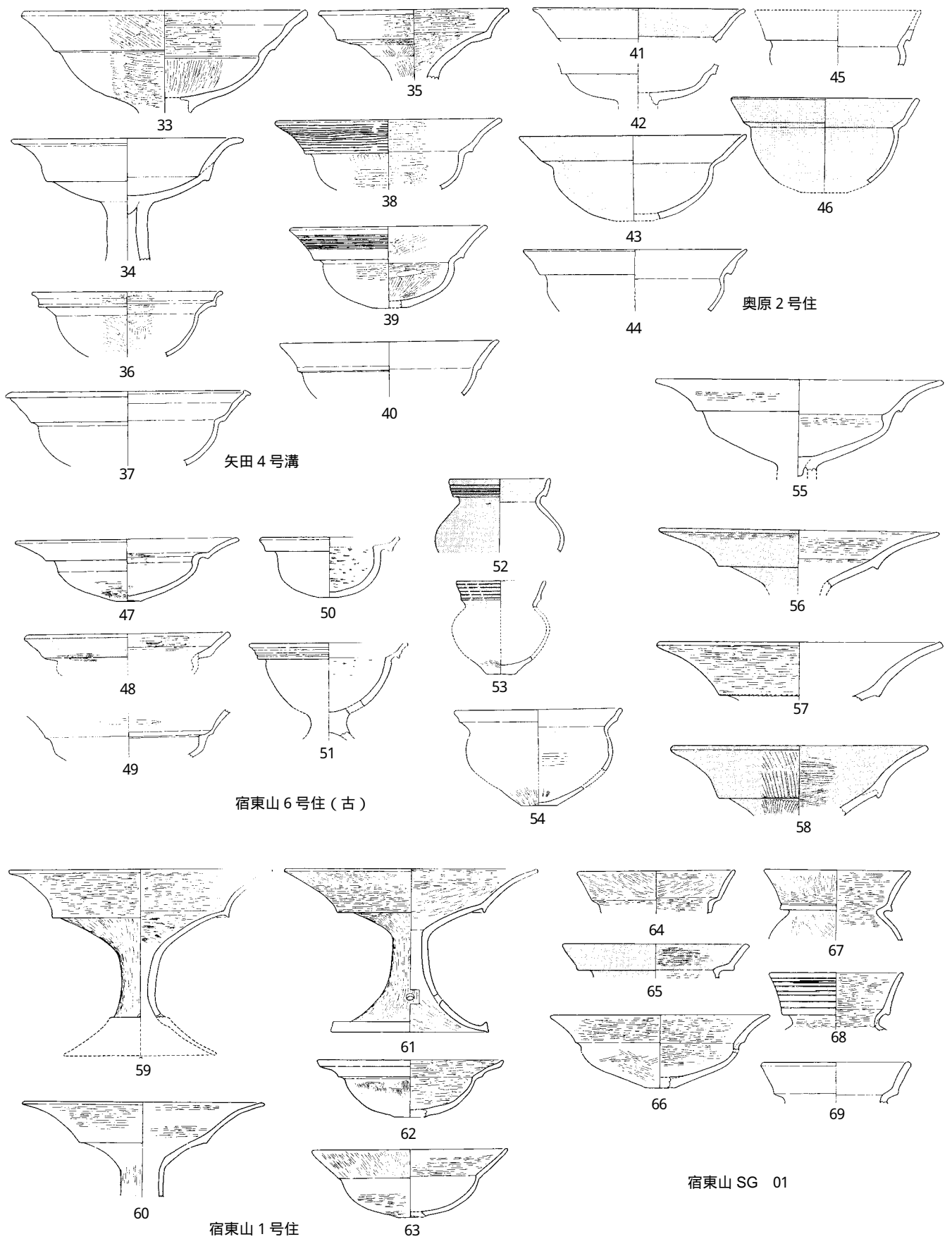


図6 2群での北陸型形式・能登 (S = 1 / 6)

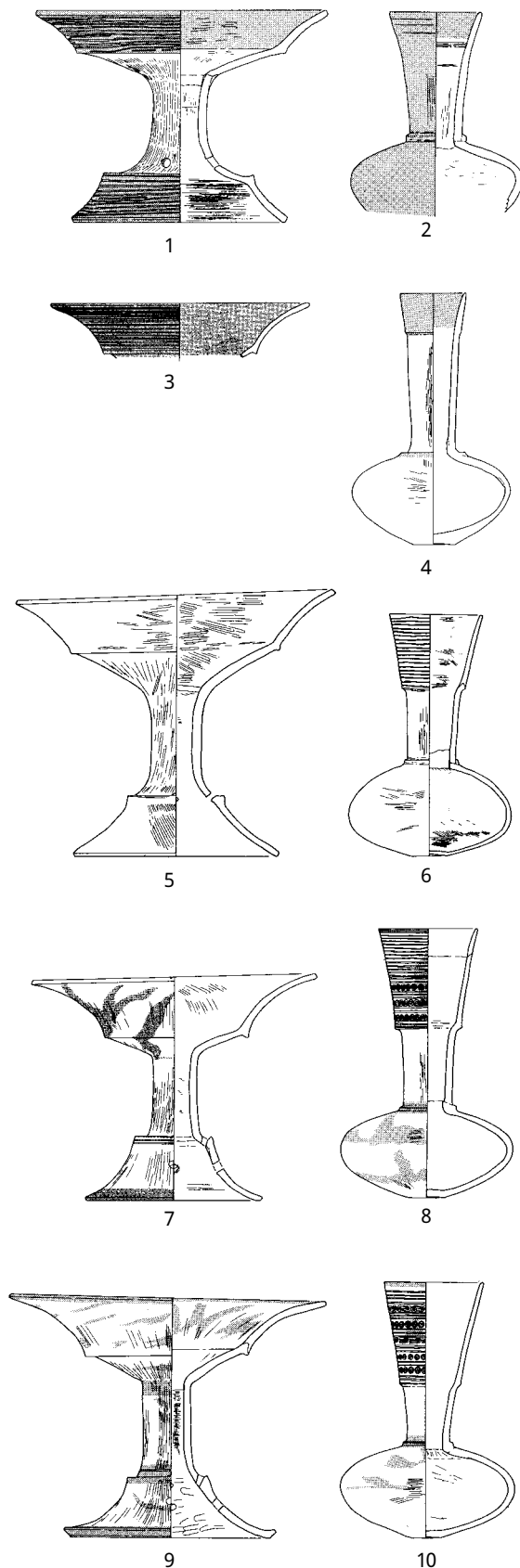


図7 中沼C遺跡にみる器台+有段細頸壺の推移
(S=1/6)

の段階は、能登での鹿首モリガフチが該当。宿東山6号住(古)も該期に近いといい。加賀では明確な事例を確認できていないが、強いて求めるならば、中沼C遺跡でのとした段階が対応しよう。該期には鉢形高杯、器台、有段鉢、有段小型壺等、先で検討した形式で定型化形式Ⅰ類が定量化し、鹿首モリガフチでの鉢形高杯、宿東山6号住(古)での器台にみるように定型化形式Ⅱ類が成立していた可能性が高いとみている。ただ、典型的な北陸型形式からなる組成の完成には至っていない段階とできよう。なお、該期には、宿東山6号住の有段鉢のように、初現形式が共伴する可能性も残しておく。

の段階は、加賀での中奥・長竹3次3区SK02、中村ゴウデン8号住等、能登では奥原4号住、同・2号住が該当する。また、中沼Cでの・がまさにこの段階に該当する。該期は定型化形式Ⅱ類からなる段階で、中奥・長竹3次3区SK02でみたように、有段小型壺でも定型化形式Ⅱ類が確実にみられる。初現形式が共伴することはないと理解しているが、中村ゴウデン8号住にみたように、定型化形式Ⅰ類は共伴する。

以上、三つの段階はあくまでも時間軸としての段階である。様式理解を含めた編年区分としては、の段階は事例が少なく実態に保留部分を残しているが、定型化形式Ⅱ類を含む可能性をもち、初現形式からなる段階とは峻別できることからに包含し、と・との二つに細分して理解する。を試案での2-1群に、・を2-2群にあてる。

4 祭式土器からみた編年の概略

祭式土器は土器組成のなかで重要な位置を占める。ここでは以上での2群の祭式土器の検討を軸に、Ⅴ-2・3群から9群までの土器群の推移を概観し、当初の目的である法仏式(2群)月影式(3群)の様式的特徴についての見通しを示す。

1) V - 2・3群

北陸型祭式土器がみられず、北陸固有の祭式成立以前の段階とする。加賀の土器群は、山陰系、丹後等北近畿系、近江系、及びそれら地域経由と推定される瀬戸内系、近畿系、東海系等からなり、いわゆる外来系の形式で土器組成が形作られる。これら地域からなる広大な土器圏に包含されていた段階といえようか。そして、北陸内での地域色は、語弊もあろうが、受容する外来系形式の頻度差で形作られる。吉岡は、該期の土器群の特徴を、くだんの地域の形式を「合成した北陸型土器組成」とする(吉岡1991)。その点で該期は、大枠ではⅣ様式での凹線文系土器波及期での状況を継承した最後の段階ともとらえているが、北陸がこれら地域から無作為に外来形式を受容したわけではないであろう。2群での北陸型の土器様式に向けての素地を作った段階と評価している。該期に関しては、北陸(型)とできる特徴、波及のシステム等、基礎的な検討課題の多くを残している。標式資料は表1の通り。

該期の北陸内での地域色は甕組成での近江系の在り方に特徴的にみられる。近江系甕は、V - 2群は南加賀では希で北加賀に偏在し、V - 3群には、保留部分を残すが北加賀からも退潮するとできる(註7)。しかし、該期に北陸から近江系が消えるわけではない。越中・能登では、甕の主要な組成に留まっている(註8)。ただ、V - 2群との比較ではV - 3群での近江系の退潮傾向は確実に進行しており、それは甕だけではなく、他の近江系ないし近江経由と推定される形式にもみられる。そのことから、V - 2群とV - 3群との土器組成は、とくに北加賀で大きく変化した印象をもつが、「合成した北陸型土器組成」故のあり方とみたい。また、該期での近江系の退潮は、北陸ではなく近江の事情との予測でいる。

祭式土器との関連では、高杯は有稜形式からなり、北陸型の鉢形高杯は確認していない。対して北近畿系の台付鉢は定量みられ、平面梯川のSK41の事例(図8 - 2)を示したが、2群の当該形式(図5 - 13・14)と比較すれば明らかなように、口縁部の伸長で区別でき、先行する(注9)。器台は山陰系、北近畿・近江(経由)系がみられ、V - 3群には山陰系が増加し、口縁部の伸長をはじめ。が、変化の方向は一様ではなく、北陸型に収束する2群の変化とは区別できる。北陸型の形式は成立していない。鉢では近江系、北近畿系、山陰系等がみられるが、組成に占める割合は少なく、粗製の形式が目立つ。桜田・示野中SB10の北近畿系の鉢(図8 - 1)は、V - 3群の事例で、北陸型とした鉢E類や高杯D類の先行型式とできるが、2群の鉢E類の初現形式(図1 - 26)と比較すれば、これまた口縁部が伸長していない。有段小型壺では、しばしば脚をもつが、ソロバン玉状の体部に代表される加飾性に富んだ山陰系形式が僅かにみられるようであるが、時間軸での検討を進めたい。細頸壺は確実にみられるが、精製品は出現していないようである。少なくとも北陸型とした有段の形式は見られない。

その他形式では、ワイングラス形の鉢は台付きの形式も含め定量的にみられ、中でもV - 3群には大型化し増加する。該期での祭式土器群の核的形式とできようか。体部に突帯をもち加飾したタイプは2群で盛行するとみているが、時間軸での整理を進めたい。壺では口縁部に擬凹線文と円形浮文を施した播磨等東部瀬戸内系譜と推定している広口壺が多くはないが組成としてみられる。長頸壺はV - 3群で増加する。箱形、皿型の小型高杯も確実にみられるが、形態差がみられる。甕組成の主体をなす有段擬凹線文甕のV - 3群と2群との型式比較では、口縁部の伸長がわずかなものを定量含み、底部が大きく肉厚である。

該期の土器様相について繰り返せば、土器様式を構成する形式が、山陰系をはじめ多地域出自のいわゆる外来系の形式からなることにある。北陸で変容した形式を含もうが、北陸型形式からなる2群

以降のあり方とは決定的に異なる。祭式の詳細は明らかにできないが、少なくとも器台とセットとなる小型形式は顕在しない。小型形式に台付型式が目立つとの印象ももっている。また、それら形式も北陸外形式からなる。加飾性でも、スタンプ文等がみられるが、その盛行は2群期以降の特徴とみたい。そして、北陸型への基本的変化である甕、壺、高杯、器台等々、すべての形式にみられる口縁部の伸長傾向は未熟である。

2) 2 群

地域固有形式(北陸型)の出現・定着・開花期で、それら形式による北陸型祭式が確立するきわめて大きな画期と考える。そして、前段階での広域土器圏から離脱した北陸型形式による土器圏を形成する。V-2・3群での外来形式からなる土器様式とは際違った違いを見せる。該期は、祭式土器での初現形式主体の2-1群段階と、定型化形式主体の2-2群段階に二分する。標式資料は表1のとおりである。越中での江上A遺跡SD01、SD03資料は溝資料ではあるが、2-1群段階の様相を知る上での好資料と判断している。

祭式土器では、2-1群で、高杯、器台、有段細頸壺での北陸型の初現形式、有段鉢、有段小型壺での北陸型へと変容した初現形式が確実に成立する。そして、大型化と加飾性はピークを向かえる。例をあげれば、スタンプ文は該期でもっとも盛行する。その推移は、2-1群では集落遺跡等でも普遍的にみられ、2-2期には集落遺跡等では減少するが、後半段階以降、使用の場の限定と形式の特定化が進行したためと予測している。

また、該期は、有段鉢、有段小型壺等の器台とセットとなる形式の増加が大きな特徴といえる。越中の事例であるが、2群併行期の江上A遺跡では、1359個体内、小型品が100個体近くあり、鉢の組成比は5%とのデータがある(久々1984)。また、加賀ではV-3群の資料を含むが、2-1群を主体とする竹松遺跡で7%とする(安 1992)。器台+鉢、器台+有段小型壺・細頸壺、あるいは器台+ワイングラス形鉢という、器台を軸とした祭式セットが該期に確立したとみたい。そして、再三触れているが、そのセットは北陸型の形式により構成される。ただ、2-2群での有段鉢の出土量は、少なくとも北加賀では、能登と比較して少ないとの印象ももっている。遺跡差、単に該当遺跡がみつかっていないということも含め、検討すべき課題である。

祭式土器の検討では扱けなかった器種・形式やその組成も大きく変化する。壺では二重口縁壺が出現。対して、長い口縁部もつ長頸壺は前半期に衰退する。通常の高杯や短頸壺は、北加賀では能登と比較して目立たないようであるが、該期で有段化を進める。細頸壺は精製品と化し、定量的にみられるようになる。V群に定量見られたくだんの広口壺は、2-1群期の内に衰退する。高杯では、箱形の杯部をもつ小型高杯が増加する。V群にもみられたが、該期で定型化を進める。類例は北陸外にも見られるが、北陸型としての抽出を試みたい。ワイングラス形鉢も引き続き定量的にみられ、台付の形式は加飾性を増し壺形態へと型式変化をはじめ。対極として、V-2・3群での形状を維持しつつ推移する形式も見られる。この事は、他の形式においてもみられることである。甕は、先行する桜田・示野中SK70の事例が該当する可能性をもつが、底部を欠いていることと、口縁部形が甕とすれば定型化しているとせざるを得ないことから保留すれば、確実な事例は該期に出現するとできる。2-2群には盛行する。

甕組成は、竹松C遺跡では有段擬凹線文系が50%を優に超え、有段無文系が20%程度、くの字系は10%に満たない(安 1992)。有段擬凹線文系が優勢な在り方は加賀の特徴とできるが、高橋セボネ遺跡では、報告書掲載図110点余からの集計であるが、有段擬凹線文系が30%程度、有段無文系が60%弱、くの字系は10%余、近江系が10%弱の組成比をもつ。加賀にあって有段擬凹線文系の頻度の

低い高橋セボネ遺跡の評価は別に検討する必要があるが、それでも30%程度を占めている。有段擬凹線文系の堅調に加賀と能登・越中との違いをみいだせよう（注10）。また、有段無文系を山陰系譜と北近畿・近江系譜のものに区別すれば、その違いは一層明瞭になろう。そして、加賀では有段擬凹線文系を維持し、主体形式としての推移をたどり、月影甕が生成される素地が用意される。対して、能

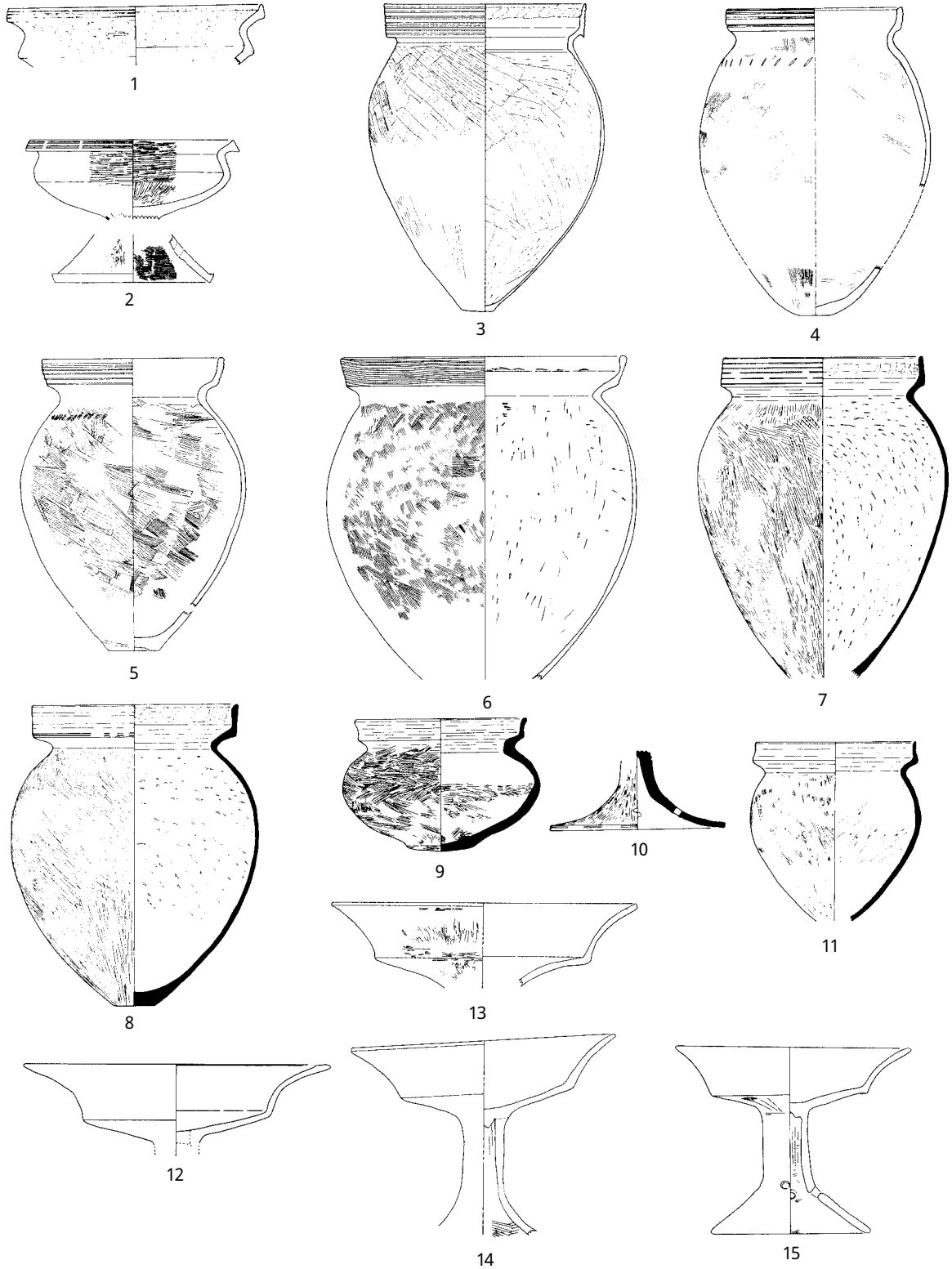


図8 長泉寺 SK55他の土器 (S = 1 / 6)

登・越中では有段擬凹線文系と近江系主体の組成から有段無文系と「くの字」系の組成に大きく変わる。加賀と、能登・越中との甕組成の差違は、月影甕が成立する3群期に決定的になるとできるが、該期にその動きが明瞭になることは確かである。

3) 3 群

2群での地域固有形式(北陸型形式)からなる土器組成を継承し、さらなる展開を示す段階とみる。検討対象とした祭式土器はその全てが継承される。その他の形式でもフラスコ形鉢(台付)箱形杯部の小型高杯、甕等々が継承され、細別形式はともかくとしても該期で衰退する形式の抽出は難しい。たしかに、長頸壺は加賀では衰退するが、能登・越中では引き続き盛行する。その中において該期は、2群の形式を継承しつつ、型式変化を進めるとともに新たな形式を生み出し、祭式セットの構成も変化させる。月影型とできる祭式土器群を形作るといえよう。月影甕一色の甕組成は異様でもある。また、該期には北陸南西部での月影甕、装飾器台の出現に象徴されるように、北陸内での様相差は構成形式の頻度差から、保有形式の違いとしての動きをさらに顕在化させる。北陸北東部と南西部の土器様式の違いが一層明確になるといえるが、それは、北陸内での土器様式圏の分解であるとともに、北陸北東部、南西部を単位とした統合の進展ととらえることができる。標式資料は表1の通りである。

型式変化では、法仏式での大型指向から一転して小型化をはじめめる。高杯に象徴的で、全ての形式で小型化を指向。V群以来の有稜高杯は、小型の竹生野型式(北野1991)等へと変異する。北陸型鉢形高杯も小型化する。その型式変化は、口縁部の伸張度や開き具合の程度で説明されていたが、そのこととも連動しないではないが、該期での主要な変化は、一部細別形式を除き、鉢状の杯部径絶対値の縮小という変異にあるとしたい。また、堀は該期での高杯の変化について高杯Dの出現をあげているが(堀2002)C類の新しい型式との区別が分からない。高杯Dを筆者の定型化高杯II類として良いなら、その出現は該期を遡る。その他の形式では、小型高杯は杯端部を丸く作った箱型へと斉一化する。台付ワイングラス形鉢は壺形へと変容。また、二重口縁壺が増加し、頸部に凸帯をもった月影型される二重口縁大型壺も該期には定型化するようである。これらを月影型への型式変化としたい。

新たな祭式土器の出現では、装飾器台の出現が特筆される。出現時期は、法仏式とする見解と、月影式とする見解(楠2003)が見られるが、現状の資料では、法仏式とできる事例は確認できていない。

祭式セットでは、有段鉢が減少し、有段小型壺との構成比が逆転する。形式でも定型化形式II類のBb類に主体が移る。ちなみに、3群を主体とする大友西SD01、同・東SD01では、壺36点に対し鉢は5点(金沢市 2002)。また、該期の標式とした一塚SX22と、ほぼ同時期のSX21では、壺11点、鉢は2~3点、能登で標式とした吉崎・次場S-3b土坑でも壺3に対し鉢は見られない。該期に祭式セットの大きな変革があったとしたい(注11)。この変化は装飾器台の出現と連動させとらえる必要がある。装飾器台は器台と鉢、ないしは壺ないしは鉢と結合したものと理解されているが、器台+鉢ないし壺等からなる法仏式での祭式を継承・発展そして形式化の動き中で成立した事は確かである。また、この変化と連動していると予測しているのが、北陸型器台とした形式の器台に占める組成比の減少である。北陸型器台による祭式セットの法仏型規範の変質とできようか。そして分布域も北陸東北部で薄く、北陸南西部でも南加賀や越前等で濃くなるとの印象をもっている。

祭式土器構成の変化と装飾器台の出現を合理的に説明できるに至っていない。また、この変化は、北陸外地域での変化と連動した動きと想定しているが、対象地域やどのような変化に対応した動きなのかも検討できていない。該期は、北陸外地域の動きを敏感に受け入れる中で、法仏式での祭式を継

承しつつ月影タイプとできる型式を作り出し、地域固有型式を堅持、一層の固有化を進めた段階として評価したい。

3) 4群から9群以降

4群～6群は、北陸系土器の移動、外来系土器が波及する時期にあたる。土器の移動により、外来の祭式形式が波及し、北陸型の祭式形式と祭式様式は変質・衰退する。該期は、北陸型の祭式形式を生み出し、地域固有型式による祭式を顕在・開花、展開させてきた2群から3群の流れを大きく転換する画期といえる。

4群からの変化は、外来形式が波及する中で、北陸型形式が変質しながらも存続する4群～6群、在来の祭式形式が衰退し、畿内系祭式形式に急速に収れんしていく7・8群を経て、畿内系祭式形式からなる画期としての9群以降の段階へと移行すると整理できる。ただ、北陸北東部に関しては、北陸型形式が7群～8群、少なくとも7群までは堅調で、北陸南西部とは異なる推移をたどるが、それでも9群には、畿内系の祭式に大きく転換するようである。

4群から6群での北陸型形式に関し補足するが、高杯は小型化を一層進め、東海・近江系形式に置換。器台は北陸型、あるいは3群に見られた形式が衰退し、小型器台に置換されるが、これら器台の変質・衰退と小型器台の出現とは連動しない可能性がある。そのことは、有段小型壺や細頸壺等の有台化が、小型器台の定量的波及以前の4群に進行することからも窺える。また、祭式セットでは再び有段小型壺から有段鉢に主体を移動する(注12)この変化に関しては、2群での様相の再興としてではなく、該期以降にみる「北陸」外地域での鉢の盛行との関連で検討を進める必要がある。その点で、鉢の形状は在来の形式とできるが、その祭式の内容まで北陸型とできるかどうか、検討の必要がある。そして、僅かではあっても、該期での高杯、器台、有段鉢等の北陸型祭式土器は、器種間で衰退の時期にズレがみられる。北陸型祭式解体の過程を検討する上で重要な事象と考えている。

4) 月影式と法仏式の境

筆者は法仏式と月影式とは、北陸型形式の顕示を基調に推移した大別様式に包括してとらえる。また、該期の北陸北東部では南西部での月影甕や装飾器台等、地域形式を象徴する顕著な形式の出現がみられず、大枠では2群の動きを継続する。その点で、北陸北東部では、法仏式併行期と月影式併行期とは、型式差による時間軸での区分はともかくとしても、形式の消長や、組成での区分は難しい。このことも法仏式と月影式を大別様式としてとらえるにあたって考慮したことであるが、月影式での月影甕や装飾器台等の地域形式の顕在を、北陸北東部の状況と対照させてとらえていく必要もある。なお、北陸北東部に南西部のような動きが全くなかったとはしない。念のために申し添える。

この辺りを踏まえるならば、月影式と法仏式の境の検討には、2-1群の評価は欠かせない。2-1群を北陸型形式の出現期として評価するなら、2-2群での定型化形式の成立は、その帰結としてとらえられ、月影式との境は、北陸型形式のさらなる変化や展開等に求めることになる。この評価をとらなければ、月影式に見られる北陸型形式の成立にその上限を求めることとなり、月影式の上限は2-2群、さらには2-1群へと遡上する。

法仏式と月影式の境を具体的事例でもって検討する。高橋セボネSK54、一塚SX22,同・SX21、大友西SE18(古)はあるいは能登の事例であるが吉崎次場I-3b土坑は、月影甕や共伴する高杯の型式観から、ほぼ同時期の土器群ととらえている。これら土器群は、高杯では、V群からの有稜高杯はみられず、竹生野型等月影型の高杯が出現、北陸型鉢形高杯はくだんの杯部径が縮小したタイプか

らなる。祭式セットでは有段鉢から有段小型壺に比重が移行、そして、出現期の月影甕をもち古相の装飾器台を伴う。この様相は、先で月影式（3群）の特徴とみた諸要素を備えているとできる。当該土器群から月影式とすることには異論はなからう。高橋セボネ SK54等々の段階を月影式とすることは良しとしても、月影式と法仏式の境はどこか。月影式とする諸要素の出現時期（遅速も含めて）の検討も課題として残っている。

定見は用意できないが、作業仮説を提示しておく。図8の5～7は、2-2群期には確実にみられる甕形式。出土頻度は高くないが、東山陰から信濃までの広範囲に分布しており、それら地域間での併行関係、時間軸の特定に有効な形式と考えている。月影式成立前後では、高橋セボネ SK18（5）

御経塚オツソ SI02（6） 長泉寺 SK55（7）の型式変化が想定され、長泉寺 SK55の事例が確認できる最新型式（註13）である。そして、長泉寺例は月影甕成立時に限りなく近い時期の所産と想定しているが、月影甕との共件事例は確認していない。消極的な根拠であるが、現時点では長泉寺 SK55 最古の月影甕、との予測もできよう。当該型式の「型式」帰属では、高橋セボネ SK18は供伴資料から法仏式、御経塚オツソ SI02の型式は、図面を提示しなかったが、供伴資料には月影式とする要素を抽出できない。微妙ではあるが法仏式としたい。対して、長泉寺 SK55の型式は、図8の8～11の共伴資料しかなく、10の有段小型壺がわずかに月影式に属する可能性を示唆する程度である。一方、3の八里向山 A SI101A の事例は、高橋セボネ SK54等々の段階とできる月影甕で、7と形状の似たものとして抽出した。7との比較では、口縁部の形状はともかくとして、胴部最大径の位置がやや低いことから、一般論として新しいといえるが、両者は形式を異にしており時間差と決めつける事はできない。

図8の12～15は、法仏式での有稜高杯と月影型高杯との過渡的形式と考えている形式。ただし、当該高杯が型式変化させ月影型高杯になるとは理解していない。12が中村ゴウデン8号住、13・14が先での高橋セボネ SK18、15は先で月影式とした高橋セボネ SK54の出土資料である。中村ゴウデン8号住は法仏式の後半、2-2群でも前半に遡らないと考えている資料で、高橋セボネ SK18の13・14との型式比較では僅かであっても古いとでき、他の供伴資料の在り方とも矛盾しない。高橋セボネ SK18と高橋セボネ SK54の14と15の比較では、これまた微妙であるが14が古いとできる。そして、先にみた高橋セボネ SK18（法仏式） 御経塚オツソ SI02（法仏式） 長泉寺 SK55 高橋セボネ SK54（月影式）時間軸が正しいとするなら、高橋セボネ SK18と高橋セボネ SK54の高杯型式の間に、御経塚オツソ SI02と長泉寺 SK55の土器群が入ることになる。

以上は、仮定上の議論であって、現状では、長泉寺 SK55甕型式が、高橋セボネ SK54等々の段階に先行するとの保証もない。ここでは明確に法仏式とできる高橋セボネ SK18と月影式とできる高橋セボネ SK54の間に、当該高杯形式では僅かの型式差しかみられないことを指摘しておく。この事を踏まえ、御経塚オツソ SI02を法仏式、高橋セボネ SK54等々の段階を月影式とし、長泉寺 SK55については、作業仮説として月影式に含まれる可能性をもつ段階とし、今後検討を進めることとしたい。

最後に、冒頭にも触れた塚崎21号竪穴の帰属を検討する。当該資料は、二時期以上の重複があるとしなければ理解できないので、その古段階の標式的資料を対象とする（図4-14・16・18・19、図8-4）。図8-4の甕はやや変容しているが、くだんの甕形式に属し、高橋セボネ SK18の形式に類似、少なくとも御経塚オツソ SI02の型式よりは古い。図4-14の鉢形高杯は、脚部が小さく口縁部の伸張が著しいが、鉢形の杯部径は縮小していない。法仏期の形勢を保つ。図4-16の器台は、定型化形式Ⅰ類ともできる形状をもつ。図4-19の鉢は宿東山 SG-01と同一形式に属するが（図6-66）、深い作りで明らかに古く、全形は鹿首モリガフチの鉢（図5-19・22）に類似し、法仏式でも終末と

はできない。組成では検討を満すまでの資料はないが、祭式セットでの有段鉢が複数みられるのに対し、壺は図を提示しなかったが、形式、帰属不明の底部片のみである。法仏式に盛行した器台＋有段鉢の祭式セットを保持していたととらえるのが妥当であろう。以上は、いずれもが法仏式の要件に沿うもので、月影式とできる要件は確認できない。塚崎21号竪穴古段階資料は、法仏式とでき、先の検討での、高橋セボネ SK18より古くとも新しくなることはない、としておきたい。(注14)

5 まとめ

V群から9群までの祭式土器からみた推移を、北陸型形式が少なくとも顕在せず、山陰、北近畿、近江等形式からなる段階(V-2・3群)、北陸型形式とできる固有の地域型式を顕在させた段階(2群、3群)、北陸型の形式が変質・衰退し、畿内系形式に収れんする段階(4群から8群)、畿内系形式からなる段階(9群以降)として把握した。

そして、法仏式と月影式を、それぞれ独自の展開をみせる別個の様式としてではなく、北陸型形式の成立・定着、開花・展開に至る一連の動きを共有して推移した大別様式に包括してとらえ、の段階に包含した。月影式での変化や変革を軽視するものではないが、法仏式からの連続性を視点に該期の土器群の推移をとらえ直したい。

一方、法仏式に関しては、既往の法仏I式ないしは法仏式古段階を法仏式から分離し、V-3群とした。該期を法仏式とする理解は、楠編年、栃木編年のみではなく、少なくとも県内では認知されていたといえ、筆者もその理解に与していた。V-3群を法仏式に含めることは、地域固有形式の出現という顕著な特色を曖昧にし、月影式での地域固有形式の顕在の強調と、法仏式をその前史とする理解の助長につながると考える。そのことは、法仏式と月影式の境をみえにくくすることでもある。

V-2・3群は、山陰等北陸外地域の形式で北陸の土器組成が形作られる段階とした。北陸固有の形式が無いとはできないであろうが、大枠で、外来系形式により北陸の土器群が形成(合成)されたとの指摘は可能であろう。このことから、北陸はこれら地域を含めた広域土器圏に含まれていたとできようが、山陰系・北近畿系・近江系形式等々としたように、一方では地域型式が存在していた。その在りようについての検討が必要であるが、地域型式をもつ地域と北陸での在り方との違いを如何に理解していくのか、新たな課題が生じた。

そして、2群併行期になると、丹後・山陰等々の地域でも、一層地域色の顕著な地域型式を生み出していく。その中で、広域土器圏が分解の方向に向かうといえる。北陸もこの動きに連動する。該期での地域色の生成を視点とした北陸外地域での動向の把握とその併行関係の確定は、法仏式と月影式を同一様式としたことにより、一層、重要な課題となった。

月影式は庄内式と併行する時期をもつ。庄内式については弥生土器から外す理解が一般的とできようが、畿内周辺部ではその併行期をV様式の流れの中で理解する見解がみられ、庄内式の特徴が及ばなかった地域も確実に存在する、とされる。また、大和においても、典型的な庄内期は除くが、古段階の一部をV様式からの流れでみる理解もある。(藤田・松本1989)。筆者の法仏式と月影式を同一様式でとらえるとした理解は、畿内周辺部での理解に共通するともできるが、先に見たように月影式にはいくつかの変化、変革が見られた。この変化はどこからの影響か。また、月影甕の成立は庄内甕の成立に先行しても遅くならないとの予測でもいる。庄内式には布留式に継起する形式が見られる。弥生土器から外す理解に異論を唱えるつもりは毛頭ないが、該期での土器変化を、庄内式の動きのみで説明できないのも事実としてある。

該期での、型式名の扱いについては、2群と3群を一括した型式名を冠するのが、本稿の趣旨にもっとも合致するが、法仏式の段階と月影式の段階は区別が可能であるのと、研究史も踏まえ型式名を踏襲することとした。ただし、繰り返すがV - 3群は法仏式から除外する。筆者の中では、5群から8群までの大別様式の前半部分を白江式としたことと同じ方法と理解している。

最後になるが、本稿を成すに当たっては、2 - 1群とした土器群の評価が大きく係わっている。当該土器群は、従前あまり議論の対象とはなっていなかったように思う。筆者も当該土器群に注目する以前は、2 - 2群の多くを月影式とする方向で検討を進めていた。2 - 1群を北陸型形式の成立期と位置づけた事で、2 - 2群をその開花期とできた。また、漆町編年での(+)群も編年時に模索していた一塚SX22段階に戻すことができた。本稿の根拠とした2 - 1群土器群について、検証をお願いしたい。

注1 土器は実用的機能のみで説明できるものではなく、何らかの形で祭祀と係わると理解している。その点で特定形式をとり上げ祭式土器とするのは適切でないとも考えている。ここでは、墳墓や祭祀関係と推定される遺構でみられる形式の中から、出土頻度が高く編年の推移を検討するのに有効と思われる形式を任意抽出し、それらの名称として暫定的に祭式土器と呼んだ。

注2 猫橋式は、表1の試案でのV - 1群とV - 2群があてられている。南加賀の猫橋遺跡出土品により型式設定されたが、加賀全域を包含した型式名として妥当性や、該当時期幅と様式的区分とが整合しているのか等、未検討部分を残している。ここでは、単に法仏式に先行するV様式併行期の土器群として用いたが、詳細は、今後の検討に委ねたい。

注3 月影式は、北陸を代表する弥生終末の土器様式として、あるいは最古の土師器として、学会に周知されてきた。月影式を独立した様式としてことさら強調した論考は知らないが、学史の重みと月影甕一色の甕組成は、独立した様式の印象を与えないはずもなかった。地元の者であればなおさらである。

注4 3,1)項で触れる北陸型鉢形高杯定型化形式Ⅱ類、あるいはA類の定型化形式Ⅰ類等を指す。

注5 定型化形式Ⅰ類については、初現形式が北陸型とできる系譜の形式と外来形式の型式的特徴をもつものとは区別が必要と考えている。ここでは整理できなかったが前者は定型化形式Ⅱ類に近い評価が必要であろう。

注6 28・29についてはA類に含めたが、細別形式として抽出できると理解している。

注7 V - 2期の北加賀の白山市八田小鮎遺跡、同旭遺跡SI64では、近江系が40~50%を占め、有段擬凹線文系は30%に留まる。対して、南加賀では良好な一括資料はなくV - 1群の資料を含む猫橋1号溝では近江系は希で、有段擬凹線文系がそのほとんどを占める。V - 2群での加賀での顕著な地域差といえる。V - 3群になると、北加賀でも近江系が急速に衰退するようである。金沢市桜田示野中SB10、SK70等では有段擬凹線文系が50%を超え、近江系は確認できない。南加賀の平面梯川101平地建物関連遺構でも、有段擬凹線文系は60%程度で近江系は確認できない。

注8 2群資料も含むが越中・下老子笹川の老子Ⅱ式では30%弱みられ、能登・吉崎・次場I - 3号溝でも定量的にみられる。該期の北陸での甕組成については、吉崎・次場で有段擬凹線文系1%とされる(今井1994)など極端な事例が報告されており、大枠地域単位での要約では済まされないが、能登・越中では、有段擬凹線文系が少なく、近江系をはじめ有段無文系、くの字系の頻度が高い。

加賀では有段擬凹線文系が主体とでき、時期の下降とともにその頻度を増すことができる。この動きは2群期での甕組成の推移につながる。

注9 該期には、北近畿系、山陰系等の形式に、2群で北陸型の形式へと推移する先行型式がみられるのは確かである。こ

れら形式に関しては、V - 3群と2群との型式区別と組成の中での位置づけ、評価を明確にしていく必要がある。北陸型形式の出現時期について付記すれば、表1でV - 3群の標式とした土器群には、先の3項で検討対象とした北陸型祭式土器は確認されていないし、他の関連資料にも現段階で矛盾する事例はない。そして、甕、高杯等普遍的にみられる形式からみた時間軸でも齧齶はないと考えている。ただ、遺構資料の場合、形式の偏在は避けられず、組成での時間軸の決定には限界がある。北陸型とした形式との供伴状況については、今後とも検証を続ける必要がある。このことは、組成からの検討、型式からの検討のいずれにおいてもつきまとう課題である。

- 注10 該期の甕には、有段甕と「くの字」甕との中間の形態の型式が目立ち、さらには近江系甕の変容形式が混在し、厳密な構成比を求めるのは難しい。が、能登・越中では、有段擬凹線文系がV群で30%程度のものが該期で15%程度に減少、有段無文系は同じく15%程度から25～30%程度に増加し、遺跡によってはさらに多い事例がみられるようになり、「くの字」系も25%程度から40%超程度に増加する。そして近江系甕は30%程度から極端に減少する（岡本2006、谷内尾1984、土肥1986）。
- 注11 この変化は能登、北加賀、若干の保留部分を残すが越中で確認しているが、南加賀、越前での動きは保留しておきたい。
- 注12 4群から6群を主体とする近岡ナカシマ2号溝の下層では有段小型壺11点に対し有段鉢7点、同溝の上層では有段小型壺1点に対し有段鉢8点、御経塚ツカダでの4群から6群の資料では有段小型壺3点に対し有段鉢は16点を数える。
- 注13 長泉寺の事例は月影甕との区別が難しく、月影甕とするか否かの結論が保留されているようである。底部は残りが悪く詳細な観察はできないが、赤化した被熱痕跡がみられる。このことから保留部分を残すが月影甕とはしない。また、形状でも図8での型式組列にスムーズに収まる。なお、高橋セボネSK18は、内面刷毛調整、御経塚オッソSI02は削り調整を採るが、帰属する土器圏での調整方法を反映した可能性もあり内面調整の違いを一概に時期差ととらえることはできない。
- 注14 先稿（田嶋2006）では月影式に含めた。2 - 1群の土器群が把握できていなかったことによる。ここに訂正する。

引用・参考文献

- 今井淳一 1994 「第2章 第2節 弥生土器」『吉崎・次場遺跡』羽咋市教育委員会
- 岡本淳一郎 2006 「第X章 4 砺波平野北部の古墳出現期土器」『下老子笹川遺跡発掘調査報告書（第五分冊）』富山県文化振興財団
- 折戸靖幸 1987 「第4章 まとめと若干の考察」『高松町中沼C遺跡』高松町教育委員会
- 河合忍・稲石純子 1997 「IV考察 翠尾I遺跡出土の弥生土器について」『翠尾I遺跡発掘調査報告書』八尾町教育委員会
- 木田 清 1998 「法仏式の認識と再確認」石川考古学研究会々誌41
- 北野博司 1991 「大型土坑について」『押水町冬野遺跡群』石川県立埋蔵文化財センター
- 久々忠義 1984 「II総括 B 弥生時代の時期区分」『北陸自動車道遺跡調査報告—上市町木製品・総括編—』上市町教育委員会
- 楠 正勝 1996 「第5章 まとめ」『西念・南新保遺跡IV』金沢市・金沢市教育委員会
2003 「裝飾器台の成立と展開」『庄内式土器研究』26
- 高橋浩二 2000 「古墳出現期における越中の土器様相」庄内土器研究22
- 田嶋明人 1986 「漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡I』石川県教育委員会
2006 「「白江式」再考」『吉岡康暢先生古希記念論集 陶磁器の社会史』
- 栃木英道 1987 「第5章 考察」『吉竹遺跡』石川県埋蔵文化財センター
- 栃木英道 1995 「第8章 考察」『谷内・杉谷遺跡群』石川県埋蔵文化財センター

- 土肥富士夫 1986 「B区4号溝下層土器」『矢田遺跡』 七尾市教育委員会
- 橋本澄夫 1968 「弥生文化の発展と地域性(北陸)」『日本の考古学』Ⅲ
- 浜岡賢太郎・吉岡康暢 1962 「加賀・能登の古式土師器」古代学研究32
- 藤田三郎・松本洋明 1989 「大和地域」『弥生土器の様式と編年』木耳社
- 堀 大介 2002 「古墳成立期の土器編年 - 北陸南西部を中心に - 」『朝日山』朝日町教育委員会
- 安 英樹 1992 「第9章 総括」『竹松遺跡群』石川県立埋蔵文化財センター
1993 「能登地域における布留礎について」庄内土器研究4
- 谷内尾晋司 1983 「北加賀における古墳出現期土器」『北陸の考古学Ⅰ』石川考古学研究会
1984 「第5章第1節鹿首モリガフチ遺跡出土土器の様相と占める位置」『鹿首モリガフチ遺跡』石川県埋蔵文化財センター
- 湯尻修平 1986 「能登・邑知地溝帯における「月影式」併行期の土器群」『シンポジウム「月影式」土器について(報告編)』石川考古学研究会
- 吉岡康暢 1976 「Ⅳ総括 1土器の編年と遺構の年代」『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』石川県教育委員会
- 吉岡康暢 1991 「北陸弥生土器の編年と画期」『日本海域の土器・陶磁器』六興出版

参考・引用報告書

石川県

石川県立埋蔵文化財センター・(財)石川県埋蔵文化財センター

- (能登) 1984 『鹿首モリガフチ遺跡』、1986 『徳前C遺跡(ⅡⅢ)』、1987 『宿東山遺跡』、1988 『竹生野遺跡』、1988 『吉崎・次場遺跡』、1991 『押水町冬野遺跡群』、1987 『宿東山遺跡』、1995 『谷内・杉谷遺跡群』、1995 『徳前C遺跡』
- (北加賀) 1972 『古府クルビ遺跡』、1976 『北陸自動車道関係調査報告書Ⅱ』、1976 『北陸自動車道関係調査報告書Ⅲ』、1990 『倉部』、1991 『畝田遺跡』、1991 『金沢市寺中B遺跡』、1995 『北安江遺跡』、2002 『藤江C遺跡Ⅳ・Ⅴ』、2004 『近岡遺跡』
- (南加賀) 1977 『加賀市二子塚遺跡群調査概要』、1988 『白江梯川遺跡Ⅰ』、1989 『漆町遺跡Ⅲ』、1989 『高堂遺跡』、1995 『平面梯川遺跡Ⅰ』、2000 『小松市平面梯川遺跡』、2004 『猫橋遺跡』、2007 『猫橋遺跡』

市町村教育委員

- 宇ノ気町教育委員会 1987 『宇ノ気町鉢伏茶白山遺跡』
- 高松町教育委員会 1987 『高松町中沼C遺跡』
- 志雄町教育委員会 1995 『二口かみあれた遺跡』
- 羽咋市教育委員会 1986 『柴垣須田遺跡』、1994 『吉崎・次場遺跡』、1999 『太田ニシカワダ遺跡』、2003 『滝谷八幡社遺跡』
- 押水町教育委員会 2003 『今浜A遺跡』
- 七尾市教育委員会 1982 『七尾市奥原縄文遺跡・奥原遺跡』、1986 『矢田遺跡』

金沢市、金沢市教育委員会(金沢市埋蔵文化財センター)

- 1983 『金沢市西念・南新保遺跡』、1983 『金沢市二口六丁遺跡』、1983 『二口町遺跡』、1985 『金沢市新保本町東遺跡・西遺跡』、1986 『金沢市南新保D遺跡』、1987 『金沢市南新保三枚田遺跡』、1986 『金沢市近岡ナカシマ遺跡』、1987 『金沢市松寺遺跡(第2次)』、1987 『金沢市押野西遺跡』、1990 『金沢市下安原遺跡』、1991 『金沢市新保本町東遺跡』、1991 『桜田・示野中遺跡』、1995 『上荒屋』、1995

- 『金沢市額新町』、1996、『金沢市西念・南新保遺跡Ⅳ』、2002『金沢市千田遺跡』、2002『金沢市大友西遺跡Ⅱ』
- 野々市町教育委員会 1984『御経塚ツカダ遺跡発掘調査報告書Ⅰ』、1989『押野夕チナカ遺跡』、1992『押野ウマワタリ遺跡』、1996『高橋セボネ遺跡』、1998『長池・二日市・御経塚遺跡群』、2001『御経塚シンデン遺跡』
- 松任市教育委員会 1995『旭遺跡群』、1997『松任市竹松遺跡』、1988『松任市八田小鮎遺跡』、1989『松任市中村ゴウデン遺跡』、2000『松任市中奥・長竹遺跡』、2007『白山市北安田舟橋遺跡 白山市北安田南出遺跡』
- 小松市教育委員会 2004『八里向山遺跡群』
- 福井県
福井県教育庁（埋文センター）
- 1986『六条・和田地区遺跡群』、1994『長泉寺遺跡』、2007『東古市縄手遺跡』
- 福井市 1990『福井市史 資料編1 考古』
- 清水町教育委員会 2002『甌谷』
- 三国町教育委員会 1979『西谷遺跡』
- 富山県
(財)富山県文化振興財団 2006『下老子笹川遺跡発掘調査報告』(財)富山県文化振興財団
- 大門町教育委員会 1981『串田新遺跡Ⅱ』
- 上市町教育委員会 1982『北陸自動車道遺跡調査報告 上市町土器・石器編』、1984『北陸自動車道遺跡調査報告 上市町木製品・総括編』
- 婦中町教育委員会 2002『富山県婦中町千坊山遺跡群試掘調査報告』、2003『富山県鍛冶町遺跡発掘調査報告』

石川県埋蔵文化財情報

第18号

発行日 2007(平成19)年10月25日

発行 財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920 1336 石川県金沢市中戸町18番地1
TEL 076 229 4477 FAX 076 229 3731

URL <http://www.ishikawa-maibun.or.jp/>
E-mail address mail@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 株式会社 橋本礎文堂

© (財)石川県埋蔵文化財センター